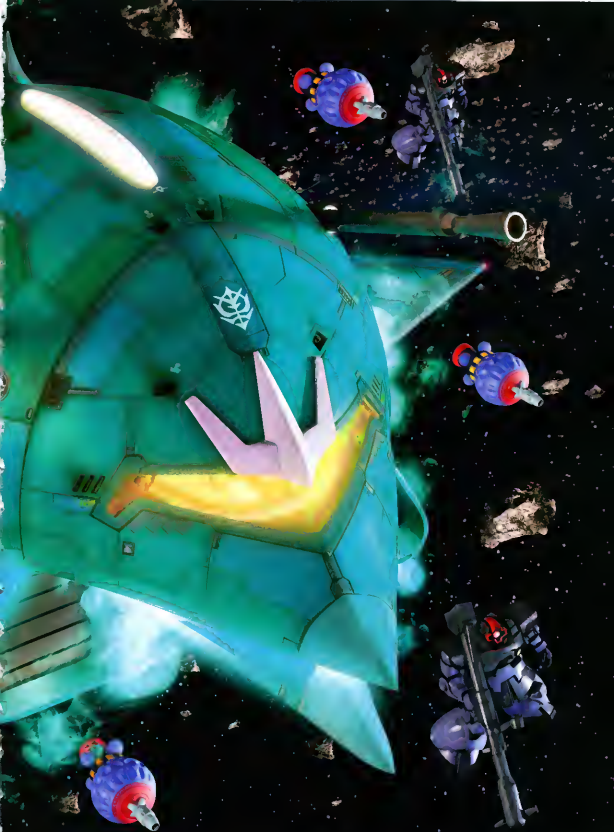


Contents

- 008 Introduction
ニュータイプ専用機
強大な敵から物語を支える存在へ
- 010 カラー設定画&イラストラインナップ
- 014 ニュータイプ専用機の戦場
- 020 一年戦争期の
ニュータイプ専用機の系譜
- 022 各種機体解説
ブラウ・ブロ/エルメス/サイコミュ試験型ザク/
サイコミュ高機動試験型ザク/ジオング/
G-3ガンダム/アレックス
- 034 コラム ニュータイプと兵器の関係とは!?
- 036 グリプス戦役から
第二次ネオ・ジオン戦争期に
生まれたニュータイプ用技術
- 038 各種機体解説
キュベレイ/Zガンダム/サイコ・ガンダム/
サイコ・ガンダムMk-II/バウンド・ドック/
ジ・O/ZZガンダム/フルアーマーZZガンダム/
量産型キュベレイ/ザクⅢ改/ゲーマルク
クイン・マンサ
- 058 第二次ネオ・ジオン戦争期
以後のニュータイプ専用機
- 060 各種機体解説
vガンダム/ガンダムデルタカイ/
フルアーマー・ユニコーンガンダム
/ユニコーンガンダム2号機 パンシィ・
ノルン/サザビー
/ネオ・ジオン系のニュータイプ専用機
/クシャトリア・リベアード/シャムブロ
/ネオ・ジオング/ペーネロペー/
ミガンダム/ラフレシア
- 082 コラム ニュータイプ機の発想の帰結点
- 084 THE対決
●フルアーマー・ユニコーンガンダムVSバンシィ・ノルン
●量産型キュベレイVSドーベン・ウルフ
●クイン・マンサVSa・アゼール
●シャムブロVSサイコ・ガンダムMk-II
●キュベレイVSジ・O
●アレックスVSジオング
- 090 ニュータイプ専用機の武装
- 094 宇宙世紀におけるサイコミュ兵器の興亡
- 098 徹底検証
ニュータイプ専用機
その戦略・戦術的な意義とは!?
- 102 MS&MA設定資料
- 126 MS&MAスペシャル





MAN-08 エルメス MS-09R シャア専用ゲルグ MS-09R リック・ドム







AMX-004 キュベレイ vs PMX-003 ジェノム vs MSZ-006 ゴッドガンダム



XMA-01 ラフレシア vs F91 ガンダムF91





強大な敵から物語を支える存在へ ガンダムワールド特有のニュータイプ専用機

ニュータイプ専用機

その登場は「機動戦士ガンダム」という作品にとってもエポックメイキングといえるものであった。

そもそも、「機動戦士ガンダム」という物語の構想段階において、主人公アムロ・レイがメカニクスと実力が向上していくことを、「エスパー」という設定にする案もあったという。そして、実際の物語においては、これが「人類の革新」であるニュータイプという設定へと進化していった。

この「エスパー」として「ニュータイプ」という存在は、当時のSFとして「ガンダム」を見ていたコアなファンからは「荒唐無稽」と非難されたというが、東西冷戦という時代背景において、人と人が分かり合えることができるという「人類の革新」を指した、という意味では、時代にマッチしていた発想ともいえるだろう。戦争が舞台である物語のフィナーレを感動的にまとめることにも貢献した。

また、物語後半で、ほとんど実力を増していくアムロ・レイにとって、強大な敵をわかりやすく表す、という意味でも秀逸なアイデアといえるだろう。

敵として登場するニュータイプ専用機は、当初モビルアーマーという、わけのわからない形状非人型の機体であり、四方八方から攻撃を仕掛ける、オールレンジ攻撃という超絶的な戦法は、物語後半を大いに盛り上げた。

そして純粋である「機動戦士Zガンダム」以降、ニュータイプ機は強大な敵のひとつの形として、また「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」や「機動戦士ガンダムUC」などでは、物語のクライマックスで奇跡を起こす要素のひとつとして、各々

重要な役割を担うことになる。

まさに宇宙世紀0100年頃までが舞台の「宇宙世紀もの」の作品にとって「ニュータイプ」と「ニュータイプ専用機」という存在は、それ抜きで作品が成立することがないほどのキーワードとなっているのだ。その流れのなかで、他の世界観を扱った「ガンダム」シリーズにおいても、その影響を受けている作品は少なくない。

本書はそんなニュータイプが描き出すニュータイプ専用機、宇宙世紀0079年の一年戦争から、宇宙世紀0130年代頃の「機動戦士ガンダムF91」あたりまでのモビルスーツ、モビルアーマー群をまとめたものである。

これらの流れを眺めることは、壮大な「宇宙世紀サーガ」の一部分を見ることと同時に、個々の作品が作られた時点での「ニュータイプ」というテーマに対する、先人たちのアイデアと挑戦の数々を見ていく作業でもある。

「ニュータイプ」という、きわめて個性的で抽象的な設定を、クリエイターたちはどのように料理したのか。それは例えばビットやファンネル、インコムといったメカニカルなアイデアとして結実し、時には物語や世界そのものを動かすキーワードとして登場した。

ゆえに、ニュータイプ専用機の歴史を、物語上の歴史の順番に見ていくと、作品が作られた年代ごとに見ていくこと、この双方の流れが見えると、また別の意味合いを見出すことができることだろう。

そうしたニュータイプ専用機からは、時代性はもとより、「ガンダム」という作品群の本質の一部も見えてくることだろう。



カラー設定画& イラストラインナップ

このページでは、各ガンダムシリーズに登場したニュータイプ専用機ならびに関連機体のカラー設定画とイラストを掲載する。並びは映像作品から先に、MSVなどの関連企画の順で、それぞれ登場年代で区分している。本誌内で解説している機体については対応ページ数を付記した。



MMR-01
エルメス
⇒ P.024



MMR-02
ブラウ・フロ
⇒ P.022



PWS-003
シ・O
⇒ P.048



PWS-002
ガンダム
⇒ P.031



MMS-001
ジオング
⇒ P.028



NRS-005
パウンド・ドック
⇒ P.046



MEX-006
Zガンダム
⇒ P.040



ARX-004
(MMS-03)
キュベレイ
⇒ P.038



ARX-004
ドーベン・ウルフ
⇒ P.044



ARX-103
ハンマ・ハンマ
⇒ P.044



NRS-010
サイコ・ガンダムMk-II
⇒ P.042



MEX-010
サイコガンダム
⇒ P.042



ARX-009
ザク量産
⇒ P.054



ARX-005
量産型キュベレイ
⇒ P.053



ARX-004
キュベレイMk-II
ブルージュ専用機
⇒ P.039



ARX-004
キュベレイMk-II
エルビー専用機
⇒ P.039





MSZ-006
クシャトリヤ・
リベアード
⇒ P.072 UC



MSZ-006
クシャトリヤ・
ベツセルング UC



MSZ-006
クシャトリヤ
⇒ P.073 UC



MSZ-009
ネオ・
ジオング
⇒ P.076 UC



RXMS-102
ローゼン
ズール UC



MSM-03
ヤクト・ドーガ
[機付き] 仕様 UC



MSN-005
シナンジュ
⇒ P.077 UC



ユニコーンモード
RX-0
ユニコーンガンダム
⇒ P.065 UC



ANA-07
シャンフロ
⇒ P.074 UC



MSX-004
シルヴァ・
バレット UC



ダストロイ
モード
RX-100
パンシア
⇒ P.066 UC



ユニコーン
モード
RX-0
パンシア
⇒ P.067 UC



ダストロイ
モード
RX-0
フルアーマー
ユニコーン
ガンダム
⇒ P.064 UC



MSM-017
プロトギア
サイコ
ガンダム
⇒ P.043 MM



RX-78-3
G-3ガンダム
⇒ P.030 MSV



MSN-04
パーフェクト
ジオング MSV



MSN-04
サイコミュ
高機動試験機
⇒ P.027 MSV



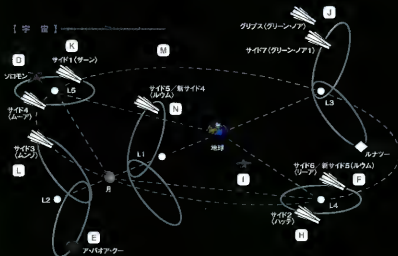
MS-002
サイコミュ
試験機ザク
⇒ P.026 MSV

[illegible]

MOBILE
SUITS
FOR NEWTYPE

ニュータイプ 専用機の戦場

【宇宙】



① サイド1

1バンチコロニー、シャングリラおよびその近辺でエューゴのアーガマとそれを追うハマーンの出手が戦闘を行った。

② サイド3

地球圏公転軌道のため、シャアが地球に落下せよとした小惑星のりどつ。ロンド・ベル隊との戦いが行われた。

③ フィリス・ルナ

地球圏公転軌道のため、シャアが地球に落下せよとした小惑星のりどつ。ロンド・ベル隊との戦いが行われた。

④ 新サイド4

悪徳組織を倒すという「ラプソディ」にまつわる戦いで、「[新]」を巡る多くの戦いが起きている。

⑤ ニュー・ホンコン

ホンコンに立ち寄ったカラバとの艦隊において、ティターンズのサイコ・ガンダムが投入され戦闘に陥った。

⑥ サイド2

グリプス戦役時16バンチがティターンズの電撃攻撃の標的となる。その際、バウンド・ドックが近接で戦闘を行った。

⑦ アクサス

ネオ・ジオンの拠点として有名。シャアの地球落下作戦に使われたりと、戦いの中心になることが多かった。

⑧ グリプス

グリプス2がコロニー・レーザーに改造され、これを通じて三つ巴の戦いが展開。多くのNTが戦いに参加している。

⑨ ダブリン

コロニー落としの標的となった都市。被害を拡大させたためサイコ・ガンダムMKⅡが投入されている。

⑩ ソロモン

一年戦争終結の戦場の1つ。プラウ・ブローエルメスなどニュータイプ専用機の先駆けが投入されている。

⑪ ア・バタ・クー

一年戦争終結の戦場の1つ。ニュータイプ専用機であるジオングが海軍軍艦のガンダムと戦っている。

⑫ サイド6

リボー、コロニーにおいて、1年戦争末期にジオン公国軍特殊部隊サイクロプス隊がアレックス奪取を試みる。

⑬ トリントン

旧ジオン公国残存軍のシャープロがトリントン基地周辺を襲撃。大きな被害に見舞われた。

⑭ 太平洋上高高度

ガルダ艦上において、兄弟機であるユニコーンガンダムとバンシィが戦闘。また、デルタプラスもバンシィと戦っている。

MS/Mobile Bayロケットとしてのニュータイプの適性が見出されて以来、陣営を問わず常に戦場に送り出されてきたニュータイプと専用機たち。不安定な存在ゆえにその結末は様々ではあったが、人類の可能性を感じさせる超常的な結果をもたらした事例があつたのも事実である。

一年戦争期

宇宙要塞ア・バオア・クー

U.C.0079 12.31 ア・バオア・クー攻防戦

一年戦争における最後の戦場になったア・バオア・クー。ジオン公国軍は未完成（担当エンジニアによると完成の域らしい）のジオングにシャア・アズナブルを搭乗させ投入。それに対し、連邦軍は対ブラウ・プロでの戦闘を活かしマグネット・コーティングによる強化を施したガンダムで対抗した。両者の戦闘は奇烈を極め、相打ちという形で双方とも機体は失われている。なお、本来ならばこの戦場に投入されるはずだったアレックスはジオン特殊部隊により中破し戦闘に参加することはなかった。

→新機サイコミュを駆使するジオング。本来はもっと多くの一掃戦を仕掛けてきただろうが、シャアはガンダムとの戦いに没頭し、



→ムロの能力、マサキッド・コーティング後の性能を、何もガンダムは本明、ジオングの能力でこなす。

サイド6（リボア・コロニー）

U.C.0080 クリスマス作戦

南極基地から宇宙に打ち上げられ、中立であったサイド6のリボア・コロニーで密かにテストが行われていたアレックス（ガンダムNT-1）も、ジオン公国軍特殊部隊サイクロプス隊最後の生き残りであるバーナード・ワイズマン（バーニィ）が破壊しようとした。トラップを使い、ザク改での一対一の近接戦闘に持ち込みアレックスと相打ち（中破）するまでに至ったが、バーニィは戦死。この働きにより、アレックスが当初の予定通りニュータイプ専用機としてホワイトベース隊に属されることはなかった。

→アレックスのニュータイプ能力は、まだ弱いながらも、リボア基地の戦いで発揮された。



ソロモン宙域

U.C.0079 ソロモン警戒戦

オデッサ以降反結に転じた連邦軍と、それを防ぐジオン公国軍の宇宙における大きな戦いが最初に行われたジオン公国軍のソロモン宙域。戦争も最後期となるこの時期にはジオン公国軍のニュータイプ研究も一定の成果をあげ、専用機が通用試験も兼ね実戦に投入されており、ブラウ・プロやエルメスはその尖兵であった。ブラウ・プロはホワイトベース隊のガンダムを窮地に陥れ、エルメスは連邦軍の艦船を複数撃破するなどその力の片鱗を見せたが、ソロモン宙域は最終的に陥落。敗況を覆すことはできなかった。

→ニュータイプ専用機とせず、大型ながらも完成度の高かったエルメス。パイロットの能力に依っていた。



→エルメスの機体は、当初はパイロットが「専用機」として扱われていたが、

→ブラウ・プロはガンダムと戦い、機体の性能を評価し、ニュータイプ専用機として扱われることになった。



↑連邦軍のガンダムは「敵艦により」ビッグ・サムを撃破。ビッグ・サムの戦力は連邦艦隊すら凌駕しており、ニュータイプならではの功績が。

グリプス戦役

～第一次ネオ・ジオン戦争期

グリプス2

U.C.0087 グリプス2制圧戦

戦場の最終局面となったグリプス2を巡るティターンズ、エーゴ、アクシズ三つ巴の戦いにおいては、名機連のニュータイプ専用機が激しく戦った。ハマーン・カンランやバブテラス、シロッコなど、精神的に安定しニュータイプ能力も高いパイロット同士の戦いが多く行われるという、戦史においても珍しいケースであった。その結果をみるに、MSの性能もある程度は影響するが、ニュータイプ同士の戦闘においては結局のところ能力の高い者が勝つというのが戦況といえよう。パイロットの精神が崩壊するような状態でも「勝利」と呼べるなら、話ではあるが……。

→カミーユのZガンダムはハマーンのキュベレイの戦いでは下回った。この空戦により決着がつく。(一)



★クワトロ(クシャ乙)もニュータイプだが、ハマーンはニュータイプではない。この空戦により決着がつく。(二)



★シンプルかつ高い安定度とパイロット能力が当時最強の一角であったシロッコの乗るジ・O。

★機一ともいえるカミーユの能力はシロッコすら圧するほど。しかしその機体も大きかった。



ニュー・ホンコン

U.C.0087 ホンコン・シティ街戦



★サイコ・ガンダムの遠隔操作機能を使いこなすなど、フォウのニュータイプ能力は高かったが、精神的不安定さも残っていた。

カラバのアウトドムがホンコンのルオ商会によって補給を受けるべく、ニュー・ホンコンを訪れる。そこへ、地球連邦軍のベン・ウッダー率いる部隊が侵入。ウッダー隊はムラサメ研究所でつくられた強化人間フォウ・ムラサメとサイコ・ガンダムを新戦力として補充しており、そのサイコ・ガンダムがニュー・ホンコン市街地でカラバのMS部隊と相手に戦闘を開始。街は大きな混乱に見舞われた。フォウの上官にあたるウッダーはフォウのコントロールに手を焼くなど、強化人間や専用機の高い機動性がここでも露呈した。

サイド2宙域

U.C.0087 コロニー制圧作戦

コロニー・レーザーとして活動したグリプス2から月面のグラナダを守るため、サイド2方面へ派遣したアーガマのMS部隊とバウンド・ドックとの戦闘。パイロットは1号機に強化人間のロザミア・バダム、プロト機にゲーツ・キャバが搭乗し、ゲーツ機はロザミア機の制圧を主任務としていた。ロザミア機はメタスを圧倒するなど強さの片鱗を見せるものの、カミーユの呼びかけに呼応。制圧担当を降参させても強化人間の完璧なコントロールは驚異というようだ。



★一瞬でメタスの背後に回りこむなど、バウンド・ドックの性能は優秀。

アクシズ近辺

U.C.0087 グラナダ攻防

ハマーンの手によって月面のグラナダに落とされようとしているアクシズ。アーガマ隊はグリプス2のコロニー・レーザー照射でアクシズの軌道を変更させるべく、アクシズの設備を用いてグリプス2と連絡をとるためアクシズに侵入。その際、ロザミアの搭乗するサイコ・ガンダムMK-IIとの戦闘になった。カミーユの脱出によってロザミアは混乱するが、そのせいでアーガマが危機に陥ったためカミーユはやむなくサイコ・ガンダムMK-IIを撃破する。



★コクピットのみを狙ったため本体のダメージは少なく、逆にネオ・ジオンが回収し機体を再利用することに。

第二次ネオ・ジオン戦争 ～「ラプラスの箱」をめぐる争い

インダストリアル7宙域

U.C.0096 インダストリアル7遭遇戦

問がれば地球連邦の歴史が変わると言われる「ラブラスの箱」も、所有者であるインド財団はオ・ジャンの権限を保持する「権力者」に継ぎを譲る文書を行う。インドストリアルに交渉に赴いた「権力者」のガラシエールとそれとを阻止しようとするインド、ベネチア、インドストリアルが近接で衝突。フル、サイコ、フレームとNF-Dシステムを実装したユニコーンガムバが、ガラシエール隊のクワットリヤや「権力者」首魁のフル、フロムタルと、これまでのニュータリブ軍用機とはまた異なる次元の戦いを繰り広げた。



ラブラス跡地

U.C.0096 ネェル・アーガマ強襲戦

「ラブラスの峰」の名称を示す機、ユニコーンガンダムが示した場所であるラブラス谷相模原郡地において戦闘が勃発。ロード・ハルルの補導となったキャットリヤのバレット、マリーダ・クルスを取り囲まれたランシオン隊およびアム・フロンタルの部隊はユニコーンガンダムと衝突。エコーズのダグザ・マククル中佐はこの戦いの最中で戦死し、怒りに燃えるバナージに呼ばれユニコーンガンダムはNT-Dを発動。フロンタルの乗るシンナジと大気圏同層で高機動戦を展開している。

■シナンジュとユニコーンガンダムは大気圏に引き込まれ燃え尽きるギリギリのタイミングまで戦い続けた。

↓ フロントル観測型のアンジェロもNT-D発動のユニコーンガンダムと戦うが、全く相手にならなかった。

フィフス・ルナ

U.C.0093 フィフス・ルナ落下作戦



小惑星を落下させることで地球を人の住める環境ではなくし、全人類を宇宙におけるシェア・アスナブの地球基合伴機戦。その作戦の一端となったフィスル・ルナでは作戦を遂行するギョネイ・ガズとそれを阻止しようとするランド・ベアールのアムロ・レイによる戦いが行われる。アムロは劣る機体性能をダメージバレーンの駆使や産を突いた射撃といった熟練の技でカバーしギョネイを圧倒するも、シェアの助射により形成は逆転。結局、フィスル・ルナの落下阻止できず、ベットのラサに落ち、地球は大きな打撃を受けた。

アクシズ

U.C.0093 アクシズ落下（阻止）作戦

過去、幾度となく決戦の場となっているアクシズ。「シァアの反乱」においては地球に落下せようとする新生ネオ・ジオンとそれを防がんとするロンド・ベル隊の決戦の場となった。ネオ・ジオンはα、αジール、サット・ドガ、サザビーといった機体を繰り出して、ロンド・ベル隊はロールアウト同もないガンダムで応戦。戦闘は小規模ながら、それなりに多数のニュータイプ乗用機が被害を蒙る事となった。最終的にはサイコ・フレームの真面目により、アクシズが地球に落下することはなく戦いは終結している。



「ササビ」と「Vガンダム」という当時最新の機体を誇る機体にシヤアとアムロが乗り戦った。それは地球の命運を握るに匹敵しい戦いであった。



▲乗り手の意思を現実世界に作用させるという、これまでの機体とはまた別レベルの(強大な)能力を持つネオ・ジオング。



▲2機のフル・サイコ・フレーム機が作り出したサイコ・フィールドは、コロニー・レーザーをも無効にするほどの力であった。

フロンティア4宙域 U.C.0123 フロンティア4制圧戦

U.C.0120年代はMSの基本能力が非常に高まっており、ニュータイプ専用機は珍しい存在となっていた。しかしレクスボーン・バンガードがフロンティア4N侵襲の際に投入したMAラフレシアは、思考によりすべての操作を行うニュータイプ(強化人間)専用機であった。能力的には当時の高性能MSであるビギナ・ギナとF91の2機がかり程度では、撃破は困難なほどだが、全力稼働したF91の全金属剛化効果にセンサーが追従できず、テンタクラウ・ロッドの制御が効かなくなった隙をつかれて撃破されている。



▲思考による操作はラグがなく強力であり、ビギナ・ギナを徹底的に行動不能にした。しかし思考が乱れた(リフトロッドが壊れた)際には強いようだ。



▲サイコ・フレームを必要としない出力型の機体は、戦場では非常に有利であった。

トリントン基地近郊 U.C.0096 トリントン奇襲戦

ガラランシェール陣をカバーする「機動」としてトリントン基地を襲撃した旧ジオン公国残存軍のカークス隊。水陸両用MAでありニュータイプ専用機のシャムプロで市街地に上陸したカークス隊のロニー・ガーベイスは、ガラランシェールから降下したユニコーンガンダムと対峙。連邦軍に父を殺された恨みをシャムプロを通じ増幅させるロニーと、ロニーの暴行を止めたバナーの思いがそれぞれの機体を通じサイコ・フィールドとして発現。かつてサイコ・フレームの光を見たラー・カイラムのプライト・ノア司令をはじめ、多くの者は両者をただ見守ることしかできなかった。

太平洋上高高度 U.C.0096 ガルダ機上攻防戦

「ラプラスの箱」と同じく事態の趨勢を左右するミネバ(オードリー)を救出すべく、ミネバを輸送していたAE社のガルダを襲撃するガラランシェール隊とユニコーンガンダム。ガルダ機上では再調整されたマリダの乗るバンシィとユニコーンガンダムの【足並み揃え】が繰り広げられた。また、ミネバ救出後、ガラランシェールを宇宙に引っ張り上げるためにサイコ・フレームをフル稼働させたユニコーンガンダムにより、かの「アックス・ショック」と非常に近い光現象が観測された。

▲バンシィのアームド・アーマーンVNIによりデルタ・プラスは拘束に破壊されてしまう。



▲機体下の強いバウンスの力が有利だが、戦意のないユニコーンガンダムはNT-F未発動のまま戦った。

メガラニカ周辺 U.C.0096 ラプラスの箱開封戦

コロニービルダーであるメガラニカに「ラプラスの箱」があることが判明。ロンド・ベル隊、連邦政府(マーズ)による最後の争奪戦が行われる。コロニー・レーザーを無効化するユニコーンガンダムとバンシィ・ノルンや、操縦者の意思に反映させる能力を持つネオ・ジオングなど、フル・サイコ・フレームを利用したニュータイプ専用機同士の高い電磁的相性を活かして闘っていた。かつて「脱走者」を安させる」能力の獲得を目指したニュータイプ専用機の未来は、この3機の激突によって戦場で示して見せたといえる。



▲フル・サイコ・フレームとユニコーンガンダムとバンシィ・ノルンや、操縦者の意思に反映させる能力を持つネオ・ジオングなど、フル・サイコ・フレームを利用したニュータイプ専用機同士の高い電磁的相性を活かして闘っていた。かつて「脱走者」を安させる」能力の獲得を目指したニュータイプ専用機の未来は、この3機の激突によって戦場で示して見せたといえる。



一年戦争期の ニュータイプ専用機の系譜

MAというカテゴリがある
NT専用機の土壌になる

ジオン公国軍が開発した機動兵器MSの登場は兵器だけではなく、戦争の有り様すら根底から覆してしまふことになる。MS・06ザクⅡが戦場を席巻し、ザクを凌駕しようと連邦軍がMSの開発を行い、やがてMSが兵器のスタンダードとなり、宇宙世紀の歴史は大きく変貌していく。

それはある程度予測されたことなのか、ジオン公国軍では早くも次の矢が模索されていた。それはすなわちMAである。MAの誕生をひも解けば、新たな機動兵器の選定が行われたMIP社が開発したMIP-XIに遡る。結果的に汎用性に優れたプラン（後にMSへと発展）を提供したジオニック社に敗れたが、MAはMSではカバーできない特定の状況に対応すべく、再び日の目を見ることになる。

MAはMSのように、明確にカテゴリ化されるものではなく、そのシニ

エツトも人型ではないことはもちろん、手足の有無さえも意味のないものもなっていた。その開発目的にしても、高機動性や大火力、拠点強襲型と機体ごとに全く異なる兵器といっても過言ではなかったのである。

ニュータイプ（NT）専用兵器は、こうした様々な兵器を模倣していたMAという土壌から誕生することになる。ジオン軍では、そもそも「ニュータイプ」という存在を肯定することが、国家としての基本的なスタンスであり、それは国民を誘導する政治的なプロパガンダばかりではなく、科学的なアプローチも行われていた。そうしたNTの研究を行っていたのが、フラナガン機関である。

懐疑的な世論を
一蹴したエルメス

同機関では、一年戦争開戦後からNTの素養を持つ人物を集め、研究が進められていた。それは軍内で召集されたシャリア・ブルのような者もいれ

ば、ララァ・スンのように一般の民間人からスカウトされた者もいた。NTを肯定的に見ていたジオン公国内部でも、またジオン・ダイクンの提唱したNTをどのように捉えていたかは定かではないが、ザビ家の人間はNTの存在は懐疑的に見る向きもあった。

転機となったのは、MAN-08エルメスの登場だろう。NTの素養を密に認識、遠隔操作といった兵器の能力に転嫁したエルメスは、ビットと呼ばれる小型砲台ユニットを使用した戦い方によって、まずコンペイトウ（旧ソロモン）の連邦軍駐留部隊を奇襲し「ソロモンの亡霊」と恐れられた。

さらにRX-78ガンダムに対抗できる唯一の存在となったこともあり、その有用性は戦後、グリプス戦役以降もAMX-004キュベレイという形として継承され、遠隔操作にとどまらないうサイコミュ・システムの発展につながっていく。結果的にエルメスが残した実績が、サイコミュを次世代につないだといえるだろう。

一年戦争期に生まれたNT用技術

ニュータイプ

マグネット・コーティング

RX-78-2ガンダム
RX-78-3 G-3ガンダム
RX-78NT-1アレックス

厳密にはNT専用機の数ではなく、MSの関節部分にマグネット・コーティングを施すことで、機体の反応速度を向上する技術。連邦軍の技術者であるモスク・ハン博士が提唱したもので、アムロの反応速度による過負荷に耐えきれなかったRX-78ガンダムに用いられた。

一方、連邦軍にとってサイコミュは機体の隠蔽であったと考えられ、ニュータイプの研究に立ち遅れていた。

こうした状況を踏まえ、RX-78NT-1アレックスは、開発当初からNT専用機（実質的なアムロ専用機）として開発されていたが、これもNTの能力をデバイスに用いるわけではなく、あくまでマグネット・コーティングやスラスターの増設などによって、NTの反応速度に「耐えうる」性能を目指したものの、NTパイロットではなくとも操縦が可能であるため、厳密にはNT専用機ではない。

マグネット・コーティングは、その後可変MSの実現にも効果を発揮し、変形時の加速をもちたすなど一般的な技術として取り入れられていくことになる。



ゲームに登場するNT技術

EXAMシステム
MS-08TX[EXAM]イフリート改
RX-79BD-1ブルーディスティニー 1号機
RX-79BD-2ブルーディスティニー 2号機
RX-79BD-3ブルーディスティニー 3号機

ゲーム『機動戦士ガンダム外伝 THE BLUE DESTINY』で登場した技術。フラナガン機関に所属していたクルスト・モーゼ博士が開発したもので、オールドタイプであってもシステムのサポートによってNTに匹敵する戦闘能力を可能とするとされている。同システムはイフリート改にまず搭載されたが、のちにクルスト・モーゼが連邦軍に亡命したことによって、RX-79[G]陸戦型ガンダムをベースとしたブルーディスティニーにも搭載されることになる。

サイコミュ

サイコミュを搭載するMA MS
MAN-03ブラウ・プロ
MAN-08 エルメス
MSN-02 ジオング



この時代では、NTの能力を遠隔操作武器に転用することが基本であり、ビットや優先式ビーム砲といった端末を操作するもので、様々な方向からの攻撃を可能としたオールレンジ攻撃を実現した。

MAN-03ブラウ・プロなどの優先式ビーム砲装備のMAに関しては、NTではないパイロットや、NTとしての素養が低い場合でも操縦が可能であったが、ビットのような無条件で操作できるのは、いわばフル・ニュータイプマシンといえるエルメスのみであった。その登場はこの時代の兵器体系の中ではエゴノクメイキングであった。

一方、一年戦争時、大きな問題と考えられたのはサイコミュ・システムが大型なことで、ブラウ・プロはデータ収集機の側面が強いとはいえ全高52.4mにもなり、エルメスにいたっては、全高85.4mである。このサイズではMSの運用インフラを使う場合にも制約があったと考えられ、MAが大きな運用実績を上げたとしても、MAやサイコミュ兵器を主力機として組み込み、西顧するにはコストも時間をもたせざるを得ない。

サイコミュ技術はやがてアクシズや、連邦軍側に接收された工場を経て、アナハイム・エレクトロニクス社などにも伝わり、独自の進化を遂げていくことになる。





BRAW BRO MAN-03

ブラウ・ブロ

Spec

全高 62.4m 全長 60.2m 本体重量 1,735.3t 全機重量 2,602.6t
ジェネレーター出力 74,000kW スラスター推力 1,760,000kg センサー有効半径 158,000m
装甲材質 - 武装 有線誘導式メガ粒子砲×4

Pilot Pilot

主なパイロット



シャリア・ブル

木星ヘリウム輸送船団長を務めていた人物。本人は「少し勘が良い程度」という能力をフラナガン博士に見出される。ニュータイプには珍しく、社会的で落ち着いた性格の紳士。



シュム・アル・バハロフ

ブラウ・ブロの開発担当。ニュータイプではないが天才。ガンダムと二度目に交戦した時敗北し、脱出に失敗して、シャリア・ブルともども戦死。



1 有線誘導式メガ粒子砲は全部で4基だが、両門が2門のものが2つ、1門のものが2つと仕様が微妙に異なる。

2 コクピットは常ニュータイプでも普通人でも動作できるインターフェイスで、柔軟性はあるが、普通のニュータイプの力では法かしにくい可能性もある。

3 本体の重量は前編兵器と呼ばれには過大であり、大型のスラスターを装備してはいるが機動性はそれほどでもない。

火器の遠隔操作が可能な 小型艦艇の存在を模索？

ジオン公国のニュータイプ研究機関であるフラナガン研究所が一年戦争において初期に完成させたニュータイプ専用MA。

ニュータイプ専用機ではあるが、複数名が搭乗すれば非ニュータイプでも運用することが可能だ。開発主査はシムス・アル・バハロフ中尉で、彼女自身はニュータイプではなかったが、調整やモニタリングのためにブラウ・プロに搭乗することが多かった。機体の特徴として挙げられる点はこちら。はじめてサイコミュを搭載し



分離機能

機体がモジュール構成になっており分離合体が可能。なお、試験時にガンダムと遭遇し戦績となり、破壊されてもすぐ再構築されたことや2号機と見られる機体があるなど、各モジュールはいくつかまとめて製造されたようだ。



有線誘導メガ粒子砲

ブラウ・プロの唯一の兵器。有線式のため動きに制限があるが、核融合炉を搭載せずにメガ粒子砲の出力が充分であるのはメリット。ケーブル長は同じ有線式のジオンなどに比べても非常に長く、初見では射撃地点の発見が困難。

PICK UP!



月面ガンダム基地で機体が完成し、ニュータイプパイロットであるシャリア・ブルを搭乗したブラウ・プロ、真を待たせてホワイトベース隊と交戦する。オールレンジ攻撃によってホワイトベース隊は混乱し、ガンキャノンで戦艦に追い込んだが、ガンダムは格闘戦に追い込まれた。そして機体を見出したアムロにより本体に急接近（これはオールレンジ攻撃を封じる策にもなった）され、近距離からの一撃を受け撃破された。

テスト中、偵察を行っていたホワイテス隊のGアーマー（およびガンダム）と遭遇。この時、ブラウ・プロは故障しており小惑星に身を隠し修理を行っていたが、やむなく交戦する。大型の本体に気を取られる（Gアーマーのセイラムも「この程度の動き」と評した）隙に遠隔操作したメガ粒子砲で攻撃を行うが、ガンダムのシールドを破壊された程度。逆にガンダムに本体を攻撃され、右プロットを切り離して脱出する。

MSとのサイズ対比

本隊のサイズは大型MAといったレベルだが、MSとは全く次元の異なる重量を持つ。出力重視で艦船用のジェネレーターを搭載するなどその理由が見られる。

たこと。ブラウ・プロの場合はこのサイコミュにより、有線式のメガ粒子砲端末を本体から切り離し、砲塔を自在に操作することによって相手の全方向から攻撃を行うという、いわゆるオールレンジ攻撃が可能となっている。この有線メガ粒子砲は4基備わっているが、端末部の砲門数は異なるものがある。

本体部分もジオン公国軍の機動兵器としては非常に特異で、第1にサイズが非常に巨大である。後の一般的なモビルアーマーは200トン前後の重量だが、ブラウ・プロは全機重量では約2600トンもの重量を誇る。また、本体はモジュール構造をとり、機体の

左右プロットおよび中央部の3つのメインモジュールから成り立っている。重量は中小型艦レベルであるが、これはあくまで大型なサイコミュを搭載するといえることはもちろんだが、時期がそう変わるにはMS-06Zサイコミュ試験型ザクにもサイコミュを実装できた以上は、また別の理由もあるはずだ。サイコミュを効率よく運用するための模索のひとつといえる。実験的な要素もあったのかという点。

モジュール構造については計画テストや実戦で機体トラブルがあった際に、分離することで貴重なパイロットを素早く脱出させるという意味合いがある。モジュール構造のため機体に損

傷を受けても修理（モジュールの交換）がしやすいメリットもあった。実戦においては、「有線式メガ粒子砲を用いたオールレンジ攻撃を行う」という点に関しては一定の完成度をもっており、ホワイトベース隊のパイロットたちを苦しめた。パイロットの精神に対する負荷がそれほど高くない点も（有線式ゆえか）、後の機体と比較して評価できるポイント。しかし武装がこの有線式メガ粒子砲しかないことや、巨体による本体の機動性の低さ、そして有線式であるがゆえの攻撃端末の機動限界など、改善すべき部分も多かった。

なお、ブラウ・プロはシャリア・ブルが操縦しRX-78ガンダムと戦ったア・バオア・クー戦で投入された別の機体も存在するともいわれる。





Pilot: File

主なパイロット



ララァ・スン

シャア・アズナブルによってその美意識を見出され、フラナガン機関に預けられた元民間人の少女。非常に高いニュータイプ能力を持つ。

ELMETH
MAN-08

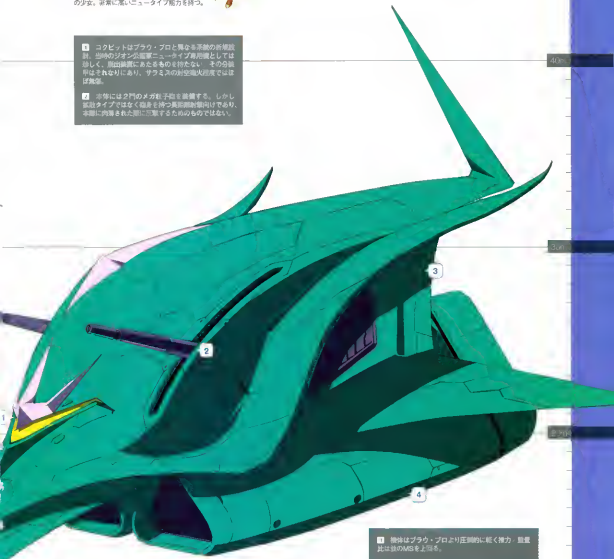
エルメス

Spec

全高 47.7m 全長 85.4m 本体重量 163.7t 全備重量 291.4t
ジェネレーター出力 14,200kW スラスター推力 645,200kg センサー有効半径 245,000m
装甲材質 超硬スチール合金 武装 メガ粒子砲×2、ビット

① コクピットはブラウ・ブロと異なる革新的な新構造。当時のジオン公国軍ニュータイプ専用機としては珍しく、黒田清隆にあたるものを持たない。その分装甲はそれなりにあり、サウミスの射空砲火密度ではまばら無効。

② 本機には2門のメガ粒子砲を装備する。しかし高威力タイプではなく砲身を持つ高射速射撃向けであり、本機に内蔵された砲に匹敵するためのもではない。



③ 機体はブラウ・ブロより圧倒的に軽く推力、重量比は数%のMGを上回る。

④ MAというよりは大型の宇宙戦闘機といったスタイルで、ジェネレーターにあたるものは一切ない（エネルギーは蓄積）。なお、その形からホワイトベース機には「とんがり帽子」などと呼ばれた。



ビット

全長4mで、MSの約半分の長さ。内部にジェネレーターを持ち、メガ粒子砲の威力は十分。また、航行用と姿勢制御用のスラスターも備える。エルメスでは10基前後を操縦することができる。



メガ粒子砲

本体に2門内蔵された武器。仰角をつけることも可能。自衛の他、ビットではなく直接対象を撃撃する際に用いられる。

PICK UP!



アムロのガンダムと直接戦闘を行った際、能力の発達著しい彼の卓越した射撃で、ビットは次々に撃ち落とされる。内蔵メガ粒子砲の直接射撃によってガンダムのビーム・ライフルを破壊するものの、今度はビーム・サーベルでビットを切り払われてしまう。ラファとアムロはニュータイプ能力によって共感を得るが、二人に割って入ったシャアのために戦闘を再開。ラファはエルメスでシャアのゲルグダをばいり、身代わりにならした。

ラファにとって初の乗戦となった連邦軍艦隊との戦闘においては、ビットの長距離遠隔操作によってサラミス級を撃破しに撃破した。しかしこの戦闘力を目的に作られた連邦軍のリック・ドムは連戦連勝を喫し、ラファはビット操作に集中できなくなり危機に陥る（ニュータイプの本質の中のために遠隔操作が必須ことがわかる）。後にシャアがゲルグダで駆けつけた際には涙も涙を取り戻し、サラミス級、マゼラン級をさらに撃破した。

MSとのサイズ対比



プラウ・プロよりはだいぶ小型化された印象だが（全長はプラウ・プロよりも長い）、機体のあるシルエットを持つ。全長尾翼（7）部分にMSを隠ませ変換するといったことも可能。

無線誘導式のビットを初採用した金字塔

フナガン機が開発したサイコミュ搭載MA。型式番号はMAN-08で、MAN-03であるプラウ・プロの後継機として扱われている。

だが投入された時期はほとんど変わらないため、ほぼ並行して開発されていたと考えられる。なお、MAN-04（07のナンバー）を持つ機体も公式な記録では残っていないが、これらはプラウ・プロやエルメスと同時に計画されたながらも実現しなかったプランと考えべきだろう。

エルメスはプラウ・プロに比べると

機体が大幅に小型化され、重量もMAとしての範疇におさまっており、機動兵器としての完成度は高まった。そしてサイコミュを用いた無線による攻撃用端末ビットを採用しているのが、最大の特徴だ。ビットは全長9メートル弱とMSの半分程度のサイズで、小型のジェネレーターを内蔵しており、無線ゆえに本体からエネルギー供給を受けられないという難点を解消した。

また、ビットは無線であるため行動域の制限が有線式弾薬に比べないに等しく、オールレンジ攻撃の有効性・多彩さは無線式より大きく向上している。加えてケーブルの収納スペースや重量をほぼ考慮しなくてもよいので、レイ

アウトや重量の面でも有利だ。秒速数キロというような速度で宇宙空間を飛ぶMSにオールレンジで迫るためには、相応の長さのケーブルが必要であり、これは有線式の欠点の1つといえる。さらにこれら欠点がないため攻撃用端末の数も増やすことができ、プラウ・プロの4基に対してエルメスは10基以上のビットを装備する。

ただ、フナガン博士がエルメスとビットを用いてMSと戦うことを想定していたか？と問われると疑問も残る。実験テストはアウトレンジから遠距離艦艇に攻撃を加えるという内容で、言ってみればビットという「無人機」をサイコミュで操作し、敵艦を攻撃す

るミッションである。ビットのサイズや出力から見ても、MSを狙うよりは母艦を沈める方が適しているし効率も良い。

実際には長距離からのビット操作はパイロットにも負担をかけることが判明したため、操作範囲を狭めるかわりにパイロットへの負荷が軽くなるよう調整された。本質的にはエルメス（およびプラウ・プロ）は個別に対MS戦闘を行うよりは、対艦戦に注力すべき機体だったといえる機体であり、長距離からのアウトレンジ攻撃が使用できなくなった時点で、ある程度想定した戦法とは違う戦いを強いられるようになっていったと考えられる。



ZAKU PSYCOMMU TEST TYPE

MS-06Z

サイコミュ試験型ザク

Spec

全高 17.7m 本体重量 80t スラスター推力 388,000kg

武装 胸部有線誘導ミサイル メガ粒子砲×2

有線誘導式攻撃端末のMSへの実装試験モデル

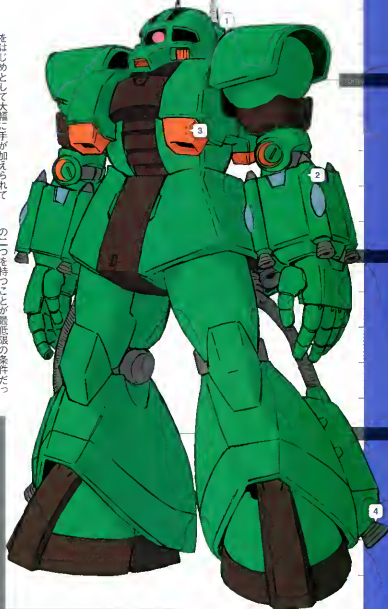
サイコミュ・システムによる兵装の遠隔操作、誘導というアイデアを盛り込んだニュータイプ専用機「MS-16X」の実現に向け、テストベッドとなるべく開発された試作機。そのベースはMS-06FザクIIではあるが、MS-16Xの要求性能実現のためジェネレーター

をはじめとして大幅に手が入えられており、実際にはメインフレームが使用されている程度である。

MS-16Xの要求性能が具体的にどのようなものだったかは不明だが、サイコミュ試験型ザクから逆算するに、1つは単体で遠隔操作可能な有線式メガ粒子砲の装備、さらに圧倒的大推力（常人では制御が非常に困難だが、ニュータイプなら扱えるというレベル）

の二つを持つことが最低限の条件だったと推測できる。本機はまがりなりにも両者を実現させており、テストベッドの役割としては充分に果たしたといえる。

本機を用いた一連の試験はビシヨップ計画と呼ばれており、本機もコードネームとしてビシヨップと呼ばれる事があったという記録もある。なお、本機は3機がグラナダで製造されている。



① 機体サイズは、MS-16Xの要求するサイコミュシステムを実現しながらも一般的なMSとそう変わらないサイズである。

② 5連装有線式メガ粒子砲の完成形ともいえるMSN-02ジオングにも搭載されている兵装の簡略化。ボディのサイズに対しその実装に大きな制約をかける。本来の7はのう一つとは大きく異なるシルエットを持つ。人によってはその膨大がりが「マウンテンゴリラ」を想起したようである。

③ 胸部および背側のスラスター推力合計は38万8000kgにもおよぶ破格の数値。ただし、推進剤の消費量増大に電力消費も比例して非常に高い。

④ 胸部は、大推力を得ることが一側であり、一般的な多行ユニットやAMBACとしての役割は薄い。実質的に熱機関である。胸部同様ボディに不釣り合いなサイズだが、推進剤もできる限り搭載している。



ZAKU PSYCOMMU HIGH MOBILITY TEST TYPE MSN-01

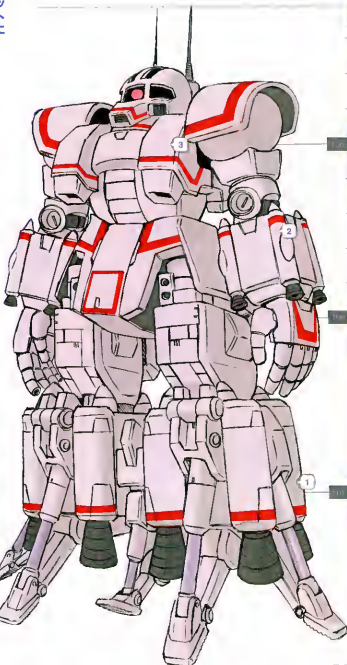
サイコミュ高機動試験型ザク

Spec

頭頂高 17.2m 本体重量 65t スラスター推力 388,000kg
武装 前後有線誘導ミサイル×2

脚部を推進ユニットに変更した機動性強化型

ニュータイプ専用機「MS-16X」実現のため、MS-06Zサイコミュ試験型ザクをさらに凝結めて開発されたテストモデル。サイコミュ試験型ザクには脚部が備わっていたが、このサイコミュ高機動試験型ザクでは脚部ユニットのかわりに大型のスラスターユニットを装備した仕様になっている。MS-16Xには下半身を脚部ユニットと



する案と、スラスターユニットとする二つの案があり、本機は3機あるサイコミュ試験型ザクの2号機を改修、対案のスラスターユニットに仕様変更した試験を行った機体だ。この改修を受けた段階で、サイコミュ試験型ザク2号機はMSN-01と型式番号も改められている。

本機の詳細なスペックや試験価値は不明だが、推力はサイコミュ試験型ザ

クを上回っているのは確かだ。その一方、機体サイズの関係上推進剤の搭載量は大きく増やすことはできず、サイコミュ試験型ザク以上に短期決戦型の局地戦向きの性格を帯びている。このサイコミュ高機動試験型ザクのデータを参照し、既存の機体ベースでは要求性能を満たすことはできないと判断され、MSN-02ジオンクが新規設計されている。

① まだ歩行用としての機能を有していたサイコミュ試験型ザクの脚部を完全に改め、4基1組の熱核ロケットエンジンを2基装備する。脚としては廃棄物としての機能しか持たない。

② キアM-33Eという型式のメガ粒子砲を右腕標準式にして「腕部」に2基導入するのはサイコミュ試験型ザクからジオンクまでの共通点。ただしジェネレーター出力の関係で、サイコミュ試験型ザクや本機はフルドライブとすることはできなかった。

③ 脚部以外にはサイコミュ試験型ザクと同様、カラーリングは銀灰色となり、各所に赤のラインが入れられている。



Pilot Pilot

主なパイロット



シャア・アズナブル

赤い髪の異名で知られるMSパイロット。ア・バオア・クー戦において、ジオングに乗って戦った。一年戦争後の悪逆であるジオングは未完成機ゆえか、後のパーソナルカラー、赤系の塗装はされていない。

Z E O N G

MSN-02

ジオング

Spec

頭頂高 17.3m 本体重量 151.2t 全機重量 231.9t ジェネレーター出力 9,800kW
スラスター推力 187,000kg センサー有効半径 81,000m 装甲材質 超硬スチール合金
武装 頭部メガ粒子砲、メガ粒子砲×2、腕部高熱誘導ミサイル砲×2

① 頭部は胴体との分離が可能。メガ粒子砲の照射により脱出装置発動後の攻撃目標となる。

② コックピットは頭部と胸部に存在し、それぞれインターフェイスは異なる。独特なニュータイプは頭部コックピットに搭載し、胸部コックピットは一般パイロットでも操作が行える。

③ 有線式メガ粒子砲。シャアは片方を遠隔操作し、片方は腕に搭載したまま進行方向のように使うこともあった。

④ 装甲の強度はそれ以上に高く、ガンダムのビームライフルも当たり方によっては効果があった。

⑤ 胴体部分にもメガ粒子砲を内蔵。効果は無いが、腕部同様に高熱タイプの兵器。



武器・装備



メガ粒子砲

胴部と腰部には内蔵式のメガ粒子砲を備え、直接射撃が可能。13基のメガ粒子砲を装備することになるが、大型ジェネレーターによって出力不足に陥るような事態はなかった。



5連装メガ粒子砲

ジオングの主兵装であり、セラースの船頭に金庫の中をせびそれだけで撃定できるほどの威力を持っている。また、計10発を一気に発射し弾車を形成するといった使い方も可能。

新規設計によって
実験機の欠点を解消

ニュータイプのパイロットとしての適正・資質に注目したジオン公国軍は、ニュータイプの感応波を用いて、ミノフスキー粒子散布を行っているも兵装の遠隔誘導操作が行えるシステムを備えたニュータイプ専用機の開発にのりだした。この機体は仮称MS-16Xとコードが与えられ、MS-06Zサイコミュ試験型ザクやMS-01サイコミュ高機動試験型ザクといった試作機が開発された。また、それらと平行してサイコミュ搭載型MAの開発もアラナガン機関を中心にわれ、開発データ

PICK UP!



当初はジオングの性能をフルに引き出すことができず、集りを恐な

アムロのガンダムとの交戦において苦戦していたシャア。徐々に機体にも慣れ、オールレンジ攻撃を仕掛けるが、アムロには慣れに慣れられ左腕を破壊。さらに右腕も撃破。

しかし、私でもタダで起きない。ガンダムの左腕を吹き飛ばしダメージを与え、胴体にコクピットがあると勘違いしたアムロの隙を突いて、機体を分離しつつガンダムのメインカメラを破壊!

最後はア・バオア・クー内で強襲メガ粒子砲によって、自動降機状態になったガンダムと相打ちに持ち込んだ。



遠征軍との最終決戦となったア・バオア・クー戦において、ゲルグを失っていたシャアは、キラリよりジオングを愛用する。

しかしシャアはジオングでテストをしたこともなく、機体エンジニアからも扱えるかについて「保証できるわけありません」と言われる。

また、シャアがジオングは未完成機で知らない点を指摘した際は「現状でジオングの性能は100%の力を出せる。あんなの無いです」と反論される始末。

シャアにとっては未知の機体だが、初搭載で見事に乗りこなしてみせたのは、さすがの超新星。「うまくやれる」と思ったエンジニアの見立ては正しかった。

のやりとりがなされている。

サイコミュ試験型ザク、およびサイコミュ高機動試験型ザクは、MS-16Xの要求である遠隔誘導操作が可能なのはいたもの、その名前が示すようにMS-06FザクIIをベースとしており、機体サイズに起因する限界があった。メガ粒子砲稼働のためのジェネレーター出力の問題や、高機動化における充分な推進剤搭載ができなといった点が問題となる。

そこで機体を新規設計し、これらの問題点の改善を図ったのがMS-02ジオングとなる。通常のMSの腿から上の部分だけの姿だが全高は約17メートル以上あり、大型ジェネレーターやサイコミュ・システム、推進剤のスペースをとることができた。サイコミュ・システムはMAN-08エルメスのデザインが参照されているにも関わらず有線式であるが、パイロットのニュータイプ適性に左右されにくいことや機体の負担が少ないといった利点もある。もっとも、システムのテストや、機体に搭載予定のニュータイプ資質の高く操縦者がいなかったことが表面化した仕様ともいえる（アラアの搭乗を想定していたエルメスとは異なる点）。

また、遠隔操作端末が腕部の2基しかなく、相手が極度に発達したニュータイプの場合は早々に撃ち落とされるという危険性があつた（事実アムロに両方とも破壊されている）。

実戦においては、テストも行わな

ままシャア・アズナブルが搭乗、ア・バオア・クー戦に参加した。シャアは腕部の有線誘導5連装メガ粒子砲を飛ばしてオールレンジ攻撃を行うという戦法自体に馴染みがないにも関わらず、連邦軍艦艇複数沈め、RX-78ガンダムと相打ちに持ち込むなど、ジオングに搭乗したのが初とは思えない戦果を挙げた。この結果を見るに、ジオングは「MS-16X」が目指した姿としてそれなりの完成度に達した機体だったといえるだろう。



ザクベースでのテストベッド製作時から、MS-16Xの下半身をどうするかは議論になっていた。サイコミュ試験型高機動試験型ザクよりも高機動ユニット（スラスタ）を装備する案が通されたが、AMBACを利用した脚部ユニットを装備する案も強く残っていた。パーフェクトジオングはMSN-02に高機動ユニットのかわりに歩行ユニットを付けた仕様である。これにより全高は35.5mにも達した。



PILOT 専用

主なパイロット



アムロ・レイ

ソロモン戦後にG-3ガンダム同様のマグネット・コーティング施されたRX-78-2ガンダムに搭乗。機体の反応速度がパイロットに迫っていたため、シャアのMS-14Sゲルググを圧倒。なお、アムロが乗っていた機体がG-3そのものだという説もある。

G - 3 GUNDAM
RX-78-3

G-3ガンダム

Spec

頭頂高 18.0m 本体重量 47.2t 装甲材質 ルナ・チタニウム合金
武装 バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル



① カラーリングはRX-78-2ガンダムで初登場のトリコロールではなく、グレーでペイントされている。これは宇宙空間におけるロビー加熱を阻んだもの。

② 外見からわかる形状の変化は少ないが、制御などの制御からマグネット・コーティング仕様がどうかの判断ができるともいわれる。

③ ジェネレーター出力は改修院と同様。特に出力の強化をせずともマグネット・コーティングを施工できたが、反応速度の向上には本来ジェネレーター出力の強化も行うのが望ましい。

マグネット・コーティングで ニュータイプ機に対応

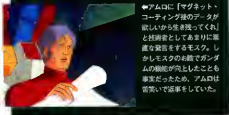
RX-78ガンダムは、連邦軍が持つ技術をすべて投入して開発された実験機であった。

あくまでもMSの可能性を模索するという段階であり、当然ニュータイプが搭載して戦うなどということは想定しなかった(RX-78NT-1アレックスは別途開発中ではあったが)。そもそも、連邦軍はニュータイプの存在にに対してどちらかといえば否定的な立場で、ごく一部の者を除きニュータイプを特別視することはなかった。

しかし、ガンダムが実験機ゆえの高

ソノモ戦後に通過したジオン公国軍のニュータイプ専用機MAN-03ブラウ・プロとの戦闘において、ブラウ・プロのオールレンジ攻撃をかわし反撃しようとするアムロの振戦(覚醒)にRX-78-2ガンダムが反応できなくなる事態に陥った。これを改善するため、マグネット・コーティングの技術でもあるモスク・ハン博士がホワイトベースに招かれ、ガンダムにマグネット・コーティングを施した。

理論上は無理に反応速度を向上できるが、ジェネレーター出力側には限界があって実際には有限である。結果は上々で、以後はアムロがガンダムの反応速度に不満を述べることはほぼ無かったようである。



◆アムロに「マグネット・コーティング後のデータが欲しいから生き残ってくれ」とは頼みとしてあまりに重く感じるモスク。しかしモスクのお蔭でガンダムの機能が向上したことも事実だったため、アムロは苦笑いで返事をしていく。

性能であったことと、偶然からガンダムに乗り戦うこととなった少年、アムロ・レイが高いニュータイプ能力をもっていたこと、そしてその二つの要素が組み合わさることと、比類のない戦果を挙げることとなった。このことは連邦軍(特にレビル将軍一派)に少なからず影響を与えた。

だが、ニュータイプ専用機に対する考え方としては、「ニュータイプ先進国」であるジオン公国軍と連邦軍では異なっている。連邦軍ではニュータイプに向けた特殊な装備(サイコミュ・システム)をMSなどに実装するのはなく、あくまでも機体の基礎性能を高めることでニュータイプの高い操縦能力

バリエーション RX-78-2 ガンダム



Spec

機体高 18.0m 本体重量 43.4t 全備重量 60.0t
ジェネレーター出力 1,380kW スラスター推力 30,000kg
センサー有効半径 5,700m 装甲材質 ルナチタニウム合金
武装 60mmガンダム2 ビームサーベル×2、ビームライフル、
ハイパーバスター、ハイパーマシンガン、機

にフィットさせる、というのが基本コンセプトだ。これは、サイコミュなどのニュータイプ・デバイスの開発に出遅れていた連邦軍にとって苦肉の策ともいえた。

RX-78-3G-3ガンダムは、もとは3機製造されたRX-78の1機であり、パーツ供給用として部品の状態で

ホワイトベースに収容されていた機体だ。オデッサ作戦期にホワイトベースから回収され、マグネット・コーティングによってフィールド、モーターの動作速度を向上させる試験に使われた。このデータは後にアムロの反応速度に追い付けなくなったガンダムへのマグネット・コーティング作業や、アレックス

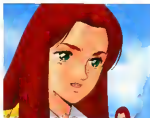
クスの開発にも活かされている。また、教育型コンピュータも新型に交換されており、処理能力が向上している。だが、それ以外のスラスター推力やジェネレーター出力、武装といった部分は表立った変更はない。

G-3ガンダムはア・バオア、クレーンに出撃したという説もあるが、真実は定かではない。同様の技術で能力向上を果たしたガンダムはMAN-08エルメスやMSN-02ジオングといった生粋のニュータイプ専用機と同等以上に戦った。「基本性能が高い機体であればすなわちニュータイプ専用機でありうる」という、連邦軍のMS開発思想を体現した最初の機体といえる。



PILOT DATA

主なパイロット

クリスティーナ・マッケンジー
(クリス)

リボーン・コロニーでのアレックスの試験に参加したテストパイロット。しかしアレックスの異常な反応速度に手を焼いていた。サイコロブスのケンパフォーやザク改をアレックスで撃破している。



ALEX

RX-78NT-1

(ガンダムNT-1) アレックス

Spec

総高 18.0m 全重量 45.0t 全機重量 72.5t ジェネレーター出力 1,420kW スラスター概力 174,000kg
センサー有効半径 5,900m 装甲材質 アルミナ・タングステン合金 武装 バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、
ガトリング・ガン×2、ビーム・ライフル、ハイパー・バズーカ 備考 チョバム・アーマー装備



① マグネット・コーティングは外見からは確認がつかないが、主要関節部分に施されている。また、マグネット・コーティングの最適化のためにパーツや重量を調整。

② 姿勢制御用スラスターが全身に備わり、AMBACを用いる以外にも機体姿勢を素早く制御できる。

③ 胴部に大型のスラスターが備わり、推進剤タンクも内蔵する。そのため下駄はRX-78-2などに比べ太い。

④ コクピットは一年戦争においては極めて異例といえるリニアシートを採用。生産性が上がる。

⑤ 武器に備えてはビーム・ライフルやビーム・サーベルなどガンダムタイプと同等。ただし内蔵火器として30mmガトリング砲が追加されている。

武器・装備

90mm
ガトリング・ガン

同様の内蔵火器。近距離戦でケンパファアを破壊するなど威力は高い。機体の末端に重量物を配置するのはセックのマグネット・コーティングの効果を下げるが、実戦においては問題はない様子。

ビーム・サーベル

マウント部分の形状などが異なる新型ではあるが、連邦軍の機体が装備するビーム・サーベルとしては標準的。



チョコバム・アーマー

チタン合金とナイロン製のマイクロメッシュプレート、装甲板を用いた新型複合装甲を装備した。重量増を招いたが、推力も強化されている。ニュータイプ専用機には本来必要のない増加装甲だが、MSの発展性を標準するためにアレックスでテストされた装備



PICK UP!



サイクロプス隊の最後の生き残り隊員がザク改で永眠を遂げた。クリスはアレックスで迎戦。仕掛けられたトラップに掛かりながらも外部まで（これはザク改パイロットの誤りだった）ザク改を逆送。その場でヒート・ホークとビーム・サーベルによる一騎打ちが行われた。結果は頭部を切り飛ばされるものの、ザク改のコクピットをビーム・サーベルで貫通（パイロットは死亡）。どちらも重傷的に動力部を失ったため、爆発は起きている。

アレックス破壊の任を受け、リボア・コロニー内で戦闘を行うサイクロプス隊。激戦的なケンパファアで激戦をかけた。防衛にあたったスカレット隊は全滅。クリスはチョコバム・アーマー仕様のアレックスを起動させ迎戦。ケンパファアのチェーン・メインでチョコバム・アーマーは破壊されてしまうが、チェーン・メインで撃破したと思ったケンパファアの腕を突いて90mmガトリング・ガンを寄附。ケンパファアを膝の裏にして撃破した。

一年戦争時随一の性能は
本場にニュータイプのためか

連邦軍がニュータイプ専用機としてRX78ガンダムを設計しなおしたガンダムタイプ。

開発は宇宙世紀0079年8月に開始されており、サイド7においてテスト中のガンダムが襲撃を受ける約一ヶ月ほど前となる。MS開発は約一ヶ月ほど前となる。MS開発は約一ヶ月ほど前となる。

ニュータイプに対する知見もジオン公国より遅れていた連邦軍が、当初よりニュータイプ専用機を開発する、というのも不思議な話だが、本質的には機体の反応速度を向上させた、より運動性の高い機体を開発するというV作戦

の一端だったと考えられる。ニュータイプ専用機というコンセプトは、アムロ・レイによるガンダムのデータ参照した後に明確に固まったものだろう。なお、開発は地球のオメガ研究所で行われ、従来の開発ラインとは別のものであり、コア・ブロック・システムは装備されていない。

連邦軍のMSは当初から関節駆動にフィード・モーターを用いていたが、これはマグネット・コーティングという技術によって、さらに駆動速度を高めることができた。第一人者のモスク・ハン博士によれば理論上は「無敵に」駆動速度を早めることが可能であり、それはニュータイプパイロットの意識

（操作）とラックなく機体を動かすことができることを示した。マグネット・コーティング自体は後から施すことでもできる（アムロのガンダムも改装されている）が、アレックスは設計時からマグネット・コーティングによる高速駆動を念頭に置かれており、ソフトおよびハード両面において最適化が図られている。

さらに、スラスター総推力は約17万kgとガンダムのおよそ3倍に達し、全身の姿勢制御用スラスター数も19基と多い。結果、総合的な機動性や反応速度はRX78-2を大きく上回っている。その一方で、過剰な機体の反応や大推力による推進剤の消費の激しさなど、

非ニュータイプパイロットでは扱い難い特性も持ちあわせることとなった。アレックスはジオン公国軍製ニュータイプ専用機のような特殊な装備は持っていないが、チョコバム・アーミーや全天周回モーターに近いコクピットシステムといった新しい試みも盛り込まれている。こういった点から見る、アレックスは完全にニュータイプ専用機として開発されたワケではなく、V作戦の一環として「より高性能で新しいMS」を構築する過程で生まれた機体と位置づける方が適切である。その成果は後のRX78-2、RX78-3、RX78-4、RX78-5などの一機機の開発にも活かされている。

ニュータイプと兵器の関係とは!?

「言葉がひとり歩きしたニュータイプ」

言葉がひとり歩きした!?
ニュータイプ

ニュータイプとは何なのか。

御存知の通り、もとはジオン・ダイクンが、宇宙に住む人類の将来あるべき姿として、人の革新を表現するために使った言葉である。もちろんこれには実体や確信があるわけではなく、一種の希望を表す言葉であった。

一方、ジオン公国軍が、脳から出る感応波の強い人間をオペレーターに据え、その感応波を通信信号として利用するサイコミュ（ニュータイプ兵器の一連のシステムを世に出すに際し、そのオペレーターをニュータイプと称したのは、多分にプロパガンダ色が強いものであった。

そのニュータイプという言葉云々はともかくとして、少なくとも、この時代には脳科学が今よりもかなり発達しており、そこで分かった様々な事実、機械を動かすことにも応用できた、ということである。

そして脳科学の研究成果を兵器とし

て使用すること自体、ミノフスキー粒子の登場という側面をなすに過ぎることはできない。つまり、ミノフスキー粒子下の、理想の戦術を生み出す上の可能性のひとつとして、サイコミュ兵器は採用されたのだ。

一方、ニュータイプはカンが鋭く、人と深く共感できる人間という認識もあり、戦争によってそのニュータイプが生み出されたという説があるが、真偽のほどは判断しえない。元来、カンでは説明不可能な能力として存在しており、それらカンの強い人を、この時代ではニュータイプに紐づけて、より分けただけかもしれない。

また、ニュータイプの特徴として、お互いの存在を感じ取れる、というのがあったが、これとサイコミュというデバイスが媒介になった可能性もあり、ニュータイプの特有現象と断じるのは疑問が残る。少なくとも、この時代のニュータイプ兵器の使用法自体が手探りだったことは間違いない。ジオン公国軍が当初考えたオールレンジ攻撃は、有線、無線という形の遠

打倒ニュータイプ!? EXAMシステムとは?

プラナガン機関のニュータイプ研究者であるクルスト・モーゼ博士が開発したシステムで、対ニュータイプ用のモビルスーツのオペレーション・システムと特殊な機体を含めた総称でもある。当初はジオン公国軍のモビルスーツ、イフリートに装備されたが、後に地球連邦軍のブルーディスティニー（陸戦型ジム、陸戦型ガンダムをベースにした機体）にも装備された。

そのシステムは人間の脳波を電磁波として捉え、それらを感じ、対応することで、驚異的な動力性能を見せる。ように見えるが、実際はより合理的に動くことができるという方が正しいだろう。

このシステムは、ニュータイプ機を目的としているため、ニュータイプ機を見つくと、自律的に行動してしまう。また、多くの戦闘的な脳波が行き交う戦場では、システムがニュータイプと調和し、暴走状態になる欠点もあった。

また、EXAMシステムを扱うパイロットも適性が必要など、アンチニュータイプシステムと呼ばれるものの、ニュータイプ真逆と共通点が多く、大して変わらないようにも見える。いずれにせよこのシステムも、ニュータイプという正体不明の虚像に誘われたものでもあるのだろう。

ニュータイプ。一年戦争に華々しく登場したこの「超兵器」。それは、人のある意味生体ユニットとして扱うものでもあった。では、黎明期における「ニュータイプ」には、どのような意味があったのだろうか。

MS-08TX [EXAM]
イフリート改



所属 ジオン公国軍
武装 ヒート剣×2、6連銃とサイル・ザノド×2
2連装グレナード×2
主な搭載系 ニムス・シュターゼン大尉

EXAMシステム搭載モビルスーツ



宇宙世紀においては、強化人間やクローンなど、通常の民主主義社会ではありえないような人間が多数登場する。こうした事例こそ、この時代の病理をのかもしれない。

いはあるものの、ニュータイプ能力を精密誘導兵器に使うという、きわめてオーソドックスな考え方であったが、結果的には地球連邦軍のRX-78ガンダムに2敗1分け、という結果に終わる。これはニュータイプ同士がお互いを感知できることから、結果一対一になるというニュータイプ兵器のリスクを露呈してしまったともいえる。

ニュータイプ兵器のカウンター・ウエポンであるEXAMシステムは、脳液を使用し、適性のあるパイロットが必要なことなど、類似点も多い。これとて脳科学の分野の研究者の派閥争い、という可能性もあるだろう。

人権を無視した人為的なニュータイプ

結果的に一年戦争においては、ニュータイプ兵器はまだ投入されたばかりということから、ガンダムの活躍もあり、それほど戦線に寄与しなかった。

地球連邦軍は戦後、ニュータイプ開発をある程度積極的に行った。それはニュータイプを作る強化人間という方向だった。つまり、感応液が強い人間を作り出すということであり、これができたことも脳科学の成果かもしれない。一方で、ジオン公国軍残党の最大勢力である、落ち延びたアクシズの勢力も、戦中からのニュータイプ兵器開発を受け継ぎつつ、強化人間だけでなく、ニュータイプと目される人間のクローニングによって、戦力の底上げを図ろうとした。

どちらも人権を無視したすさまじいものだが、おそらく地球連邦軍はジオン公国残党のニュータイプ兵器に対抗するのがその目的であり、ジオン公国残党は自陣の数の少なさを抜本的に解決するため、その戦術思想の中心として置かざるを得ないところがあった。

結果的に、人類の革新であるはずのニュータイプが、逆に人権を無視する恐るべき存在として創り出されたのは歴史の皮肉である。

RX-7800-3
ブルーディスティニー3号機



所属 地球連邦軍
機高 18.5m 本体重量 62t 全備重量 73.0t
装甲材質 ルナ・チタニウム合金
武装 頭部バルカン砲×2、胸部バルカン砲×2、
腰部有線ミサイル×2、ビーム・サーベル×2、
ムーム・ライフル
主な搭乗者 ユウ・カジャ少尉

RX-7800-2
ブルーディスティニー2号機



所属 地球連邦軍→ジオン公国軍
機高 18.5m 本体重量 62t 全備重量 73.0t
装甲材質 ルナ・チタニウム合金
武装 頭部バルカン砲×2、胸部バルカン砲×2、
式銃 腰部バルカン砲×2、胸部バルカン砲×2、
腰部有線ミサイル×2、ビーム・サーベル×2、
ムーム・ライフル
主な搭乗者 ニムバス・シュターザン大尉

RX-7800-1
ブルーディスティニー1号機



所属 地球連邦軍 機高 18.5m
本体重量 62t 全備重量 73.0t
装甲材質 ルナ・チタニウム合金
武装 頭部バルカン砲×2、胸部バルカン砲×2、
腰部有線ミサイル×2、ビーム・サーベル×2、
100mmマシンガン
主な搭乗者 ユウ・カジャ少尉



ダ リ プ ス 戦 役 か ら 第 二 次 ネ オ ジ オ ン 戦 争 期 に 生 ま れ た N T 用 技 術

ニュータイプ

に技術を接取したばかりでなく、旧ジオン勢力からもサイコミュ技術がある程度流出したことも考えられる。

こうした状況を促進した背景には、一年戦争におけるニュータイプの活躍……それは自軍のアムロ・レイとガンダム

の影響も大きかったことも含め、ニュータイプの存在自体が脅威となっていたのである。

それはアムロを幽閉した連邦軍の対応からもうかがえ、かつてジオン公国軍がMSを開発、戦場へ投入したときのような、後手に回る状況はなんとしても避けられたのかも知れない。

グリプス戦役期のNT専用機開発の特徴をあげるとすれば、一年戦争期のように遠隔操作武器の制御にのみこだわっていただけでないことだ。サイコ・ガンダムのように機体の制御すべてをサイコミュで行う考え方も登場した。だが同機体のシステムは、パイロットへの負荷があまりにも大きく、精神崩壊を引き起こしかねない危険な機体となった。結果的に機体制御の補助的な

システムとしてサイコミュを使用する方向性が模索され、たとえばパイオ・センサーを搭載するZガンダムや、それに近い性能のシステムを搭載していると目されるジ・Oやバウンド・ドック、ネオ・ジオンのザクⅡ改などが代表的な機体として挙げられる。

これらの機体は各々異なる勢力と技術アプローチで開発されたものだが、いずれも「パイロット補助システム」としてサイコミュを用いるという点は共通しているであろう。この考え方はやがてサイコ・フレームという、より複合的な能力補助を行うシステムへと発展していくことになる。

消えゆく運命の 遠隔操作武器

ジオン残党の中でも、資源衛星アクシズに逃れた一派には、優れた技術者が多く帯同したに違いない。グリプス戦役では、ガンダリウム（γ）会合をはじめアクシズを発端とする技術者が多かったが、エルメスの遠隔操作武器ビ

ットをファンネルとして継承した機体はキュベレイのみで、純然たるファンネル搭載MSは、グリプス戦役、第一次ネオ・ジオン戦争を通じてアクシズ製MSのみに限られる。連邦軍に目を向ければ、サイコ・ガンダムMkⅡがレフレクター・ビットを搭載している程度である。

ジオン公国のブラッドボックスともいえる同技術は、この時代においてもジオン系であるアクシズでしか実戦運用できるものではなかった。結果的にジオン系勢力以外でファンネル搭載に至ったのは、Zガンダムなどわずかな機体に限られることになる。

ただし、U.C.0090年代後半になると、ファンネル対策が特務機などにも浸透していたことから、将来的には時代の流れから取り残される技術であった可能性もある。その後の遠隔操作武器の歴史をたどれば、アナハイム・エレクトロニクス社などは意図してファンネル系武器の開発を進めていかなかった可能性もあるだろう。

機体制御への転用が サイコミュの未来を築く

ジオン公国軍が開発したニュータイプ（NT）用のデバイスであるサイコミュ・システム。その技術がジオン内部でどの程度浸透していたかは定かではないが、一年戦争終結後、ジオン工廠を接収した地球連邦軍や技術者を吸収したアナハイム・エレクトロニクス社において、盛んにNT専用機の開発が進められることとなる。これは戦後

グリップス戦役～第二次ネオ・ジオン戦争期に生まれたNT用技術

遠隔操作武器(ファンネル/ビット)

ネオ・ジオン

AMX-004 キュベレイ

AMX-004-2/3 キュベレイ Mk-II

AMX-004G 量産型キュベレイ

AMX-015 ゲー・マルク

NZ-000 クィン・マンサ

エルメスのビットの系譜を受け継ぐ遠隔操作武器。ビット自体は内蔵式だったジェネレータをMS本体による充電式に変更し、大幅な小型化を実現した。ネオ・ジオン系の機体で搭載する技術であり、キュベレイやクィン・マンサなどのフラッグシップ機を中心に採用される。だが、他勢力ではあまり採用例がない。技術的に他勢力での再現が困難だったと考えられる他、研究に時間を割いたとしても、いずれ対策が講じられる可能性が高いという読みもあったのかもしれない。



全制御型

MRX-009 サイコ・ガンダム

MRX-010 サイコ・ガンダム Mk-II

機体制御や火器管制など、すべてに通ってサイコミュでコントロールを行う。強大なニュータイプとしての能力が必要とされ、その制御には

強大な負担がかかる。登場したフォウ・ムラサメやロザミア・バダムらはその操縦に苦しみ、ブルドーでも前パイロットだった彼女たちの意思を感じ、不快感を示している。



インコム

■ AMX-014 ドーベン・ウルフ

ドーベン・ウルフなどに装備された遠隔操作武器。厳密にはNT用の装備ではなく、サイコミュを使用できない一般兵用として確立されたもの。有線による制御に限定され、軌道も直線的である。



機体制御補助型(バイオ・センサー他)

アナハイム・エレクトロニクス社

MSZ-006 Zガンダム

MSZ-010 ZZガンダム

サイコミュを機体制御にのみ特化したシステムであり、パイロットのサポート的役割を行う。あくまでパイロットの補助的な役割を果たす機能を持つが、ニュータイプの資質によっては、機体の想定上のスペックを引き出すことが可能となっている。カミーユ・ビダンがZガンダムに搭載されている同システムの力を引き出した際は、ビームの兵器の強化、防衛フィールドの発生、敵性機体のコントロールを奪うという予測せぬ現象を引き起こしている。こうした特異事例はさておき、サイコミュによる機体制御は、同時発生的に多勢力でうまれていくことになる。ビットやファンネルなどサイコミュを攻撃兵器に用いるという手道から、やがてサイコミュ・システムの主流となっていく。



バイオ・センサー同系統技術

名称的にはバイオ

センサーではないが、機体制御にサイコミュを用いる考え方は同じ。特にシロッコはジュビリス船内で独自に開発したシステムを考案しており、進邦系、ジオン系とも異なるワンオフタイプの制御システムとも考えられるだろう。

地球連邦軍

・ティターンズ

NRX-055 バウンド・ドック

・バブマス・シロッコ

PMX-003 ジ・O



バイオ・センサー系技術 ネオ・ジオン

■ AMX-011S サク星改

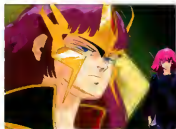
厳密にサイコミュ搭載機として明記はされていない。だがスペース・ウルフ隊との戦闘で見せたマッシュマー・セロの能力をフィールド上に具現化、機体スペックをしのぐパワーを発揮した姿は、まさにバイオ・センサーと同系統技術の搭載を想像させる。





Pilot File

主なパイロット



ハマーン・カーン

アクシズ（ネオ・ジオン）の指導者。アクシズの地球降参を企図し、ティターンズの異議は、連邦政府を圧倒しネオ・ジオンを興した。また優れたニュータイプで、パイロットとしてもカミユやシロノコ、ジェドーらと互角の性能を備えている。

QUBELEY

AMX-004 (MMS-3)

キューベレイ

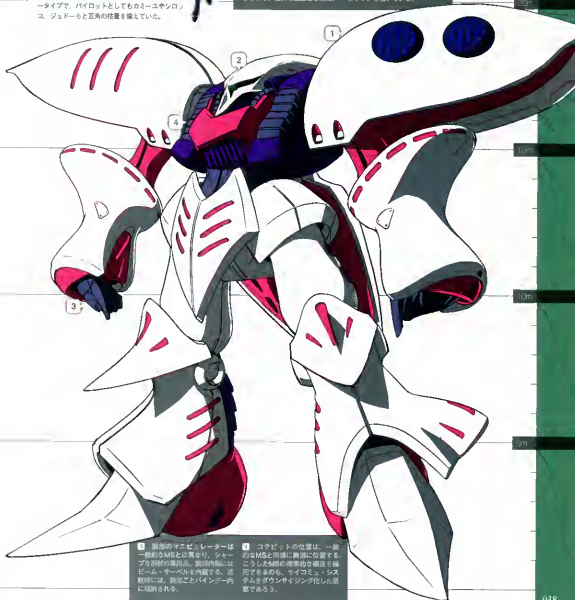
Spec

全高: 18.4m 本体重量: 35.2t 全機重量: 57.2t ジェネレーター出力: 1,020kW

スラスター総推力: 51,600kg 装甲材質: ガンダリウム合金

武装: ビーム・サーベル×2 (ビーム・ガンとしても使用可能)、ファンネル多数

- 1 ウイングバインダー。頭部に設置された大型のバインダーは、キューベレイの大きな特徴。機体の出力では採用されていない、驚くべき性能であった。AMBACに貢献しており、優れた運動性を発揮。
- 2 撮影・観望は、ジオン伝説のモノアイ型メインカメラを採用している。後継機がスタビライザーのように動く伸びている特徴的なシルエットで、女性のように優雅なラインを描いている。



- 3 腕部のマニピュレーターは一般的なMSとは異なり、シャープな刃状の構造。腕の端にはビーム・サーベルを内蔵する。起動時には、腕端ごとバインダー内に収納される。
- 4 コクピットの位置は、一般的なMSと同様に機体前面に位置する。こうしたMSの標準的な構造を採用できるのも、サイコミュ・システムをダウンサイジング化した恩恵であろう。

武器・装備



ビーム・サーベル ビーム・ガン
胸部内側に収納されたビーム兵器。サーベル 射撃武器兼用型。内蔵時には射撃武器として発射し、射出するとビーム・サーベルとして使用できる。キュベレイの固定武装はこの武器のみである。



ファンネル ファンネルコンテナ
機体後部に設けられたファンネル搭載用スペース。ファンネルの搭載スペースとなっている充電用ベッド。ファンネルは経度コンテナに戻り、充電を行う。ファンネルの最大搭載数は10機となっている。

想定されたスペック以上のインパクトを残した名機

一年戦争において、数々の新技術を送り出したジオン公国軍。その中でも、もっとも突出した技術といえるのが、サイコミュ・システムである。

だがシステムの小型化の実現は難しく、一年戦争時代においてもシステム搭載機であるMANN-08エルメスの全長80メートル以上という巨体となった。戦後、アクシズにおいてその開発は継続され、その系譜はAMX-004キュベレイというMSへ発展していく。開発の指針は、サイコミュをMSサイズに搭載するためのダウンサイジング

VARIATION
バリエーション

キュベレイ Mk-II

キュベレイのマイナーチェンジ型であり、少数の機体が生産され、第1次ネオ・ジオン戦争期にプルシリーズへ与えられた。性能的にはオリジナルと同等で、ビーム・サーベルなどに重宝が加えられている程度である。プルシリーズの機体ではあるが、パイロット次第では最新型にも対抗することも可能。この時代のネオ・ジオンにおけるニュータイプ専用機はキュベレイが最も実績があり、強化人間には優先して与えられていたのだろう。



Pilot File
主なパイロット



エルビー・ブル

ネオ・ジオン軍のニュータイプパイロット。プルシリーズのひとり。のちにジュードに共感し、プルーフと対峙することになる。

AMX-004-2

キュベレイ Mk-II エルビー・ブル専用機

量産化を視野に入れたマイナーチェンジ型で、少数が生産された。パイロットは将来的なニュータイプ部隊の育成を考慮してか、プルシリーズが配置され、2号機はエルビー・ブルが搭乗。アーガンに回収され、修理されないままサイコ・ガンダム Mk-II と戦って廃止破壊される。



Pilot File
主なパイロット



ブルフー

プルシリーズのひとり。プルよりも好戦的な性格で、ネオ・ジオンに反旗を翻したグレミーと行動を共にする。

AMX-004-3

キュベレイ Mk-II ブルフー専用機

キュベレイの3号機であり、赤系のカラーリング以外は2号機と同一性能。2号機と同様、オリジナルから性格設定が隔たれ、ビーム・サーベルの形状なども異なっている。エウゴとの戦闘によって、機体は大破している。ブルフーはその後、クイン・マンナに搭乗している。

グダ。サイコミュ・システムの小型化は技術的に困難で、同時代のMRX-009サイコ・ガンダムは40メートル程度。それが連邦軍技術の限界であり、アクシズの技術アドバンテージを物語る。小型化を重要視した背景には、ジオン公国軍残党で構成された小規模国家のアクシズにとって、大型MAは生産や輸送、メンテナンスなど、あらゆる運用インフラ面でもハードルが高く、戦術も限られていたため、他のMSと共通運用できる構造やサイズが望ましいという事情があった。

小勢力であるアクシズを支えていたのは、間違いなく優れた技術であった。U.C. 0080年代後半から0090年代前半にかけて、ガンダリウム合

金をはじめMS開発をけん引する画期的な技術は、アクシズから発信されるものが多かった。サイコミュ・システムの小型化はもちろんのこと、ほかにもヒットを、充電式のファンネルとして小型化の実現も、根幹のMS技術として連邦系勢力やアナハイム・エレクトロニクス社にも拡散していく。

キュベレイは、まずアクシズの指導者であり、優れた素質を持つハマーン・カーンの搭乗機として、プルシリーズへ投入され、同時代の名機と謳われるMSとなった。しかし本機をスペックだけで見るなら、MSN-00100百式と同程度。しかもファンネルも連

用する必要がある。つまり、同機のアドバンテージはサイコミュ・システムのみといえ、単体の性能としては同時代のライバル機、PMX-003ジ・OやMSZ-006 Zガンダムに對してはむしろ劣る。キュベレイは、いわばMSサイズでのサイコミュ運用機をようやく実現できた機体という側面が強く、その実情をいえば、ハマーンの高い能力に依存した、ファンネル攻撃に特化した機体ともいえるのだ。

だがファンネルというU.C. 0080年代からU.C. 0090年代を象徴する技術を実現化したという意味だけでも本機は、MSの歴史の中で名機と語られる機体なののは間違いのない。

PILOT

主なパイロット



カミーユ・ゼダン

エウゴのMSパイロット。グリーン・ノアに住む学生だったが、ティターンズへの不信感からエウゴに参加。戦いの中でニュータイプ能力が顕在し、グワビム戦役において重要な役割を果たしている。

1 背板部、背面に展開するフライングアーモア。大気圏再突入時に不可欠な機構。これにより、他のMSとは異なる形状へと変化する。飛翔アーモア・センサーを兼ね合わせ、ウェイブ・ライダーとして機能も発揮する。

2 ボディ：Zガンダムの胴体内部は機体や脚部を収納するため、従来のMSのような構造と異なっている。ムーバブル・フレームと呼ばれる小型の機械生命の関節がなければ、実現しなかった構造である。

3 ロングアーム・スタビライザー：特効的な背面のスタビライザーは、スラスターやAMBACとしての機能を併せ持っている。機体的に背面にコンドセルが収められている。展開された。

4 脚部、背面にフライングアーモアを展開する前後上、スラスターは胴部に集中している。これも従来のMSとは異なる考え方で、実用時には、推力を一方集中することで優れた機動性を誇る。



ウェイブ・ライダー

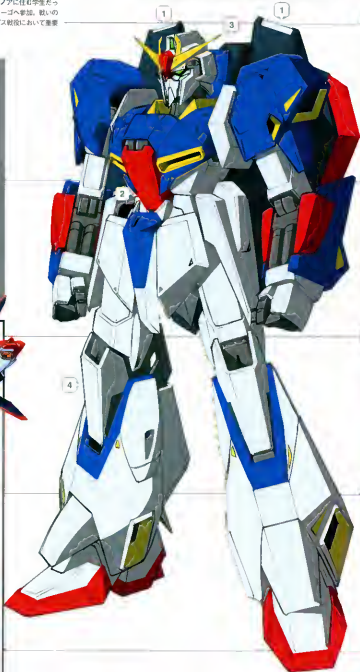
大気圏再突入時に発生するショックウェイブを利用して推力を得るウェイブ・ライダー。機体下面に発生する圧縮波に戻ることから、この名称がつけられた。大気圏再突入時においても戦続能力を保持し、再突入時にMSの操縦も可能とこれまでのMSによる大気圏突破の常識を覆した。また本形態では、推力を後方に集中することで大気圏内における飛行能力を発揮し、MSを上部に搭載しサブ・フライト・システムとして運用可能である。

ZETA GUNDAM
MSZ-006

Zガンダム

Spec

機体高 19.5m 全機重量 28.7t 全機推進 42基 ジェネレーター出力 2,000kW スラスター総出力 112,600kg
センサー範囲半径 14,000m 装甲材質 ガンダリウム合金 武装 バルカン砲×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、
ハイパーメガ・ランチャー、グリーンード・ランチャー×2 備考 ウェーブ・ライダー形態





ハイパーメガランチャー

Zガンダムが使用する大砲・バズーカ。百式が使用していたメガ・バズーカ・ランチャーをベースとしている。出力は強大だが、運用面では主に艦載の艦撃など、遠距離攻撃をメインに使用されている。

グレネードランチャー

腕部に2門ずつ装備する榴弾砲。腕部にオプションのマガジンを装備することで弾数を増やせる。マガジン装備時は、シールドマウントを使用するが、変形を阻害するため、使用する機会は限定される。



ビーム・ライフル

専用ライフル。バレルの伸縮が可能。ウェイブ・ライダー変形時は機体上部にマウントし、固定銃として使用できる。近接戦時にはビーム刃を形成して、ロング・ビーム・サーベルとしても使用可能。



ビーム・サーベル

両腕のアーマー内に内蔵された近接武器。ウェイブ・ライダー時にはビーム・ガンとしても使用可能。カミーユは怒れるビーム・サーベルにライフルを充て、ビームを拡張するビーム・コンフューズという技を繰り出している。

PICK UP!



グリプス戦役後のZガンダムは、ガンダム・チームの機体として購入され、ルー・ルカの影響によって第二次ネオ・ジオン戦争終結まで戦い抜いた。機体の絶対的な性能としては、バンナム・ハンマに匹敵されている。第二次ネオ・ジオン戦争の最終決戦では、フィン・マンザに圧倒されるも、同様のコクピット間時にグレネードを投擲するなど重要な役割を果たしている。

シロ・ニコとの最終決戦に挑んだカミーユは、そのニュータイプ能力でZガンダムというマシンを介して発展させる。それはバリアのような現象や、ジ・Oを行動不能にするという現象を引き起こした。それ以前にも、ヤザンとの戦い時にビーム・サーベルを大型化させていた。これはZガンダムに搭載されているパイオ・センサーが引き起こした現象と推測されているが、想定された機体であるかは定かでない。

だがエヤは死の瞬間に「Zガンダムは人の意思を吸いこんで力にできるマシン」とカミーユに伝えている。機体の恐ろしさを感取っていたようである。

複雑な構造をクリアし
TMSの新境地を切り開く

反地球連邦組織であるエウゴの大きなターゲットは、当時ディターンズの本拠地となっていたジャブロー攻略であった。それは実際に90機以上のMSを投入し、ジャブローへの降下作戦を展開していたことからも明らかであり、「大気圏外からの強襲用MS」の開発は早期から予定されていたのかもしれない。

振り返ってみれば、RX-78ガンダムをみるまでもなく、一年戦争時よりMSによる大気圏突入の可能性は追求されていた。技術革新を踏まえた新し

い回答が、MSZ-006 Zガンダムといっている。

そうしたエウゴの意思と、アナハイム・エレクトロニクス社による高性能MS開発プロジェクト「Z計画」が当初よりリンクしていたかは定かではないが、本機は大気圏突入能力をコンセプトとした可変MS（TMS）として誕生。これには、同時期にカミーユ・ビダンが考案したRX-178ガンダム Mk II とフライングアーマーを融合したコンセプトも、大きな影響を与えていたと考えられている。

Zガンダムの可変形態はウェイブ・ライダーと呼ばれ、バリエーション・システムなどの後付けの装備を必要とせず、

宇宙空間から標準兵装のまま大気圏突入が可能であった。

機体の構造は複雑なもので、一年戦争時代のMSからは想像もつかない機構であったと想像できる。だが、ガンダム Mk II の面影によりもたらされたムーバブル・フレームで、この難題を解消している。本機はこうした強襲用MSに特化したコンセプトでありながら、ガンダリウム（V）合金や高出力化された小型核融合炉などの搭載によって、スタンダードなMSとしても優れた側面を持ち合わせていた。

これに操作系統をアシストするサイコミュ系機器であるパイオ・センサーが追加搭載され、カミーユ・ビダンの

能力との相乗効果で、ニュータイプ機といえるほどの実力を発揮する。

特にグリプス戦役の最終局面においては、ビーム兵器の出力や展開能力の制御の掌握、一時的にバリア展開能力を発揮する。この現象は明確にパイオ・センサーによるものかは証明されていないが、カミーユの超絶的なニュータイプ能力が同センサーを介して発現したのだと考えられている。

Zガンダムをメカニズム的な機体面だけで捉えるならば、厳密にはニュータイプ専用機ではないのかもしれない。だがニュータイプの能力を引き出した機体という意味では、そう呼ぶにふさわしいだろう。



PILOT FILE

主なパイロット



フォウ・ムラサメ

ニュータイプ研究所として知られるムラサメ研究所に所属する強化人間。自身の過去の記憶や本当の名前と引き換えにサイコ・ガンダムに搭乗して戦う。カミーユと出会い、大きく運命が変わることに。名前のフォウは4番目を意味する。

PSYCO GUNDAM
MRX-009

サイコ・ガンダム

Spec

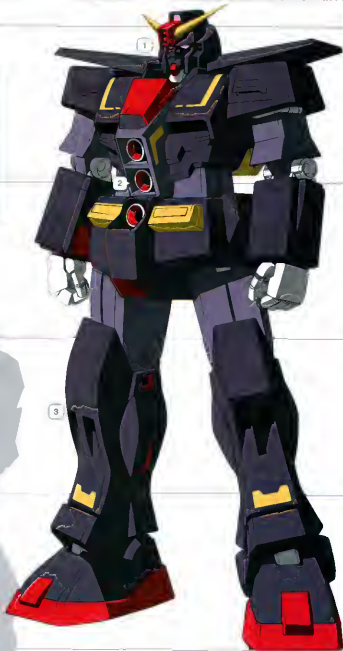
全高 40m 本体重量 214t 全備重量 368t1 グネレーター出力 33,600kW
スラスター総数 168,000kg センサー有効半径 10,200m 装甲材質 ガンダリウム合金など(詳細不明)
武装 振動メガ粒子銃×3、ビーム砲×10、小型メガ・ビーム砲

① 頭部にはコックピットを備える。マスク部分がハッチになっており、そこから搭乗する。モビルフォートレス時には、頭部カバー部分のハッチから出入りする仕組み。

② 本体中央部には振動メガ粒子砲を備える。基本的にはメガ粒子砲などのビーム兵器主体で、バルカン砲やミサイルといった実体弾兵器は備えていない。

③ 胴部フレームには変形機構を搭載。モビルフォートレス時に胴下部分のアーチャーが前にせり出し、足首を収納する。かなり複雑な変形を行う。

MSとのサイズ対比



40m

30m

20m

10m

武器・装備



拡張メガ粒子砲
サイコ・ガンダムの主兵装。両腕にビームの光をまき散らして攻撃する。広範囲に届くため、容易に接近できない。指先のビーム砲と併用することで、さらに威力を増す。これ以外にも腕部には小型メガ・ビーム砲を備え、さながら動くビーム砲台である。



モビルフォートレス形態
サイコ・ガンダムのMA形態の別称。型や装甲と複数のビーム砲による高い攻撃力、まさに豪傑の名に相応しい形態だ。飛行能力もあるが、その巨体ゆえ自在に飛ぶのは難しい。カルダスソードの機動車には収まらない大きさである。



ガンダムの名を冠した
強大なサイコマシン

一年戦争終結、サイコミュ・システムは地球連邦軍にとって、大きな脅威となった。たとえばコンバットウ(旧ソコモン)駐留軍を恐れさせたエルメスの戦果は、連邦軍優勢の中においても、ジオン軍の技術への懸念を抱かせたに違いない。

それゆえ戦後、地球連邦軍では盛んにニュータイプ(NT)の研究が行われることになる。その研究機関の1つであるムラサミ研究所では、サイコミュ・システムを基本とし、両システム搭載型MSの開発と、その生体ユニッ

トといえる強化人間の研究開発が並行して進められることとなった。

地球連邦軍のフラッグシップたるガンダムとサイコミュ・システムを融合させることは当然の選択と考えられたが、本来のコンセプトは拠点防衛用のモビルフォートレス形態がベースとされており、それゆえ分類上は可変MAに属している。

その理由は巨大なサイコミュ・システムを搭載するための器という側面が強く、そもそも人工NTである強化人間をパイロットとするため、実用的な運用を可能とするためにサイコミュ・システムが大型化せざるを得なかったといわれる。

Variation
バリエーション

機体番号
RX-007
プロトタイプサイコ・ガンダム

Spec
全高 18.3m
全幅 27.4m
全重量 110t
ニューレナター出力
3,700kW
スラスタ数 総出力
61,300kg
センサー 電磁波
11,300m
装甲材質 チタン合金
セーブ・ゾウ合金材
武装 拡張メガ粒子
砲、ビーム砲×2(両
腕サイコミュシステム
搭載)



サイコ・ガンダムの試作機。サイコミュなどの技術が盛り込まれている。最終のガンダムを目前して開発された。

だが、試作するサイコミュの小型化に難航し、ビーム兵器の運用に支障をきたす。出力不足など、機体としての完成度は低かった。

マウした事実だけをとりえると、まだまだ地球連邦軍のサイコミュ技術は劣っていたと捉えられるが、逆に機体や兵器などの制御をすべてサイコミュによって行うということは、ある意味、設計思想の先進性の高い機体であるともいえるかもしれない。

一方、MS形態への変形機構は、随伴機を使用することなく、単機としての運用を意識したとされており、実際に本機の運用実績では随伴機と連携したことはない。そのシルエツトは、連邦軍の象徴たるガンダムであるが、機動的な側面から捉えれば、頭部に設けられたコクピットや両腕のビーム砲などからはジオングの影響が色濃く表れ

ている。こうした構造的な特徴や4メートル級の機体サイズと相まって、名称はガンダムだが、異形という印象を抱かせる。

ミノフスキー・クラフトを搭載し、飛行能力を有していることも技術的な特徴だろう。ガルダ級にも搭載不可能な巨体を地上で運用するための装備に他ならず、これは当初から地球上での運用を想定していたことを表す。

はたして来るべき地球決戦を見越しての考えなのか、宇宙地上両面での運用を想定してのものか。ティターンズがサイコ・ガンダムに対して、どのような運用プランを抱いていたのかは、定かではない。

Pilot Size

主なパイロット



ロザミア・バダム

ニュータイプ研究所であるオーガス研究所の強化人間。ティターンズの一番として戦闘に参加するが、敵対するカミーユを兄と思ひ込み、一時期行動を共にしていたこともある。



ブルツー

アクシズ(ネオ・ジオン)のクローン強化人間で、プルシリーズとも呼ばれる。ダブリン市街にコロニー落としが実行された際、サイコ・ガンダムMk-IIに乗り、ジェドも戦った。

1 マイコ・ガンダム同様、頭部にコクピットを備えている(コクピット内も別写)。しかし後継機ながら肩や腰部形状はかなり変更されている。胸部部分(デングード)が下方へスライドしてハッチが開く。

2 本体中央部はメガ磁気ビーム砲へ改造されている。機体各部のメガ・ビーム砲も増設され、より攻撃力が増している。レフレクター・ビットは背中から射出される。

3 胸部はジオングのように有線サイコミュ式でオールレンジ攻撃が可能。宇宙にはビーム・ソードを備え、近接戦闘も行えるようになった。

MSとのサイズ対比

PSYCO GUNDOAM Mk-II
MRX-010

サイコ・ガンダムMk-II

Spec

頭頂高 33.98m 全体重 157t 全備重量 223t ジェネレーター出力 13,702kW
スラスター総推力 244,240kg センサー有効半径 16,230m 装甲材質 ガンダリウム合金
武装 サイコミュ式ビーム・ソード×2、メガ・ビーム砲×20、メガ磁気ビーム砲×3、レフレクター・ビット多数



武器・装備



レフレクタービーム

機体の背部から射出されるサイコミュ兵器。ビーム本体にはビーム砲は搭載されておらず、サイコ・ガンダムMk-IIから撃たれたビームを遠隔地へと反射し攻撃する装置。またビームを反射し、ビームの集束や拡散も可能。



メガ磁数ビーム砲

サイコ・ガンダムに装備されていた磁数メガ粒子砲の強化版。やはり腰部に縦3連で装備されるサイコ・ガンダムMk-IIのメイン武装だ。機体の各部に設置されたメガ・ビーム砲と一緒に全方位に照射する種はハリネズミを想起させる。



有線サイコミュ・ハンド

両腕にはワイヤーによる有線制御で射出できる。手首部分にはビーム・ソードを内蔵している。通常ビーム砲撃主体のオールレンジ攻撃とは異なる戦法も可能だろう（通常通りの攻撃も可能）。敵を捉えるにも利用できる。



モビルフォートレス形態

サイコ・ガンダムMk-IIのGMA形態。トランスフォームする際の機体構造や可変機構などは、前身であるサイコ・ガンダムを踏襲している。変形した機体の胴部同側面部分に、分割したシールドを装備するもサイコ・ガンダムと同様である。

強大な力の継承は
新たな形に受け継がれる

MRX-010サイコ・ガンダム Mk-IIは、ムラサメ研究所が送り出したMRX-009サイコ・ガンダムの武装強化タイプである。

頭部のデザインや全体的なシルエットはさらに異形さを増しているが、モビルフォートレス形態への変形を取り入れた構造や40メートル級の大規模MS形態など、基本的な構造は踏襲している。その一方で本機のスペックをひも解くと、ジェレネータ出力は押さえず（小型のものに換装か？）、スラスター・推力のパワーアップを図るなど、

扱いやすさと機動性の向上に主眼が置かれていた。

武装面では、全身に20基以上のメガ粒子砲を装備し、全身に武装を配したコンセプトに変わりはなく、新装備としてレフレクター・ビームを搭載している。これまでのサイコ・ガンダムでは、機体を中心とした放射状にのみビーム攻撃を行うことと基本であったが、サイコ・ガンダムMk-IIではレフレクター・ビームにビームを反射させることによって、擬似的なオールレンジ攻撃を可能としている。

また胴部は、指先に10門のビーム砲を持つことは変わらないが、手首部分からビーム・ソードを発生する分離式

のサイコミュ・ハンドとなっており、これらの武装の変更によってサイコ・ガンダムよりも多様な戦闘が可能となっている。

このように状況に対して最適化を施したものの、パイロットに過度の負担を強い機体特性に変わりはなく、パイロットの選定は常に大きな問題として付きまっていた。フオウ・ムラサメを失ったムラサメ研究所は、グリブス機後継半では目立った動きを見せておらず、結果としてオーガスタ研究所出身の強化人間、ロザミア・バダムが搭乗することとなった。

だが、その精神状態を安定させるため、ゲーツ・キャバを兄と想いこませ

Version
バリエーション

MRX-011
量産型サイコ・ガンダム

Spec

全高 22.7m
本体重量 43.0t
全備重量 135.0t
ジェネレーター出力 15,280kW
スラスター総出力 10,300kW
センサー有効半径 10,300m
装甲材質 ガンダリウム合金
武装 ハイパービーム・サーチャービーム・キャノン（腕）×2、収束式ハイパーバスター、磁数メガ粒子砲×2、有線ビーム砲×2、インコムユニット×2、グレナード・ランチャー×2



ティターンズのエースパイロット陣に開発された機体。モビルフォートレスへの可変機構などはオミットされ、機体のダウンサイジングが図られた。また、非ニュータイプ一般兵でも扱えるインコムが装備されている。しかし、実戦配備はされなかった。

で随伴させるなど、いびつな運用を行わざるを得ないなど、サイコ・ガンダムが変わりなく危険なマシンであることを印象付ける。

グリブス戦役において、MSZ-006 Zガンダムとの戦闘によってコクピットを撃ち抜かれて大破したが、その残骸は奇しくもネオ・ジオンによって回収、修復が施され、強化人間のクローンであるフルツの搭乗によって実戦へと投入された。

また、機体の構造自体はNZ-000 クイン・マンサにも影響を与えたといわれ、結果としてジオン系と連邦系の技術の融合が、後のサイコミュ技術の発展へとつながることになる。

Pilot File

主なパイロット

ロザミア・バダム

ティターンズに所属する強化人間。本機に搭乘し、エウーゴと戦う。やはり、強化人間らしく性格は不安定気味でカミーユと再会した際、記憶が断片化してしまっ



ジェリド・メサ

ティターンズに所属するMSパイロット。ある時からカミーユに対し激しい憎悪を抱き、軌道に墜つ。機体を乗り換えることが多いのだが、バウンド・ドックが最後の機体となった。



BOUNO DOG

NRX-055

バウンド・ドック

Spec

総高さ 27.3m 本体重量 182.7t 全機重量 129.4t ジェネレーター出力 12,050kW
スラスター総推力 145,800kg センサー有効半径 5,540m 装甲材質 ガンダリウム合金
武装 胸部クロー、腕部クロー、ビーム・ライフル、メカ磁気粒子砲

■ 右腕に装備するシールド内部にはメガ磁気粒子砲を内蔵している。MA時の射撃武器であり、シールド内のアームで自身を把持し展開する。そのためメガ磁気粒子砲自体にグリップはない。

■ シールドの先端にはMA用のモノアイスリットが備わっている。その下部にミニビュレーターがある。当然ながら、MSR態時にモノアイは起動しない。

■ 右腕のクロー・アームは近接格闘用の装備。そのためビーム・ライフルなどの射撃はできない。バウンド・ドックの上半身は左右非対称という独特の形状である。

■ MA時の射撃用の右目も果たす舞臺は、右腕に展開して格闘時のクロー・アームとしても使用できる（伸縮機能はない）。コロニーの中でも飛行でき、サイコミュによるリモコン操縦も可能となった。



武器・装備



ビーム・サーベル

近接戦闘用兵器。一般的なMSが装備するものと同じで自兵隊で使用する。ただし、本機の場合、ビーム・ライフル同様、ビーム・サーベルを扱う際には左腕で使用する。珍しい機構といえるだろう。



ビーム・ライフル

射撃用ビーム兵器。バウンド・ドック専用機タイプで、MS形態時には左腕で使用する。MA時には機体上部右側面にマウントする。また左腕のシールド部分にはメガ磁鉄粒子砲を内蔵している（主にMA時に使用）。

NTの可能性を模索した異形の試作機

サイコミュ・システムといえば、MSN08エルメスのビットなどに代表される。脳波による遠隔操作兵器が強い印象を残すが、戦後、連邦軍内での研究はやや異なる方向性を歩む。それはサイコミュ・システムを機体制御に用いるというもので、運動性や反応速度の向上といった方向性を突き詰めるものであった。

こうした技術はビットやファンネルなどと違い、「目に見る効果」としてのインパクトは薄いものの、時代の流れの中でファンネル搭載MSの目的



モビルアーマー形態

バウンド・ドックの近接形態であり、本来はこの姿で運用される。敵と遭遇し左腕にMS形態へと変形する。MA時でも腕部を格闘戦用クローに突くことができるので、戦力は決して低くない。

が変化していく一方で、U.C.0096年にはRX-0ユニコンガンダムのような「究極の機体制御型ニュータイプ（NT）専用MS」へ辿りつく。この未来を考えれば、あながち連邦軍が目指したコンセプトは間違っていない。本機もそうしたサイコミュ・システムを機体制御に用いた可変MAだ。機体自体は美観性が強く、右腕がクロー、そして左腕が汎用マニピュレーターを採用するなど、運用面での制約は大きかったがもしない。また、上半身は細身ながら下半身はMA形態のボディであるために巨大であるなど、その構造も独自の強いものであった。

バリエーション

バウンド・ドック (タスクマスタータイプ)

バウンド・ドックのバリエーションで試作1号機にあたる。グレーのモトロン鋼のカラーリングが特徴で、コクピットは複座式となっている。ティターンズのゲーツ・キャバがパイロットを務めた。強化人間であるロザミア・バダムをコントロールするために行動を共にしていた。ロザミアがサイコ・ガンダムMe-まに乗り換えた後も随伴機として実行した。作中では終始MA形態だった。

主なパイロット



ゲーツ・キャバ

ティターンズのバスク・オム大佐配下の強化人間部隊の一。ロザミアと行動を共にし、格格的には比喩的安定している（ロザミア覚醒時には暴走した）。

めていたのかもしれない。

機体自体は数機（一説には2機、3機とも）のみが生産され、同研究所出身のロザミア・バダムの乗機として、また試作1号機には、やはり強化人間のゲーツ・キャバが搭乗し、MRX-010サイコ・ガンダム Mk II の随伴機として使用された。

ロザミア亡き後の機体は、ジェリド・メサの搭乗によってMSN006Zガンダムと戦闘。彼はNTではないとされるが（詮説あり）、優れたポテンシャルを発揮。一般パイロットでも、ある程度の性能を見せた点も、バウンド・ドックが秘めた新たな可能性の証明といえるのではないだろうか。



Pilot File

主なパイロット



パパテマス・シロッコ

木星往還船ジュピトリスのリーダーだったが、ティターンズに転身した野心家。ニュータイプ能力も高く、自身が設計したジ・Oに搭乗し、グリプス戦役を戦った。カミーユとエカランダムの特攻により戦死。

THE 0

PMX-003

ジ・O

Spec

頭頂高: 24.6m 本体重量: 57.3t 全備重量: 86.3t ジェネレータ: 出力 840kW
スラスタースト推力: 135,400kg センサー有効半径: 11,300m 装甲材質: 超硬タングステン
武装: ビーム・ソード×4、ビーム・ライフル

① 非常に細長い胴部。センサー部分は、遠距離戦ながら、ザクのようなモノアイが。しかし、ただの単眼式ではなくモノアイにはスリットが見られる。胴部には発信受信機を内蔵。

② 肩中のフィンには、センサーを備えた加熱板で上下に可動する。機体各部に設けられた姿勢制御用のスラスタで高い機動性を発揮する。

③ 胴部のフロントアーマー、リアーマーなどにはスラスタが設置され、プロペラントタンクの役割も果たしている。

④ フロントアーマー 前面には隠し剣を装備する。先端部のマニピュレーターにはビーム・ソードの把持が可能で、フレキシブルに可動する。敵への不意打ち攻撃の効果も高い。



武器・装備



ビーム・ソード

近接格闘用の兵器。左右のスカートアーマーに2本ずつ計4本装備。機体の簡易も使って、4本同時に使用可能だが、通常の剣闘では1本が基本。なお隠し技による斬撃は雷打ちや牽制効果が高い。



ビーム・ライフル

ジ・Oの主兵器であり基本装備。Eバック方式の高出力タイプだが取り回しに不便はないようである。威力も高くシロッコの射撃能力がわかることで、ファンネルを撃破することも可能である。

PICK UP!



コロニー・レーザーによる照射でティターンズの艦隊は大ダメージを受け、多くの艦船が撃たれ、船頭艦隊が不可能なダメージを負った。

自身の理想（野望）が満たされたシロッコだったが、引下がることなく復讐。カミーユとの決戦をつけるべく最後の前線に現れた。しかし、Zガンダムから不思議なオーラが発すると、動きを止めるシ・O。ビーム・ライフルも弾かれ不可解な現象に陥ったシロッコ。最終的にはウェーブ・ライダーに安易にZガンダムとカミーユ（その他、大勢）の突撃により、宇宙へ飛ばされた。



連邦軍の内紛に端を発するグリブズ戦役では、じつに多くのMSやMAが登場した。とりわけニュータイプ専用機の本音が目立った。ニュータイプは、同じ能力を持つ同僚、引き合う性質があり、戦場では機体となく密着を繰り返した。

本来ならば共通するものなら、互いに手を取って進むのが理想だが、人間のエゴがぶつかり合う戦場は、それを阻むのだ。

カミーユとシロッコ、ともに高いニュータイプ能力を持っていたが、お互いの利害と戦っていた。決して相容れることはなかった。

COLUMN 宇宙世紀を支える超巨大

木星往還船
ジュピトリス



MSに搭載される熱核融合炉・ジェネレーターに用いる、ヘリウム3（星水素）を採取して運搬する資源探査船だ。宇宙世紀には欠かすことのできない船といえる。

地球と木星間を行き来する全長2kmに及ぶ巨大な惑星往還船である。核融合エンジンによる推進で航行し、船体内部には居住区だけでなく、数か月以上に及ぶ長期航海になるため、生活物資の貯蔵庫や工場などの工場ブロックを備えている。こうした設備により、船内でMSやMAの開発製造が可能となっている。シロッコの所属する「木星船団」は、地球連邦軍の傘下である。

ちなみに第一次ネオ・ジオン戦争後、ジューダが乗り込んだ木星往還船はジュピトリスIIで、ジュピトリスの同型船だ。

機体制御を高めた
究極のNT専用機

ティターンズの士官であるバプテマス・シロッコが、独自に設計・開発した自身専用のMSである。型式のPMXナンバーのMSは、すべてシロッコ開発によるもので、PMX0000メッサラ、PMX0001パラス・アテナ、PMX0002ポリノック・サマーン、そして本機と計4機の機体が確認されている。

建造自体はシロッコ自身が指揮を執るヘリウム3探査輸送船ジュピトリスの艦内工廠において行われ、その開発のアプローチは、アナハイム・エレクトロニクス（A.E.）社ともジオン系とも異なる独自の規格だった。「木星帰りの男」シロッコの開発したジュピトリス系の機体は、機体に過剰ともいえる大出力、多数のスラスターを装備することが特徴であった。

極端なコンセプトを持つシロッコによるMS群は、異端である一方、地球圏のMSとは異なる特性を發揮。特にシロッコが操縦時に駆ったメッサラの機動性は、エウロに衝撃を与えていた。シ・O自体はNT専用機というより、シロッコ専用MSというべきもので、彼の類稀なるNT能力を機体制御に活かすべく、独自に開発されたサイコミュ・システムが搭載されている。

武装は、ビームライフル、ビーム・トコノクス（A.E.）社ともジオン系とも異なる独自の規格だった。「木星帰りの男」シロッコの開発したジュピトリス系の機体は、機体に過剰ともいえる大出力、多数のスラスターを装備することが特徴であった。

同コンセプトのサイコミュ装備は、Zガンダムのパイオ・センサーなど、他勢でも開発されてはいたが、ジオンに搭載されていたシステムは、A.E.社系やネオ・ジオン系とは別系統の技術であったという。

このシステムは機体制御に用いられ、全身に配された50基ものスラスターと相まって、ガンダウム合金の重装甲をまとった重装甲のMSだが、恐るべき機動性、追従性を獲得し、多くのパイロットにとって脅威となるファンネルなどのサイコミュ兵器をものともせず、AMX0004キュベレイと互角の戦闘を展開していた。

特殊な装備として挙げられるのは、フロントスカート内に「隠し扉」と呼ばれる小型マニピュレーターを装備している点である。これにビーム・サーベルを装備させることで、文字どおりもう一対の腕として機能した。

ジ・OはもうひとつのMSの潮流として突如現れたが、それがハンドメイド的な存在であったかゆえに、その流れは受け継がれることなく、急速な時代の流れに呑み込まれていった。

PILOT PICT

主なパイロット



ジュード・アーシダ

サイド1のシャングリラでジャック服を穿んでいた少年。寄港したアーガマからZガンダムを盗みだそうとしたことをきっかけに、アーガマに乗り込むようになる。ニュータイプとして優れた資質を持ち、ハマーンもその力を認めている。

ZZ GUNDAM

MSZ-0010

ZZガンダム

Spec

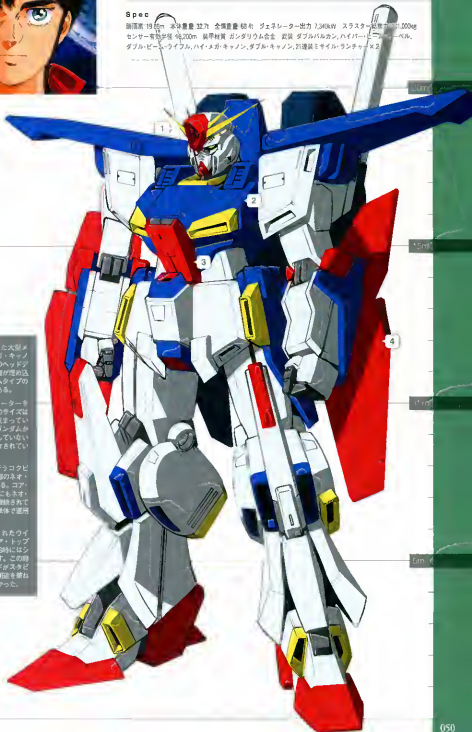
全高 19.5m 本体重量 32t 全機重量 47t ジェネレーター出力 7.5MW スラスター総数 1,000個
センサー有効半径 40,000m 装甲材質 ガンダリウム合金 武装 ダブルバルカン、ハイバー・バズーカ、
ダブルゼーロー・ライフル、ハイ・メガ・キャノン、ダブル・キャノン、対艦戦ミサイル・ランチャー×2

④ 頭部に装備された大型メガ粒子砲、ハイ・メガ・キャノン。ガンダムタイプのヘッドデザインの中に、大空砲が埋め込まれている。ガンダムタイプの中でも異色の構造である。

③ 3基のジェネレーターを搭載しつつも、機体のサイズは通常のMSクラスに収まっている。一方で重量はZガンダムから5t超えが確認されているなど、絶妙な設計がなされている。

① 機体の制御を行うコックピットユニットは、内部のネオ・コア・ファイターが回る。コア・トップ、コア・ベースにもネオ・コア・ファイターは搭載されているが、ジュードは単体で運用する場合が多かった。

② 4関節部に新装されたウィングバインダー。コア・トップの翼を兼ねるが、MS時にはシールドの役割を果たす。この時代のMSは、シールドがスライダーなど複数の形態を兼ねることも珍しくはなかった。



時代が生んだ 高出力MSの究極形

アナハイムエレクトロニクス(AE)社が進めるZ計画で推進された1機でU・C 0080年代後半までは最高スペックを誇る機体として完成した。同じZ計画の機体であるMSZ-006 Zガンダムとは、構造的な継承はなく、むしろRX-78ガンダムとGアーマーを融合させたようなコンセプトを採用した。これはZ計画が選択したプロジエクトではなく、ある程度の基礎技術は共有しながらも、先端のMS開発を目指していたことを想像させる。

MSZ-0010 Zガンダムの特徴

Arms and equipment 武器・装備



ハイパービーム・サーベル
通常のMSが装備するビーム・サーベルの数倍の威力を誇るという。またバックパックに装備している際には基部がフレキシブルに可動し、ビーム・キャノンとして機能。コア・ベース時にも使用可能である。



ダブルビーム・ライフル
2連装の高出力ビーム・ライフル。MSの携行ビーム兵器としては、圧倒的な出力を誇る。コア・トップおよびGフォートレスの機体部を兼ねており、場合によってはコクピットにパイロットが搭乗している場合も。



Gフォートレス

コア・トップ、コア・ベース、ネオ・コア・ファイターが合体したZガンダムの派生形態であり、総称機として総称を行うことができる。この形態からなら、そのまま分離せずにZガンダムへの変形が可能である。

を組織くなら、高火力、高出力、高性能という点に尽きる。通常のMSサイズながらジェネレーターを3基搭載しており、そのジェネレーター出力は7340キロワットにも及び、これは後世のMSよりも上回る高出力である。携行する武装もダブル・ビーム・ライフル、ハイパー・ビーム・サーベルと、通常の武装よりもワンランク上の出力をもつ専用武器が用意された。

さらに頭部のハイ・メガ・キャノンがZガンダムの怪物的火力を印象付けている。これはランドセルのジェネレーターを直結し、出力の大部分をメガ粒子砲として放つビーム兵器だが、出力の調整が行われていなかった初陣では、発射後に行動不能に陥った。

一方、この時代のトレンドの変形システムも、大きな構造的特徴の1つ。だがZガンダムや他の可変機のような変形ではなく、本機の場合はむしろ合体という観点が必要だったのかもしれない。機体は、上半身を形成するコア・トップ、下半身を形成するコア・ベース、さらに中核を成すネオ・コア・ベース、という3機の航空機に分離することが可能であり、なわかつ3機の航空機を合体させた連航形態「Gフォートレス」にもなる。変形によりサ・フリート・システムを用いずとも移動範囲の拡大を果たすだけでなく、ユニットとジェネレーターを分散し、運用面の



のリスクヘッジを図ったのだろう。ZガンダムとZガンダムの関連性を探るなら、パイロット・センサー搭載機という点が挙げられる。A.E.社で研究が進められていた同システムは、グリプス戦役のZガンダムで予期せぬ現象を発生させたが、そのままニュータイプパイロットの補助デバイスとして本機にも搭載された。



Zガンダムは、もともと超絶的な進化と呼ばれる第一次ネオ・ジオン戦争を象徴するMSである。ハイ・メガ・キャノンを代表とする兵器群、内蔵火器もビーム・キャノンとして使用できるハイパー・ビーム・サーベルや、ランドセルにも2連装ミサイルランチャーを搭載するなど、MS一様な装備で使用を要する汎用兵器という概念を覆すものだった。ただフルパワーによる稼働時間はわずか15分程度といわれ、また複雑な構造は運用面での熟練も無視できないものとなり、数年後にはMSの転機が訪れる。

FULL ARMOR ZZ GUNDOAM

FA-010S

フルアーマーZZガンダム

Spec

機体高:19.85m 本体重量:32.7t 全備重量:87.2t ジェネレーター出力:7,340kW スラスター:出力124,800kg センサー:高度中級 16,200m 装甲材質:ガンダリウム合金 武装:ハイ・メガ・ネーデル・ブレイミサイルランチャー×2、16連装ミサイル・ポッド×2、8連装ミサイル・ポッド×2、他

仕様変更と強化による
ZZガンダムの完成形

第一次ネオ・ジオン戦争の最終局面に投入されたMSZ-010 ZZガンダムの強化プラン。いわばZZガンダムのフルアーマープランであり、主に上半身を中心としてマイクロミサイルポッド内蔵のガンダリウム合金製強化装甲を装着。脚部には追加スラスター



が装備され、ダブル・ビーム・ライフルは右腕部の固定式とされている。こうした変更によって全備重量は

87・2トンにも及んだが、ランドセルのメインスラスターを新型へ仕様変更することで、総推力124,800キロへとパワーアップを果たしている。

これらの追加パーツは戦闘中に任意にバジすることが可能で、実際に内蔵ミサイルを使い果たしたのち、実

戦でも破壊されている。

フルアーマープランに伴って、ベースとなるZZガンダムにも小変更が施されており、型式番号もMSZ-010Sとして俗に強化型と呼ばれる。

前述のランドセルの変更のほか、新型ショルダー・スラスター・アーマーの装備やランドセル搭載ミサイルのマイナーチェンジ、各部スラスター変更など多岐に渡る。

① ランドセルは50%になって大幅に変更が加えられたポイントの1つ。メインスラスターや内蔵ミサイルの仕様変更が行われ、これまではまったく異なるパーツだった。

② 胸や肩、腕などに装備された追加装甲パーツは、防御力を高めるだけでなく、ウェポンベイとしても機能。胸部や脚部にマイクロミサイルが搭載されている。

③ 脚部にはビーム兵器のハイ・メガ・ネーデルが装備されている。脚部の装甲や、エネルギー消費が過剰である武装を廃止したことはリスクが高く、実戦では使われなかった。

④ 胸部側面にはスラスターユニットを増加装甲を装備。アーマーパーツによって増加した重量分を補うために装備された。



QUBELEY Mass-Production Model AMX-004G

量産型キュベレイ

Spec

頭高:18.4m 本体重量:35t 全備重量:62.1t
センサー有効半径:10,900m 武装:ハンドランチャー兼用ビーム・サーベル×2、
アクティブ・カノン×2、ファンネル×30

新たな時代を築く NT部隊の中核として

第2次ネオ・ジオン戦争において、ネオ・ジオンの中核を担う部隊の1つが、グレミー率いるNT部隊であった。これはフルシリーズをパイロットとした、その名の通りNTパイロットで構成された精鋭部隊であり、量よりも質に頼らざるを得なかったネオ・ジオン

し、部隊と見做す

その乗機として選出されたのは、同勢力の代表的なNT専用MSである

キュベレイである。キュベレイ自体は

汎用性の高い機体ではなかったものの、

ファンネル運用において、すでに大きな

実績があったことが量産化を後押ししたと考えられる。特に対連邦やエウ

2

3

1

10m

50m

量産化にあたっては、オリジナルの

キュベレイをベースとしつつも、機体

性能自体は低下しているが、前述のよ

うにファンネルの搭載数は大幅に追加

された。一方、オリジナルのキュベレイはファンネル以外の武装の脆弱性があ

ったが、アクティブカノンが装備さ

るなど、改善されている。

- 1 アクティブ・カノンは、オリジナルの搭載武器が廃止されたため、量産化に際してはそれを強化するため、背面に追加された新武装。通常は後方へ振りたたまれ、発射時に展開する。
- 2 オリジナルのキュベレイと同様、胴体にはビーム・サーベル兼用ハンドランチャーを装備。後方出してビーム・サーベルとして使用するほか、格闘時には射撃用武器としても使用可能。
- 3 ファンネル・コンテナはオリジナルのキュベレイに対して、10基→90基へとファンネル搭載量が増加している。そのため後述ユニットも、大改造されている。



ZAKU III CUSTOM

AMX-011S

ザクⅢ改

Spec

頭頂高 21.0m 本体重量 44t 全重量 71t ジェネレーター出力 2.800kW

スラスタ数 21, 500kg 装甲材質 ガンダリウム・コンボジット

武装 ビーム砲×2、ビーム・サーベル×2、30mmバルカン×2、専用ビーム・ライフル、ほか

ザクの進化は
NT専用機へと迫っていく

ザクはジオン公国の象徴であり、それはアクシズ、ネオ・ジオンの時代でも同様だった。特に連邦軍のRMS-106ハイザックの開発は、アクシズの技術者たちに不満を抱かせ、やがてその思いはAMX-011ザクⅢの開発へとつながっていく。

そもそも一年戦争のザクは兵器体系を根柢から打ち倒した絶対的な存在であり、優れた汎用性を持つ兵器であった。ザクⅢはあらゆる点において水準以上の機体だが、逆に特色は見えない面があった。次期主力機選定において、新技術満載のAMX-014ドーベン・ウルフは敗北した理由が、こうした点が影響したのかもしれない。

ザクⅢはベース機から装備や変更

よる拡張性が特徴の1つであり、ザクⅢ改のようなカスタム機への改修も可能であった。同機は強化人間のマシニュー・セロが搭乗し、スペース・ウルフ隊との不利な戦闘を強いられるが、マシニューの能力が機体と呼応して、一種のバリアを展開した。これはMSZ-006 Zガンダムなどが引き起こした現象に近く、同様のシステムを搭載していると考えられる。

Pilot Film

主なパイロット



マシニュー・セロ
数々の欠陥の責任を
重なるも、強化人間
として傑出。スペース
・ウルフ隊との戦
闘で社説を暴露した。



1 無敵ユニットは大型のブレークアタックを得意とし、通常のザクよりも印象が異なる。よりザクを思わせる近距離に接近する。

2 主眼はスバタイアマーとされているが、その下側に腕部を動かすことができるバインド・ボウリング砲を装備している。通常のザクⅢのアーチャーは機体向へ伸びているが、改は下方へ伸びる。

3 両足にあるコグビット、胸部はされていないが、コグビット周辺にサイロロイ、リイオ・センサ（約10）が搭載されている。通常のザクⅢのアーチャーは機体向へ伸びるが、改は下方へ伸びる。マシニューの暴走は影響がつかない。



GEYMALK

AMX-015

ゲーマルク

Spec

頭頂高 22.0m 本体重量 45t 全備重量 78.7t ジェネレーター出力 8,328kW
 スラスター推力 52,400kg 装甲材質: ガンダリウム・コンポジット 武装 ビーム・サーベル、
 2連装ビーム・ランチャー×2、ハイパー・メガ粒子砲、テルド・ファンネル×28、ほか

重火力に特化した
試作NT用MS

ネオ・ジオンの代表的な技術アドバンテージの1つとして挙げられるのがサイコミュ技術であり、特に第2次ネオ・ジオン戦争末期にはクイン・マンサをはじめ多彩なニュータイプ(N.T.)専用機が生みだされた。その中でも異質な存在が、サイコミュを、重火力の

運用というコンセプトとして具現化したAMX-015ゲーマルクである。

腕、脚など全身に10門以上のビーム砲を装備し、全方位に向けての攻撃が可能であるほか、背面には2基のマザー・ファンネルを搭載する。マザー・ファンネル内には28基の小型テルド・ファンネルを内蔵し、全身のメガ粒子砲と合わせて全方位攻撃を可能とした。一方でその重武装ゆえに、機動

性が犠牲となっている。

グレミーの内乱によって、NT部隊との戦闘を展開し、キャラ・スーンが強化人間として限界を超えた力を発揮したことで、AMX-004G量産型

キュベレイ部隊と相打ちとなった。だが、これは本来予定すべき運用とは言い難く、本来はファンネル砲台とも言うべき運用が想定されていたと考えるべきだろう。

Pilot Data

主なパイロット



キャラ・スーン

ネオ・ジオンの戦艦。当初はマッシュマーのお目付け役として派遣されたが、のちに強化人間となる。

①両腕の関節部分には、機内式のメガ粒子砲を装備している。また腰部にはビーム・サーベルを収納している。この機体のコンセプトにはとてつもない、ある程度の接近戦に耐えることも可能だ。

②両腕に装備された内蔵式の大口径メガ粒子砲。通常のメガ粒子砲を上回る威力を誇る。多くの武器を内蔵するゲーマルクだが、その搭載武器の中でも最も強力な兵器である。

③両腕に装備された2基のコンテナはファンネルの砲台である。内部にはテルド・ファンネルを28基搭載している。マザー・ファンネルを制御し、内部のテルド・ファンネルを解放する。





PILOT RILE

主なパイロット



ブル・ゾル

クローンであるブル・シリーズの1人。ブルよりも好戦的で、ニュータイプとしての能力も上回る。ブルとの戦いを経て、自らの意思でジュドーの元へ。



グレミー・ト

ネオ・ジオンの一将校だったが、やがて自身がジオンの正統後継者と名乗り、ハマーンに反旗を翻す。ラカン・ダカタンやニュータイプ部隊を率いる。

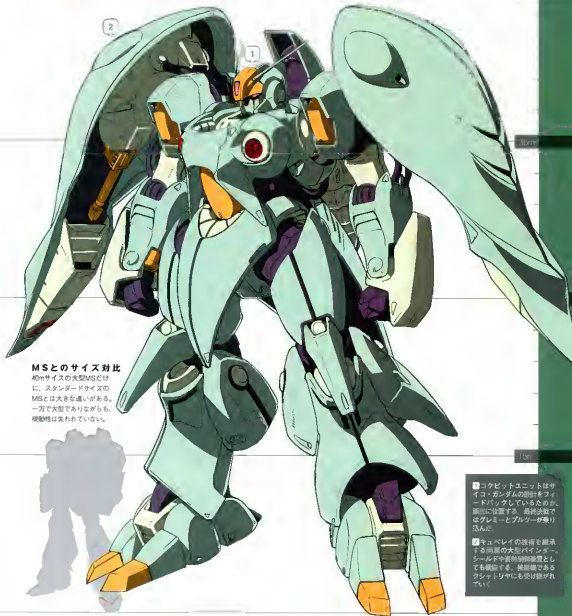
QUIN-MANTHA

NZ-000

クイン・マンサ

Spec

総高 39.2m 本体重量 143.2t 全機重量 254.7t ジェネレーター出力 21,370kW
スラスター総推力 287,100kg 装甲材質 ガンダリウム合金
武装 ビーム・サーベル、メカ粒子砲×9、巨大ファンネル×30、ほか



MSとのサイズ対比

40mサイズの大型MSだけに、スタンダードサイズのMSとは大きな違いがある。一方で大型でありながらも、機動性は失われていない。

①コクピットユニットはサイコ・ガンダムの設計をフィードバックしているため、頭部に位置する。最終決戦ではグレミーとブルゾルが乗り込んだ。

②キュベレイの技術を継承する同族の大型パイナダー。シールドや姿勢制御装置としても機能する。機動機であるクシャトリヤにも受け継がれていく。

武器・装備



拡散メガ粒子砲

胸部、背面、腕部に装備された大型メガ粒子砲。これもサイド・ガンダムシリーズからのフィードバックと考えられる。拡散・収束どちらでも発射が可能。船橋の接近を恐る意味でも、重要な武装となる。



ファンネル

機体後部ユニットをファンネル・コンテナとする構造はキュベレイから継承。だがファンネル発射数はキュベレイの約10倍(確認あり)から30倍へと増加。その制衡には、優れたニュータイプ能力が必要と考えられる。

PICK UP!



クイン・マンサが他の大型機と決定的に異なるのは、「キュベレイの高性能化」という明確なコンセプトを想像できる点だろう。それゆえ機体の要求を満たすために大型化を強いられる機体群とは、目指すべき方向性が異なっている。シルエットこそ異なるものの、ファンネル・コンテナ、胸部バインダー、腕部ビーム兵器といった構造は、キュベレイと基本的共通である。いわばクイン・マンサは究極のキュベレイというべき機体。その制衡的な本質は、単純でガンダム・チームを圧倒するほどの力を持っていた。



第一次オ・ジオン戦争期において、「純粋なMSとしてのスペックや機能」という点においては、クイン・マンサが最強の機体であることは間違いない。単機でもガンダムチームなどの複数のMS部隊に匹敵するがジンシャルをも、圧倒してしまいう性能は、MAがかった一年戦争で圧倒的な脅威であった時代を思わせる。エゥーゴのドック艦ラウバール・ローズを撃破で撃沈するなど、その極めてジンシャルを感じさせる、たゞ艦隊相手であったとしても、クイン・マンサは単機で覆り合ったのではないだろう。

COLUMN ニュータイプ部隊の真の姿とは？

そもそもクイン・マンサとニュータイプ部隊は、グレミーの反乱軍としてではなく、ネオ・ジオンにとって核となるはずの部隊だったと考えられる。戦力や人員に劣るネオ・ジオンにとって、それを補うのは圧倒的な質である。それゆえニュータイプ部隊は、連邦軍やエゥーゴにとって大いなる阻止力となるはずだった。だがグレミーの反乱によって、その目的は崩壊した。いやグレミーにとっても敵軍だったのは、ブルツの心変わりかもしれない。だが、当初は冷静に任務をこなしていたブルツだが、ダブルで自分と同じ家のエルビールを奪取したこと、そしてジュードとの接触によって、精神的に揺らいでしまふ。[利用されているだけだ。人形でいいのさ!]というジュードやブルツの思念の問いかけに激怒。

戦いを終えていくごとに年齢相応の感情を見せ始め、最終的にブルツはジュードのもとへ向かうのだった。



ネオ・ジオンの象徴
究極のNT用MS

クイン・マンサは、ハイマイン・カーン率いるネオ・ジオンを象徴すべき機体である。第二次ネオ・ジオン戦争期において、アクシズの持つ技術の粋を集めたニュータイプ(N)専用MSである。

ジオン系技術の流れの中において、一年戦争時代からサイコミュ・システムのダウンサイジング化は大きなテーマであった。その結果、グリプス戦役期には小型化を実現したAMX-004キュベレイが誕生した。だがキュベレイは、まだアクシズが

ようやく地球圏へ帰還した段階でのMSであって、サイコミュの小型化は実現したものの、サイコミュの小型化に収めた無理もあり、グリプス戦役期を代表するような突出した性能を得ることは難しかった。機体自体の高性能化とファンネルの運用……、その解決策として、再び大型化という方向性が模索され、その結果クイン・マンサにたどり着いたともいえるだろう。

特に大型機の設計面に関しては、ネオ・ジオン側はグリプス戦役期にMRX-000サイコ・ガンダムMk IIを導入しているものの、40メートル級の大型機動兵器という点では、ネオ・ジオン側に該当する機体はない。ゆえにサ

イコ・ガンダムMk IIの入手が、技術的にも大きな影響を与えたとしても不思議ではない。たとえば拡散メガ粒子砲などの、MRX-009サイコ・ガンダムからのフィードバックとも考えられる。こうした前提を踏まえ、キュベレイのハイスベック化ともいえるべきコンセプトは突き詰められた。機体後部にはファンネル30基を搭載するコンテナを備え、胸部にもキュベレイと同様のウイング・バインダーの装備など、その姿はキュベレイの先にある姿というべきもの。サイズこそ異なるが、キュベレイのコンセプトを突き詰めた結果が、クイン・マンサだろう。

こうした究極のNT専用機というべ

きハイスベックは、一方でパイロットへの負担を多大なものとした。ネオ・ジオンのパイロットの中でも、人為的に生み出されたクローンパイロット、ブル・シリーズのみが搭乗可能であった。実際にはブルツが搭乗したが、他のブル・シリーズも適性を示したかは定かではない。

運用面ではNT部隊の中核を成す機体と考えられ、ブル・シリーズ搭乗のAMX-004G量産型キュベレイとの連携が基本とされていた。だがグレミーの反乱による戦力の分散や、ブルツの精神の乱れによって、単独戦闘を強いられることとなり、本来想定していた運用は実現しなかった。

第二次ネオ・ジオン戦争期 以後のニュータイプ専用機

軍縮化によって

淘汰されて行く高性能機

U・C・0089に第一次ネオ・ジオン戦争が終結すると、地球圏を善き込む大規模紛争はいったん収束の方向へと向かった。こうした状況を受け、地球連邦軍内では急速に軍縮が進んでいくことになる。特にグリプス戦役、第一次ネオ・ジオン戦争は、一年戦争ほどの大規模戦争ではなかったものの、尋常ではない数の新兵器が投入された。それはグリプス戦役、第一次ネオ・ジオン戦争が発生したU・C・0087~0089は、連邦軍内部の開発拠点やニュータイプ（NT）研究施設、ジオンから接収した工廠の併合、民間企業アナハイム・エレクトロニクス社の台頭といったMS開発施設が乱立し、群雄割拠の時代であったことも理由のひとつだろう。

戦争の終結は、ハイスペックや先端技術を追いつめた時代の終焉を意味する。たった一機の試作機のために新技

術が投入されるという、まさにMSバトルという時代が終わりを告げたのだ。のちに「恐竜的進化」と呼ばれるMS群は、こうした過剰投資を標榜する言葉ともとれるが、一方でこの時代に培われた技術は長く宇宙世紀の兵器に使用されて行くことになる。

こうした状況は、NT専用機でも例外ではなかった。一年戦争におけるエースパイロットの活躍以後、MS開発はこうした一握りの優秀なパイロットのためのワンオフ機の開発をよしとしていた。だが、宇宙世紀0090年代初期の軍縮における波は、優れたスタンダード主力機の開発であり、用途に合わせてオプションや装備を変更するという方向性へ舵を切った。これは多機種が乱立した恐竜的進化時代の、いわば揺り戻しといえる。

奇跡すらも引き起こす サイコ・フレームのカ

高性能主力機の開発は、いわばMS全体としての性能水準を底上げすると

いう意図を含んでおり、この時代のサイコミュ・システムとしての有り様も変化を遂げることになる。たとえばビットやファンネルなどこの過剰操作武器系サイコミュ。一年戦争時代、エルメスはビットを中心とした戦いを展開し、パイロットはその制御に集中することが求められた。だがこの時代ではファンネルはあくまで戦闘を補助する存在であり、重要なのはパイロットの能力とMSのスペックだった。いつてしまえばファンネルは切り札にはなるが、絶対的な存在ではなかった。

最終的にU・C・0100年代初期になると過剰操作武器はファンネル、ミサイルとして、半ば誘導ミサイル化したことが、その一つの答えだったのかもしれない。

一方、飛躍的に進化を遂げたのが、機体制御系サイコミュだ。その代表的な技術がサイコ・フレームである。この技術はネオ・ジオン側によって意図的にリークされ、サザビーだけではなく、Vガンダムに採用されることにな

る。サイコミュ・システム自体はこれまでが解明されたシステムではなく、これまでも様々な「奇跡」を起こしてきた。その最たるものが、第一次ネオ・ジオン戦争における小惑星アクシズの落下を防いだ「アクシズ・ジョック」であり、サイコ・フレームの解析不能な力の一端を見せている。

その後、サイコ・フレームは、ユニコーンガンダムのムルバブル・フレームを構築するフル・サイコ・フレームへと発展。

ユニコーンガンダムのムルバブル・フレームは、二リ・ローザを「防ぐ」という人知を超えた力を発現させるなど、「アクシズ・ジョック」を思わせるサイコ・フレームの奇跡を再び呼び起こした。



第二次ネオ・ジオン戦争期に生まれたNT用技術

サイコ・フレーム

サイコミュ・チップを金属粒子レベルで誘込んだ構造部材。これまでサイコミュ・システムはそのダウンサイジング化と搭載箇所が問題となっていたが、構造部材としたことで、設計の自由度が大幅に向上した。用途としてはパイロット周辺のコグビットフレームにサイコ・フレームを配置することで、高速感度や制動レスポンスの向上などが図れるという。

サイコ・フレームには技術的に未知数部分が多く、第2次ネオ・ジオン戦争時には「アクシズ・ショック」を引き起こしている。またMSの根幹となるムーバブル・フレームをサイコ・フレームで構成するフル・サイコ・フレームのユニコーンガンダムも、同性質の現象を引き起こしていた。



MSN-03ヤクト・ドーガ
MSN-04サザビー
RX-93Vガンダム
NZ-666クシャトリヤ
MSN-06Sシナンジュ
RX-0ユニコーンガンダム
RX-0ユニコーンガンダム
2号機バシィ

ファンネル

エルメスの遠隔操作武器ビットを発展させたもの。グリアス改機では、MS 1機につき10〜30のファンネルを搭載することを実現していた。一年戦争終結のジオン軍やネオ・ジオンは常にパイロット不足の問題が付きまとい、一部のニュータイプや強化人間を使うことで、量より質という方式を取らざるを得なかったためだろう。

ビット自体はジェネレーターを搭載しているため、そのサイズは9m近くになる。ファンネルでは稼働率の低下や、搭載数の増加を見込んだためか、小型化の道をたどった。ジェネレーターを廃して充電式となったファンネルだが、前述のようにそれを補うメリットも多数存在したことだろう。

第2次ネオ・ジオン戦争期には、こうした状況に変化が起きている。まず搭載数はG基程度になり、ファンネル自体も大型化された。これはファンネル主体の攻撃から、ファンネルはMSの1兵隊であり、あくまで重要なのはMSの性能という考え方の変化が影響しており、サザビーとvガンダムという時代を代表するMSに、その特徴が表れている。



AMX-004キュレベィ
AMX-004-2/3キュレベィ Mk. II
AMX-004G量産型キュレベィ
NZ-000クィン・マンサ
NZ-666クシャトリヤ
MSN-03ヤクト・ドーガ
MSN-04サザビー
RX-93Vガンダム



サイコ・シャード

■ NZ-999ネオ・ジオング

ネオ・ジオングに搭載されたサイコミュ兵器であり、発動時には巨大な光のリングを形成し、サイコ・フィールドを形成する。サイコ・フィールドは、かつて「アクシズ・ショック」を引き起こした現象で、サイコ・シャードではこれに近い状態を生み出すことが可能といわれる。このフィールドは搭乗者のイメージを具現化する世界であり、「ラプラスの箱」を巡る戦闘では、戦いや武器を排除するという「袖付き」のフル・プロトタルのイメージによって、ユニコーンガンダムやバシィ・ノルンの武装類がすべて破壊されている。それでも機体自体で攻撃を行うユニコーンガンダムに対して、アーム・ユニットで対抗していることも、自身の兵隊すらも討じてしまった可能性が考えられる。





Pilot File

主なパイロット



アムロ・レイ

RX-78ガンダムのパイロットとして一年戦争を戦い、グリプス戦役時はティターンズに討詰するカラバに参加した。その後、連邦軍の外観部隊ロンド・ベル隊のMS隊隊長に就任した。シャアの反乱に際し自ら陸戦開発に携わったRX-93νガンダムを駆り、第二次ネオ・ジオン戦争を戦った。

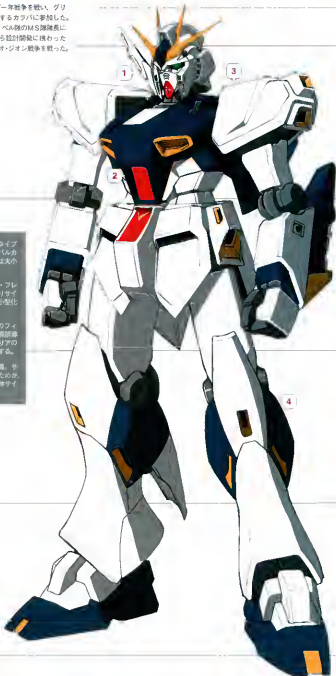
V GUNDAM

RX-93

νガンダム

Spec

頭頂高 22.0m 本体重量 27.9t 全備重量 63.0t ジェネレーター出力 2,500kW
スラスター総推力 97,800kg センサー有効半径 21,300m 装甲材質 ガンダリウム合金
武装、バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、ニュー・ハイパー・バズーカ、
フィン・ファンネル×6、ビーム・キャノン、ミサイル×4



① フェニクス部分は、ガンダムタイプから継承された意匠。頭部にはバルカン砲などを装備する。アンテナは大小2本を備える。

② コクピット周辺にはサイコ・フレームを採用している。これによりサイコミュの効率を向上し装置部の小型化が実現された。

③ 肩中にはサイコミュ兵器のフィン・ファンネルを装備可能。遠距離戦による砲撃以外に対ビーム・バリアのフィールドを範囲し機体を防御する。

④ 脚部にはスラスターを装備。サイコ・フレームを内蔵しているためか、当時の主力機と比べて全体の機体サイズは大型である。

武器・装備



ビーム・ライフル

νガンダム専用のビーム・ライフル。最大出力時は数センチの威力を発揮し、超長距離からの射撃も可能。また威力を弱めて連射性を上げるビーム・マシンガンのような使い方もできる。



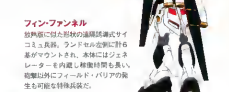
ビーム・サーベル

ランドセルの右側のサーベル・ラックに収納されるタイプは、グリップ後端部から小型ビーム刃が形成される。右腕部のホルダーには予備のビーム・サーベルが収納されている。



ニュー・ハイパーバズーカ

口径280mmの重砲。やはりνガンダムの専用装備であり、通常タイプに比べても格化が図られている。主に射撃や破壊力などが改善されている。またランドセルにマウントした状態でも射撃が可能だ。



フィン・ファンネル

放射状に似た形状の通風器連式サイコミュ兵器。ランドセル右側に計3基がマウントされ、本体にはジェネレーターを内蔵し稼働時間も長い。砲撃以外にフィールド・バリアの発生も可能な特殊武装だ。

COLUMN もう一つのνガンダム？

RX-93-ν2
Hi-νガンダム

Hi-νガンダムは『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』の小説版『ペルトーチカ・テルドレン』におけるνガンダムだ。ただ開発の経緯が少し異なり、本体に用いるサイコ・フレームは、ネオ・ジオンのニュータイプ専用MS、サイコ・ドーガを直して入手する。

とはいえ、この虚構劇、実はシャアによって仕組まれたもので、『逆襲シャア』で意図的にサイコ・フレームの情報をアムロ側にリークし、アムロが自分と同等のMSに乗り、取って決戦をつける(たい)。という流れと大筋は変わらない。



ニュータイプの設計による
ニュータイプ専用ガンダム

第二次ネオ・ジオン戦争こと、シャアの反乱において、地球連邦軍のロンド・ベル隊のフラッグシップ機となったのがRX-93 νガンダムだ。

製造はアナハイム・エレクトロニクス(AE)社が行い、3ヶ月という非常に短期間で完成に至った。これは以前から同社でガンダムタイプの新MSを構想し、研究開発が続けられていたことに加えて、搭乗者となるアムロ・レイが温めていた独自設計案を元に開発されたためともいわれる。当時はRGZ-91r・ガスイの配備にも難色を

示した軍部としては異例の判断である。本機の特徴は、機体制御デバイスに当時の最新技術であるサイコ・フレームを用いていること、サイコミュ兵器であるフィン・ファンネルを装備している点だろう。

サイコ・フレームとは、サイコミュ・チップを金属内に誘込む技術で、これをフレームの一部に利用することで、サイコミュデバイスの機器類の大幅な小型化に寄与している。本機の場合、このサイコ・フレームをコクピット周りに用いており、脳波コントロールの効率化が図られサイコミュ兵器、フィン・ファンネルの運用が実現可能となった。ただ、このサイコ・フレーム

の技術や情報などは、研究開発で先を行くネオ・ジオンからもたらされた。

また本機のフィン・ファンネルは、ネオ・ジオンのそれと比して特殊で独自の装備といえる。特筆すべきは、攻撃だけでなく防衛にも使用できることだろう。本体にジェネレーターを内蔵しているのも、こうした防衛面におけるフィールド・バリア発生のためと考えると合点がいく。

とはいえνガンダムは、サイコミュ兵器を除けば、機体構成は非常にオーソドックスにまとめられている。これは設計者であり搭乗者でもあるアムロ・レイ自身の経験則や開発理念の表れといえるだろう。

実際、シャア率いるネオ・ジオンとの衝突が避けられないロンド・ベルが臨戦体制を整える中、昼夜を問わず突貫作業で製造が進められたνガンダム。本来、兵器としての機械的な面や運用面を考慮すると急造品という観は否めない。しかしながら実戦においては、シャアの乗るサザビーを撃破し、果ては地球へ落下しようとする小惑星の軌道まで変えてしまった。後年「アクシズ・ショック」と呼ばれる現象を引き起こす、サイコ・フレーム搭載機の未来を迫り見せたともいえるが、こうした奇跡にも似た偉業を成し遂げるのができたのも、本機の基礎設計の優秀さを物語るのではないだろうか。

RX-93の バリエーション機の数々

RX-93 vガンダム ダブル・フィン・ファンネル装備型

Spec 頭頂高 22.0m 本体重量 27.9t ジェネレーター出力 2,500kW
スラスター総推力 97,600kg センサー有効半径 21,300m 装甲材質 ガンダリウム合金
武装 バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、ニュー・ハイパー・バズーカ、
フィン・ファンネル×12、ビーム・キャノン、ミサイル×4

vガンダムの強化機の一つとして考案された計画機。実際に投入されたvガンダムには、フィン・ファンネルが6基装備されるのみだったが、本家ではフィン・ファンネルを左右に分けて搭載し、最大12基を装備する予定だったという。

主な変更点は、バックパック右サイドのサーベルラックをフィン・ファンネル用のマウントに換装するもので、基本は左右3基ずつフィン・ファンネルを装備するプランだった。フィン・ファンネル同士の連携機能を利用す

れば最大12基のフィン・ファンネルが装備可能であった。しかし、フィン・ファンネルの生産などが間に合わず、このプランは実現することがなかった。

もし計画通りに量産投入されていたら、攻防一体兵器といえるフィン・ファンネルの威力も相まって想像を越えた活躍が期待されたことだろう。しかし、サイコミュ兵器自体、搭乗者への負担を強いるため、12基ものフィン・ファンネルを自在にコントロールできたかは未知数の部分も多い。



FA-93HWS vガンダム ヘビー・ウェポン・システム装備型

Spec 頭頂高 22.0m 本体重量 32.6t ジェネレーター出力 2,800kW
スラスター総推力 97,600kg センサー有効半径 21,300m 装甲材質 ガンダリウム合金
武装 ビーム・ライフル、ビーム・サーベル、カスタム・ビーム・サーベル、フィン・ファンネル×6、ニュー・ハイパー・バズーカ、ミサイル・ランチャー、ハイ・メガ・シールド、ハイパー・メガ・ライフル、バルカン砲×2

vガンダムの強化機の一つ。兵器を内蔵した増加装甲を本体に装着するプランで、防御力の向上と火力増強に主眼を置いた案といえるだろう。

本機の構成を見れば、一年戦争時に企画されたフルアーマー (FSWS) 計画や、それ以後も開発計画が立てられたMSのフルアーマー化に則った、連邦軍の伝統と呼べるようなオーソドックスなプランニングだったことが窺える。

ただし、増加装甲の重量増加による機動性

の低下が懸念のため、装甲各部にはスラスターが設けられ、胸部装甲にはフィールド・ジェネレーターも内蔵されるなど、時代の進歩に合わせた最適化が図られている。

またシールドにも、メガ粒子砲を備えたハイ・メガ・シールドを兼ねるなど独自性のある装備も目立つ。

こうした強化機も第二次ネオ・ジオン戦争の長期化を脱出することで、実際には予想以上の早期終結により、本家は日の目を見ることなく終わった。



RX-94 量産型vガンダム

Spec 頭頂高 21.2m 本体重量 25.0t
全機重量 64.0t (フィン・ファンネル装備時推定) 58.0t (インコムバノク装備時推定)
ジェネレーター出力 2,500kW スラスター推力 87,000kg センサー有効半径 19,400m
装甲材質 ガンダリウム合金 武装 ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ビーム・スプレーガン、インコムユニット (オプションバノク)、フィン・ファンネル (オプションバノク)、ハイパー・バズーカ、ビーム・キャノン、ミサイル×4

地球連邦軍の主力MSであるジェガンに代わる次期主力機として考案されたvガンダムの量産タイプ。基本的な武装類はオリジナルを踏襲しつつ、搭載サイコミュ兵器はオプション装備とし、フィン・ファンネルとインコムユニットの用意されていた。これは搭乗者のニュータイプ能力に適応対応するための措置といえるだろう。

もともとvガンダムは、ジェガンをベースに個人専用にかスタマイズされた機体とも言われる。

そうした専用機を量産化に向けて再設計するというのは、兵器の開発プロセスを鑑みると、やや本末転倒ともいえるが、それだけ現場がガンダムタイプのような強力な機体の配備を望んでいた、ということの表れではないだろうか。

結果的に連邦軍上層部はこの計画に賛成を示し、コスト面でも折り合いがつかず、第二次ネオ・ジオン戦争の早期終結の影響も受け、開発計画は白紙となった。





GUNDAM DELTA KAI

MSN-001X

ガンダムデルタカイ

Spec

全高 19.9m 全幅重量 28t 全備重量 63.4t ジェネレーター出力 3,500kW
スラスター数 60 (1,500kg) センサー有効半径 15,200m 装甲材質 超合金ウム合金
武装 60mmバズーカ砲×2、ビームサーベル、ロング・メガ・バスター、プロト・フィンファンネル、他

新型サイコミュ、ナイトロを搭載 デルタプラスの派生機

MSN-001Xガンダムデルタカイは、特殊装備の技術検証用に開発された試作可変MSだ。地球連邦軍の量産試作MSである、MSN-001A1デルタプラスの運用データを基に開発された。

ウェーブ・ライダーへの変形が可能

で、ロング・メガ・バスターやハイ・メガ・キャノンをはじめ、多くの火器類が装備されている。一掃過剰とも思える兵装も実験機という機体の性格をよく表している。

また、本機最大の特徴は、新型サイコミュ装置の「ナイトロ」の搭載だ。これは従来のサイコミュ・デバイスが担う機体制御や火器管制のほか、ニュータイプ能力を持たない搭乗者でもサ

イコミュ兵器（本機の場合は、プロト・フィン・ファンネル）の運用を可能にするという、驚くべき機能が付加されているシステムだ。

しかし、こうしたニュータイプ能力の再現を一般機で試みるシステムの類は、概ね搭乗者に多大な負担を強いる傾向がある。確かに宇宙世紀0094年における本機の試験運用では、目覚ましい成果を上げたといえられている

が、後世で実用化されていないところをみると、それなりに問題点があったのだった。

- ② 両腕はガンダムタイプを模範、ツインアイ式のセンサーを採用し、両側面には60mmバズーカ砲が設置されている。
- ③ ウェーブ・ライダー形態への変形機構を搭載。機体制御や火器管制には新型サイコミュ装置のナイトロを備えている。
- ④ シールドはウェーブ・ライダーに採用されたウェーブ・メガ・キャノンなどが装備可能。またガンダムよりも高出力だが連射が可能。
- ① プロト・フィン・ファンネルは、ガンダムに装備されていたフィン・ファンネルの試作型。ビーム砲に特化した制御機能はない。





Pilot File

主なパイロット



バナー・リンクス

インダストリアル7のアナハイム・エレクトロニクス工業専門学校に在りし少年。偶然から「機付き」と通称される「ラブラスの箱」をめぐる争いに巻き込まれ、その最中、父親の父（ピスト）討伐に出る。カーディアス（ピスト）からユニコーンガンダムを託されパイロットとなった。

FULL ARMOR UNICORN GUNDAM
RX-0フルアーマー・
ユニコーンガンダム

[デストロイモード]

Spec

全高 19.70m (デストロイモード時 21.7m)

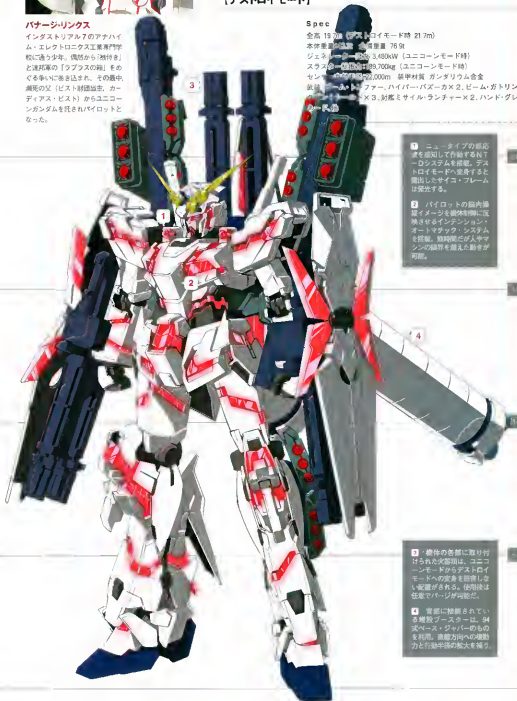
本体重量 約 76.9t

ジェネレーター 約 3,480kW (ユニコーンモード時)

スラスター 約 28,700kg (ユニコーンモード時)

センサー 約 22,000m 装甲材質 ガンダリウム合金

武装 バズーカ×2、ビーム・ガトリング×3、射撃ミサイル・ランチャー×2、ハンド・グレネード



① ニュータイプの感知能力を感知して作動するNT-ドシステムを搭載。デストロイモードへ変身すると露出したサイコ・フレームは発光する。

② パイロットの脳内映像イメージを視覚情報に反映させるインテンション・オートマチック・システムを搭載。脳内映像が人やマシンとの境界を越えた動きが可能。

③ 機体の各節に取り付けられた火薬筒は、ユニコーンモードからデストロイモードへの変身を際際しない位置がされる。使用後は任意でバナーが可動。

④ 背部に搭載されている複合ブースターは、94式ベース・ジャバーのものを活用。推進力向への運動力と行動半径の拡大を補う。

武器・装備



ビーム・ガトリングガン
銃身を4本重ねた2連装のビーム兵器は、シールド裏にマウントされ、シールドファンネルに攻撃力をもたせる。本家はクシャトリヤ用に開発されたネオ・ジオン製。

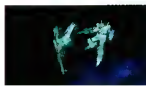
対艦ミサイル

肩関節サイドに装備したハイパー・バズーカの側面には、スタークジェガン用の3連装の対艦ミサイル用ボイドとハンド・グレネードなどが装備されている。



シールド・ファンネル

ユニコーンガンダム専用装備。シールドに内蔵されたサイコ・フレームの力によってファンネルのように機能するとされるが、その原理などについては不明な点も多い。



最終決戦に向けて
過剰なまでに武装を満載

RX-0フルアーマー・ユニコーンガンダムは、ユニコーンガンダムの武装強化仕様である。「ラプラスの箱」をめぐって激化する戦闘を想定し、各部にMS用の火器類などを装備し、火力の増強を図っている。また、広く知られている連邦軍系のフルアーマー機と異なり、増加装甲の類を装備していないのも特徴の一つである。とは言ってもの最新鋭において、新規に「一から設計や開発を行う余裕や資材もなく、ネエール・アーガマに備蓄されていたMS用の武装を流用し、艦内格納庫で完成

させた剰余の策ともいえる。

それでも本機最大の特徴「デストロイモード」への変身を阻害することなく、これら本機の発着番であり、パナジー・リンクスの友人でもあるタウヤ・イレイトと、彼の案を実現すべく各部調整に臨んだアナハイム・エレクトロニクス社の技師、アーハイム・テルジェフの努力の成果といえるだろう。

追加武装は多岐にわたり、背部にハイパー・バズーカを2門、そのハイパー・バズーカ砲身の側面には3連装対艦ミサイルとハンド・グレネードがそれぞれ付けられ、両腕と背中装着した計3枚のシールドには、ビーム・ガ

Original

オリジナル

RX-0
ユニコーンガンダム

Spec

全高 19.7m (デストロイモード 21.2m)
本体重量 23t
シールド・ファンネル出力 3,480kW (ユニコーンモード時)
3連装・超強力 142,800kW (ユニコーンモード時)
センサー 有効半径 22,000m
装甲材質 ガンダリウム合金
武装 バルカン砲×2、ビーム・サーベル×4、ビーム・マグナム、ハイパー・バズーカ、ビーム・ガトリングガン



【デストロイモード】

アナハイム・エレクトロニクス社とビスト財団が協力し、「JUC計画」で極秘開発した実験機。機体のムーバブル・フレームを全てサイコ・フレームに置換したフル・サイコ・フレーム機。最新の思考制御システム (インテンション・オートマチック・システム) により真実的な機体制御が可能だが、操縦するにはニュータイプ能力が必要だ。対ニュータイプ用削減システムのNT-Dを搭載し、敵性ニュータイプと遭遇するとユニコーンモードからデストロイモードへ変身する。

【ユニコーンモード】

トリングガンダムをマウントしている。これによりシールド・ファンネルは攻防一体の装備になった。まさに動く武器庫と評して差し支えあるまい。こうした火器類搭載による重量増で衰える機動性を補うために、サブ・フライト・システムの94式ベース・ジャバーの大型ブースター・ユニットを背部に装備する。いずれの装備類も役目を終えた時点 (弾切れや被弾など) で、任意にパナジーでできるので戦闘行動に支障が出ない配慮もされている。

La+が示す最終座標メガラニカにおける最終決戦では、追撃してきたリディ・アーセナスのRX-0「N」ユニコーンガンダム2号機バンシィ・ノールンと戦い、ネエール・アーガマを強襲した「袖付き」のMS部隊 (AMX-101Eシユツム・ガルス&AMX-110E2スサ、AMX-100Bガ・ソウム) や、アンジェロ・ザウバーのAMX-1132ローゼン・ズールと戦闘を繰り広げている。その戦闘の際、パナジーは背中のブースターを質量弾として敵にぶつけてみせるなど、トリッキードが確実な戦況を披露した。

最終的には戦うことに装備が外され、フル・フロントタルが操るNZ-999ネオ・ジオングと対峙する時に、素のユニコーンガンダムになってしまいが、それも自らの活路を切り拓くため戦い抜いた証といえるだろう。

Spec

全高 19.7m (デストロイモード時 21.7m)
 本体重量 27.2t 全備重量 48.8t
 ジェネレーター出力 4,520kW (ユニコーンモード時)
 スラスター総推力 185,383kg (ユニコーンモード時)
 センサー有効半径 28,600m 装甲材質 ガンダリウム合金
 武装 バルカン砲×2、ビーム・トンファー、ビーム・マウナム、リボルビング・ランチャー、アームド・アーマー-DE、他

UNICORN GUNDOAM02 BANSHEE NORN

RX-0[N]

ユニコーンガンダム2号機 バンシィ・ノルン

Pilot File

主なパイロット



リディ・マーセナス

ロンド・ベル隊のMSパイロット。オードリー（ミネバ）との別れの一件でバナージに対し強い憎悪を抱くようになる。そして自らバンシィ・ノルンのパイロットとなってニュー・アーガマ（＝バナージ）を追撃する。地球連邦政府の有力政治家一族マーセナス家の嫡子。

① 背中にはアームド・アーマー-XCを装備する。サイコミュ協応式の遠距離強化ユニットといえ、機体のブレードアンテナと連動し、変身時には展開する。

② 肩関節スラスターを内蔵するアームド・アーマー-DEは、格闘時は背中にマウントして、ブースターとして利用可能だ。先端部分にはメガ・キャノンが備える。

③ ユニコーンガンダムと同様にフル・サイコ・フレーム機であるバンシィ・ノルンは、デストロイモードに変身すると、露出したサイコ・フレームが金色に発光する。

④ 格闘者がニュータイプ能力を持たない一機であるリディに代わったため、それ以上に格闘の訓練が行われている。調査はAGE社が担当している。



武器・装備



ビーム・マグナム

ユニコーンガンダムと同型の連射式ビーム兵器。一定でビーム・ライフル4倍ともいわれる高威力を誇る。一射撃ごとにEカートリッジを交換する必要がある。

リボルビング・ランチャー

ビーム・マグナムの機身下部に搭載される特殊装備。回転式機軸コンテナにより、ビーム・ジュリチや、閃光式電撃弾と様々な武装を状況に応じて使用できる。



アームド・アーマーDE

シールドとしてはもちろん、武器やブラスターとしても使用可能な特殊装備。サイコ・フレームを内蔵しテストロイモードへ変身すると活動して、各部装甲が展開する。



アームド・アーマーXC

感応度を増幅して送受信することが可能なサイコミュデバイス。ニュータイプ能力の低い搭乗者でもニュータイプ専用機のような動きが可能となる。



特殊装備を追加搭載した
ユニコーンガンダムの兄弟機

RX-0 [N] ユニコーンガンダム2号機バンシィ・ノルンは、RX-0バンシィの仕様変更型である。バンシィは対ニュータイプ戦を主眼としたユニコーンガンダムタイプだが、機軸にはニュータイプ能力者強化人間の搭乗を前提としていた。

そして「ラプラスの箱」をめぐる争いの最中、バンシィは搭乗者であるマリィ・ダクルスを失い、新たにリディ・マーセナスを迎えることとなった。だが、前任者と違いリディは、一般のパイロット、つまり非ニュータイプであ

ったため、それに合わせた調整と改造がバンシィにも施されることになる。本体の外観そのものは同じだが、装備するサイコミュ兵装は一新され、制御系や操縦系統などを一般の人間でも扱えるように改修が行われている。

こうした経緯で誕生したのが本機であり、型式番号もRX-0 [N]に改められている。機体に装備される新型のサイコミュ兵装の一つ、アームド・アーマーDEは、機動性と防御面の向上を担い、先端部にはメガ・キャノンといった武装も備え、ブラスターとしても使用可能である。

もう一つのサイコミュ兵装であるアームド・アーマーXCは、背中

に備えられた感応度を増幅して送受信する機能拡張装置で、この新装備の搭載によりニュータイプ能力を持たない(もしくは低い)リディでも、バンシィ・ノルンの性能をフルに引き出すことが可能となった。またこちらのサイコミュ兵装にもサイコ・フレームが内蔵されている。

これに加えて高威力だが機軸能力を考えると難のあるビーム・マグナムには、リボルビング・ランチャーが追加装備として装備されている。これは一種の武装カートリッジで、回転式コンテナの中には4種類の異なる武装をセットできるようになっている。こうして実戦投入された本機だが、

通常形態のユニコーンモードでもMS模範を相手に難なく戦い(惜しむらくは対峙した相手の多くは同僚の連邦軍の機体という点だろう)、テストロイモードへの変身も可能だった。

これは画期的であると同時に、一部の特別な能力者しか扱えなかったニュータイプ専用機が、一般レベルまで降りてきたという点に他ならず、加えてニュータイプ専用機をはじめとしたサイコミュ兵器全般の凋落の兆しといった。やがて宇宙世紀の未来には形骸化してしまふニュータイプ。そう考えればバンシィ・ノルンはニュータイプ専用機が行く末を体現していた機体といえるのかもしれない。

オリジナル

RX-0
ユニコーンガンダム2号機 バンシィ

Spec 全高 19.7m (テストロイモード 21.7m)
全重量 24t 全機重量 46.7t
ジェネレーター出力 3,480kW (ユニコーンモード時)
スラスター総出力 142,500kg (ユニコーンモード時)
センサー有効半径 22,000m 機軸収容 ガンダリウム合金
武装 バルカン砲×2、ビーム・サーベル、ビーム・トングフォー、アームド・アーマーDE、アームド・アーマーVN

主なパイロット



マリィ・ダクルス



【ユニコーンモード】 【デストロイモード】

ユニコーンガンダムと同時期に開発された兄弟機、1号機同様にNモードは搭載するが、ラプラス・プログラムは未搭載。また搭乗パイロットは、ニュータイプ能力を有した者(強化人間)を想定している点も共通である。基本性能などは同等だが、地球上での運用試験や実戦訓練が行われているため、最終としての完成度はユニコーンガンダムを上回る。特殊となった強化人間マリィ・ダクルスを調整(泡盛)し搭乗者とした。



PILOT FILE

主なパイロット



シャア・アズナブル

新生ネオ・ジオン総帥。グリプス戦役では偽名を使いエーゴの一員として戦った。地球に拘束する人類を真正し金人類を宇宙移民とするべく地球圏活性化作戦を執行した。また同時に宿敵であるアムロとの決戦を挑むためザザビーに乗り出撃する。

S A Z A B I

MSN-04

サザビー

Spec

頭頂高 23m 本体重量 30.5t 全備重量 71.2t ジェネレーター出力 13,960kW
スラスター総推力 133,000kg センサー有効半径 22,600m 装甲材質 ガンダリウム合金
武装 ビーム・トマホーク、ビーム・ショット・ライフル、ファンネル×6、ミサイル×3、拡張メガ粒子砲、他

1 カつての華厳、リンク・ディファスと似しく頭部にコクピットが設けられ、暴走時の制動カプセルも備わっている。コクピット周辺にはサイコ・フレームが構造材として用いられ、半固定モノアイレールが配置される。

2 高い Intelligence の証を待つシャアに相応しく、彼のパーソナルカラーである赤系で全身が塗装されている。腹のフロントアーマーの「CROSS」は、本名キャメバール・レム・ダイクンのイニシャルをのしらせたマーキング。

3 両手首内側にはビーム・サーベルを1本ずつ収納している。このビーム・サーベルは、斬撃する時だけビーム刃が形成される。アイドリリング機構を搭載したタイプで稼働時間も長い。近接戦闘時のサブウェポンだ。

4 背中の中核ユニットと腹のリアアーマー 両部にはメイン推進用のスラスターを備え、両肩や両腕などの関節部分には補助用推進のスラスターが設置される。これにより優れた機動性と、高い運動性を発揮する。





ビーム・ショット・ライフル

サザビーの主兵器。上下に銃口を持ちそれぞれ収束、拡散ビームを選択しての射撃が可能である。拡散モード時には連射が可能で、敵艦船のように広範囲を攻撃できる。



ビーム・トマホーク

近接戦闘用武器でシールドの裏にマウントされている。左右に分かれたビーム発射口のどちらでもビーム刃の形成ができ、両側にビームを発射させて長いビーム刃も形成可能。



ファンネル
ファンネル・コンテナ

真面左右にファンネル・コンテナを装備。それぞれ3基、計6基のファンネルを搭載。コンテナは弾道したファンネル4にエネルギーと推進剤を供給する機能を持つ。



艦船メガ粒子砲

腹部中央にレライアウトされ、本体ジェネレーターからエネルギーが直接供給される。極めて大きな威力を持ち、一撃で複数の艦船に対しての攻撃が可能だ。

COLUMN 小説版にのみ登場する赤い彗星専用機

MS-04 II ナイチンゲール

Spec

全高:27.8m 本体重量:22.5t 全機重量:105.7t
ジェネレーター出力:14,700kW センサー有効半径:23.0km
武装:ビーム・トマホーク、艦船メガ粒子砲、ファンネル×10、ミサイル×3、大型メガ・メガ・ビーム・ライフル



小説「逆襲のシャア ベルトーチカ・チルドレン」でのシャア専用機。名前こそ違いますがその位置付けは「逆シャア」におけるサザビーである。ただ、サザビーと比べ全体的にリユームが増し、搭載ファンネルも10基。背中両サイドから張り出したファンネル・コンテナの異様な形状はホスらしい風格が漂う。当然、カラーリングは赤となっている。

アムロとの完全決着を睨んだ 技術の粋を結集した総帥専用機

ネオ・ジオン総帥、シャア・アズナブルの専用機。シャアが乗るのに相応しい機体となるよう開発された。

アナハイム・エレクトロニクス(AE)社のグラナダ工場が中心となって開発が進められ、設計には旧ネオ・ジオンの技術者が多数参加している。ちなみにライバル機、連邦軍のRX-93 ヴガンダムの開発もAE社の月工場で行われているが、こちらはフォン・フラウエンの工場が開発製造がされた。同じ会社でも工場同士の交流はほとんどなく、厳しく制限されていたという。

当初、シャアの乗機として考えられていたMSN-03ヤクト・ドーガだが、その性能に対し彼が不満を示したため、本機が開発されることになったという(クエス・パラヤに与えられたヤクト・ドーガの機体カラーが赤染されたのはそのためとする説もある)。

開発におけるコンセプトはシンプルで「現時点で最高スペックのMSであること」だった。サイコミュ兵器であるファンネルの搭載はもちろん、運動性や機動性、攻撃力、あらゆる点で最高を目指すのが至上命題といえた。もちろん、そこにはシャア自身のMS操縦テクニックが加味、考慮されているのは言うまでもないだろう。

こうして完成した本機を見てみると、同年代の機体と比べて約25メートルという大型の機体サイズにしても、要求性能を満たすための結果と考えられる。しかも当時最新のサイコミュ・フレームといったサイコミュ関連技術を入れていることだから、遊説的にいえば「よくこのサイズで収まった」であろう。また武装面に関しては、ミサイルなどの実体弾よりもビーム兵器偏重に見える構成だが、ファンネルとの連携攻撃や対MS戦に重きを置いているならば納得できる内容だ。

かくして実際の戦いにおける本機はというと、まさかシャアも最後に対峙する相手が、従来あるような対MS戦

ではなく、本当の意味での格闘戦を仕掛けてくるとは思わなかっただろう。しかも機体の突然のパワーダウン(サイコミュ・フレームの共振の影響か?)に見舞われ、小惑星アークシズ上で大破、惨敗を喫した。

しかしこの戦いにおける原因は、シャア自身のプライドに依るところが大きいだろう。(アムロに対して)終生のライバルならば、同等の力・性能を持ったMSで決着をつけるべきで、サイコミュ・フレームの情報を敵陣営にわざわざリークしたのだから……。

歴史に「たら、れば」は禁物だが、もし、これがなければ結果は変わっていたかもしれない。

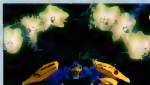
MSN-03 ヤクト・ドーガ

Spec 頭頂高 21.0m 本体重量 25.0t ジェネレーター出力 3,304kW
スラスター推力 82,000kg 装甲材質 ガンダリウム合金
武装 ビーム・サーベル、ビーム・アサルトライフル、ファンネル×6、ほか

ネオ・ジオンのニュータイプ専用機。同組織の主力機であるAMS-119ギラ・ドーガをベースにアナハイム・エレクトロニクス社が開発した。本体のムーバブル・フレームの一部にはサイコ・フレームが用いられている。

このサイコ・フレームの登場により、機体サイズが大きくなりながらもニュータイプ専用機のサイズは、通常MSと同じ程度の20mクラスに収めることができるようになり、後のMS開発に多大な影響を与えている。

装備するサイコミュ兵器のファンネルは、左右のラックに3基ずつの計6基を装備する。搭乗者のギニュー・ガスは強化人間として調整されていた。戦野においては、RX-93νガンダムに撃墜されている。



MSN-03 ヤクト・ドーガ クェス・エア（バラヤ）機

MSN-03ヤクト・ドーガのバリエーション機。頭部アンテナの有無、機体カラーリングが違いますが、基本的性能には違いはない。また携行する武装は、ビーム・ガトリングガンとなっている。

シャアに同行してきたクェス・エア（バラヤ）が搭乗し、ニュータイプ能力のテストを受けた後、ルナウィーの奇襲作戦に参加。搭乗者の資質の高さもあり高い能力を発揮したものの、作戦中に故障、右腕部を損傷、中破した。これはろくに戦闘経験も受けていない常人同然の惨状だから、当然の結果だろう。

結局、彼女はNZ-333 α・アジールに乗り換えたものの機体は放棄された。そして第二次ネオ・ジオン戦争終了後、「袖付き」によって改修され、戦線へと投入されている。



MSN-03 ヤクト・ドーガ「袖付き」仕様

ネオ・ジオン残党「袖付き」で運用されたMSN-03ヤクト・ドーガの改修機。第二次ネオ・ジオン戦争後、放棄されていたヤクト・ドーガ（クェス機）を修理し、機体色も赤からカーキへ変更された。「袖付き」部隊の所属を示すエンブレヴィング風装飾が機体胸部と腕部に施される。

とはいえ、完全に改修されたわけではなく、右腕部やランドセルは同系統のギラ・ドーガを用い、ファンネルは2基のみ。武装もギラ・ドーガのビーム・マシンガンを装備する。



ネオ・ジオン系のニュータイプ専用機

第二次ネオ・ジオン戦争を起こした新生ネオ・ジオンでも、多くのニュータイプ専用機が開発され、実際の戦場にも投入されている。ここではそんな時代に登場したニュータイプ専用機の数々を紹介していこう。

α Aziepu NZ-333 α・アジール

Spec 全高 108.26m 頭頂高 58.4m (本体) 本体重量 120t ジェネレーター出力 19,830kW
スラスター総推力 2,217,500kg 装甲材質 ガンダリウム合金
武装 2連装バルカン砲、メガ粒子砲、有線サイコミュ式メガ・アーム砲×2、大型ファンネル×9

巨大なニュータイプ専用MA。攻撃力、機動力、そして機体サイズ、どれも破格で、ジオン系MAの頂点ともいえる機体となった。搭載されるファンネルは計9基で、それぞれにジェネレーターを内蔵。5連装のメガ粒子砲を備えた有線サイコミュ式メガ・アーム砲や口部分のメガ粒子砲など火力も高い。両肩部のアーマー内にはサブ・アームを装備する。また胴部のように見えるシュツルム・ブラスターはスラスターを内蔵した一種のプロペラントタンクで、目的別に離した時点で本体から切り離される仕組みだ。

ウェス・バラヤが搭乘し、戦艦へと投入されたが戦闘そのものには、ほとんど参与することなく大破してしまった。



GEARA DOGA PSYCOMU TEST TYPE AMS-120X ギラ・ドーガ サイコミュ試験タイプ

シャア専用機（後のザビー）開発の過程で試作されたMS。

AMS-119ギラ・ドーガをベースに開発され、試験運用が行われた。サイコミュ兵器のファンネルを搭載し本体の火力増強などが図られたが、テストの段階で機体性の低下を指摘されたため、制式採用は見送られている。

この開発データをもとにMSN-03ヤクト・ドーガが開発される。



PSYCHO DOGA NZ-222 サイコ・ドーガ

型式番号からわかるようにNZ-333 α・アジールの前身にあたるニュータイプ専用機。

MSN-03ヤクト・ドーガと平行して開発が進められ、両胴部に有線サイコミュ式ビーム砲を装備するなど、機体構成はα・アジールに通じる。

小畑の「逆襲のシャア」ベルトーチカ・チルドレン」にも同名の機体が登場するが、完全に別機体である。



REBAWOO AMX-107R リバウ

AMX-107バウをベースに、サイコ・フレームを採用した試作MS。

合体可変機構は残し、上半身（リバウ・アタッカー）のクックビット回りと下半身（リバウ・ナビター）の一部にサイコ・フレームが用いられる。

機体の開発改修は「悔付き」が行った。フル・フロントル専用機として開発されたが、MSN-06Sシナンジュ実用化後は別のパイロットが搭乘。



BAGI DOGA MSN-X4 バギ・ドーガ

ネオ・ジオンの開発したニュータイプ専用試作MS。MSN-03ヤクト・ドーガの開発過程で生まれた機体らしく、モビル・ビット（別名ビー・ビット）やスプガン・ビットと呼ばれるサイコミュ兵器を装備する。中でもビー・ビットは対人用の爆撃工作に用いられ、形状も昆虫のバッタに似ている。

コミック作品「ダブルフェイク アンダーザ・ガンダム」に登場した。



Pilot Pilot

主なパイロット



マリマ・ダウルス

ジオン残党軍「袖付き」のパイロット。一輪道邦軍の捕虜となり調整されてユニコンガンダム2号機バンシイのパイロットとなっていた。第一次ネオ・ジオン戦争時、ネオ・ジオンのニュータイプ部隊に属していた強化人間。

K SHATRYA REPAIRED
NZ-666

クシャトリア・リペアード

Spec

全高 22.3m 本体重量 27.8t 全備重量 74.02t

武装 ビーム・サーベル、ハイパー・ビーム・ジャベリン、ビーム・ガトリングガン、マシン・キャノン、改造ファンネル、メガ粒子砲、他



1 クシャトリア・ベロルンタでは同色出したモノアイのカバーが付いた。モノアイの修復にはジェガンなどの連列車の機体用の部品が用いられた。

2 胸部コクピットもカバーが敷設される。ただしこちらもオリジナルからは形状が異なる。使えなくなったメガ粒子砲にはカバーが取り付けられている。

3 背中のシュルム・ブースターはMO本体よりもはるかに大きい。ブースター自体は肩部分インダーのアームに接続されている。

4 壊された2基のインダー一基のファンネル収容部は、改造ファンネル用にコンテナ内を改修したため、蓋が取り付けられ蓋がれた状態である。

武器・装備

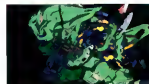


改造ファンネル

小型シトルム・ファンネルの弾頭部分をファンネルに適合した誘導兵器(別名、ファンネル・ミサイル)。バスターの裏側のコンテナも専用装置で改造されている。

メガ粒子砲

胸部に4門備えられていたメガ粒子砲は2門となり、2基のバスター部のメガ粒子砲と合わせて計6門。数は減ったが威力は維持されている。



ビーム・ガトリングガン

クシャトリヤ・ベッセルングから引き継ぎ本機の仮設フレームに装備されているビーム兵器。もともとビーム・ガトリングガンはクシャトリヤの専用装備だ。

ハイパービーム・ジャベリン

左腕前腕部に装備されている格闘戦用の武器。もともとユニコーンガンダム用のオプション兵器だったものを加工して取り付けている。



激戦を戦い抜いてきたクシャトリヤ最後の姿

クシャトリヤ、リベアードはクシャトリヤの改修機である。しかし、型式番号などは変更されていない。

バスター戦でのRX-0ユニコーンガンダムとの戦闘で大破したクシャトリヤは、ロンド、ベルのネル、アーガマへ収容される。その後、同艦が「袖付き」との関係になった際「袖付き」のクルーが一方的にクシャトリヤの補修を行った。それがクシャトリヤ・ベッセルングと呼ばれる機体だ。

ただ補修といっても十分な措置ではなく、欠損部分はフレームのままか仮

設で済ませ、使用できない装備にはカバーを設ける程度。組織自体の運営や補給がままならない状況から、予備パーツなど用意されているはずがなかった。そして「袖付き」の内部分裂を経た後、ネル・アーガマのクルーがクシャトリヤの修繕に加わり本機の完成となる。名前もベッセルングからリベアードに改められた。搭乗者は引き続きマリダー・クルスが務めている。

特徴的なバスターも数は減ったが元の姿に戻り、剥き出しの頭部や胸部にはカバーが新設され、左腕には白兵戦用武器(ハイパー・ビーム・ジャベリン)が加わり、機動力低下を補うため背中にはAMS-129ギラ・ズー

ORIGINAL

オリジナル

KSHATRYA NZ-8668
クシャトリヤ



Spec

全高 22.3m
本体質量 25t
全機質量 27.5t
ジュレーム 出力
16,240kw
スラスタ 出力
181,600kg
装甲材質 ガンダリウム合金
武装 ビーム・サーベル
×2、ファンネル×4
、腕部メガ粒子砲×4、バスター部メガ粒子砲×4、他

「袖付き」で運用されるニュータイプ専用機。型式番号から第一次ネオ・ジオン戦争時にネオ・ジオンで開発されたクシャトリヤの原型であることがわかる。機体フレームにサイコ・フレームを採用し、サイコミュ伝達装置の小型化が図られている。機体を囲むように配置された4枚のバスター内には3基ずつ、合計24基のファンネルを搭載。バスター改修機でユニコーンガンダムとの戦闘で壊滅し、ネル・アーガマに収容されたクシャトリヤ・ベッセルングに改修された。

ル用オプションとして開発されていた大型プロペラント・ブースター(別名シツトルム・ブースター)を備える。

搭載されるサイコミュ兵器のファンネルは、追撃してくるであろう敵の中に、NT-Dやサイコ・ジャマーといった対ニュータイプ装備機があることを想定し、小型グレネード、ランチャーを弾頭に据えこんだ改造ファンネルへと変更している(これに伴いバスター内側のコンテナ部分も改修)。この装備は、宇宙世紀0100年代に実用化されるファンネル・ミサイルの原型といえ、精密誘導兵器が成立しない世界においては驚異の兵器となりうる(あくまで可能性の話でしかないが)。実

際の戦闘でもRX-100「N」パンシィ、ノルン(デストロイモード)の座をつくの成功し、ダメージを与えた。

もう一つ、これまで本機の系統では携行式の火器類は用意されていなかったが(ビーム・ガトリングガンは専用装備として開発されていたが、携行する機会はいなかった)、ビーム兵器を無効にする「フィールド対策の一環として、実体弾の3連装シツトルム、ファウストを装備している。

事実、メカランカ宙域における最終決戦では、追撃してきたリディのパンシィ・ノルンを相手に、ネル・アーガマ防衛の任務を全うしている(機体は撃破された)。



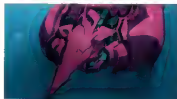
PILOT FILE

主なパイロット



ロニ・ガーベ

ニューギニアのジオン残党軍のパイロット。父親は元ジオン公国軍人で貴族家だったマハディ・ガーベ。その父を連邦軍によるジオン残党狩りで殺害され悲しく増えた。シャンブロのパイロットとしてダカール市、そしてトリントン基地を襲撃する。



水中運動形態

両肩部装甲を折り倒しを収納する形で運動形態へ変形し水中を運動する。両肩部には電磁流体推進装置を内蔵している。水中内でもクローの機関が可能である。岸上を航行する艦艇にとって脅威以外のなにものでもない。

SHAMBLO
AMA-X7

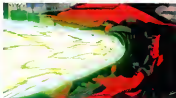
シャンブロ

Spec

全高 31.8m (陸上運動形態時) 全長 77.8m (水中運動時) 本体重量 196t
全備重量 283t ジェネレーター出力 21,460kW スラスター総推力 226,480kg
装甲材質 ガンダリウム合金 武装 大口徑メガ粒子砲、リフレクター・ビット、他

Arms and Equipment

武器・装備



大型メガ粒子砲

本機の主武器。両肩カバー内に収納されている大口徑のビーム砲。機体サイズに比例して高い威力を誇り、直撃を受けられはMSはひとたまりもない。連射をするには時間を要するものの、かつての連邦政府首都のあったダカールを襲撃した際には、ビル群を吹き飛ばし都市部を火の海へと変えた。



リフレクター・ビット

機体後部のサイロに格納され、射出されるとスラスター付カバーが外れ、二重反転ローターで上空を浮遊する。本体にビーム砲などは搭載されておらず、シャンブロから撃たれたビームを反射、拡散させる。コントロールはサイコミュで行い、敵のビームを反射させ攻撃に使うことも可能である。

MSとのサイズ対比

陸上運動形態時の全高はユニコーンガンダムを上回る。機幅のボリュームは5倍以上にも見える。右胸部装甲が「袖付き」風なのは実装の証だろうか。



ジオン残党軍が完成させた ハマーンの遺産

ジオン残党軍が6年の歳月をかけて完成させた水陸両用MS。

元はハマーン・カーン率いるネオ・ジオンの時代に設計された機体で、第一次ネオ・ジオン戦争の際には日の目を見ることがなかった。

戦後、地球圏で活動するジオン残党軍の手に渡り、「桂付き」からの資金援助を受け、完成へとこぎ着けたというが、直接譲渡されたものなのか、地球に残されていたものを発見したのか、機体の入手経路などは不明である。

本機は水陸両用機であると同時に、サイコ・フレームを採用し、サイコミュー兵器であるリフレクター・ビットを搭載したニュータイプ専用機でもある。搭乗者にはニュータイプ能力が求められ、素養のあったロニ・ガーベがパイロットを務めた（一説にはロニの兄弟や父親などが同業していたとも伝えられている）。

3脚と独特な形状の陸上駐留形態は、左右前脚の部分に展開するクロロ・アームを備えている。クロロの先端部のアイアン・ニールの強度は高く、水中から空母や戦艦の艦底部を貫くほどで、ひとたび捅まれたらMSなどは軽く粉砕されるだろう。

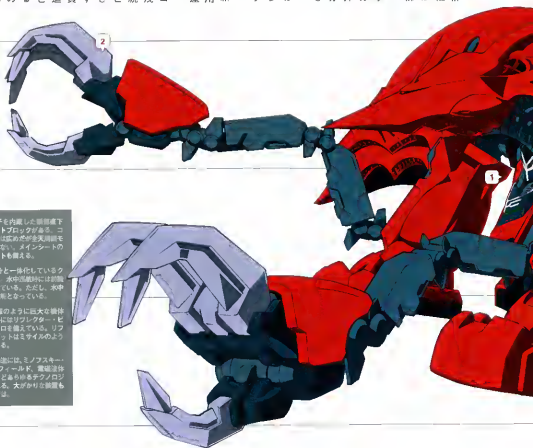
巨体に似合わず機動性も高く、ミノ

フスキー・クラフトとホバー推進を併用した航行システムは驚くべき静粛性を発揮するという。水中巡航形態時は一年戦争時に活躍したクラブロを彷彿とさせるような流線型だ。

結果的に本機はトリントン基地襲撃の際、高威力のビーム（ユニコーンガンダムとのビーム・マグナム）の直撃弾で撃破されるのだが、コクピット部分以外は損壊せず、機体構造の頑強さを証明してみせた。

ここからは推測の域を出ないが、おそらくシャアのネオ・ジオン時代から支援は続けられていたのだろう。そうでなければ機体に用いられたサイコ・フレームをはじめとした当時まだ最新技術といえる情報の手や、機体を用いるガンダリウム合金などの資材調達には困難を極めたはずだ。

たしかに地域住民と良好な関係のコミュニティを築いた地球圏のジオン残党軍は少なくない。しかし、生活を続ける（持つ）ための装備を維持する」というのと、兵器を製造するのには大きな隔たりがある。MAやMSを密造するにしてもそれなりの施設規模、人員が必要だ。それこそ町工場でMS製造が可能になるのは半世紀以上先のことである。ともかくも、本機が完成するまでには多くの謎がはらんでいるものの、ジオン軍人の執念が迫り上げた、という事実は疑いようがない。



1 メガ粒子を内蔵した弾頭庫下にはコクピットブロックがある。コクピット内部は広めだが全周視界モニターではない。メインシートの他にサブシートも備える。

2 切腹部分と一体化しているクロロ・アーム。水中巡航時には前脚部に収納されている。ただし、水中でも展開が可能となっている。

3 鳥の甲斐のように巨大な機体機体コニットにはリフレクター・ビット用のアイロを備えている。リフレクター・ビットはミサイルのように撃ち出される。

4 機体の後部には、ミノフスキー・クラフトやフィールド、電磁波伝導機などあらゆるテクノロジーが投入される。大がかりな装置も巨大化されている。

NEO ZEONG

NZ-999

ネオ・ジオング

Spec

全高・116m 本体重量 153 ㏩ 全機重量 324.3t ジェネレーター出力 35,680kW〜計測不能
スラスター駆動力 28,827,500kg〜計測不能 装甲材質 ガンダリウム合金
武装 大口徑ハイ・メガ粒子砲、ファンネル・ビット×30、他 機首 サイコ・シャード誘導機

1 本体の中央部には、フロンタルの乗機でもあるMSN-065シナンジュが格納されている。脚部の引張を原則すればMSの脚も攻撃に使うことができる。

2 折り出した左右両部と腰肢関節面にサイコ・シャード発生部が分割した状態で収納されている。使用時にはこれを機体から放出して展開する。

3 腰肢関節部には4基のアーム・ユニットと誘導機。構造は同族のものと同じで、光線に付き本のファンネル・ビットを離れる。換えても使用可能。

4 機体下部の側に見えるユニットは、シュバルム・ブースターと呼ばれる推進ユニットで状況に応じてバリエーションが可能。

Pilot Note

主なパイロット



フル・フロンタル

ネオ・ジオンの総長「袖付き」の真意。常に仮面で素顔を隠し、「シャアの再会」と呼ばれている。「ラプラスの箱」をめぐる戦いの最終決戦にネオ・ジオングを駆って出現する。自らが唱える『サイド3攻撃圏』実現のため、パナージュやオードリー（ミネルバ）と激しく対立する。

MSとのサイズ対比

RX-0
ユニコーンガンダム
機体高21.7m

比較はユニコーンガンダムのデストロイモードとの対比。ユニコーンモードでも19.7mだが、どちらにしても倍以上の大きさである。



武器・装備



サイコ・シャード

本体に格納されているユニットを円環状に展開し、疑似サイコ・フィールドを発生させる特殊装置。コア・ユニットのシナジューのサイコ・フレームとの共振現象を利用する。機体の多くが謎に包まれている。



ファンネル・ビット

アーム・ユニット先端部の有線式サイコミュ兵器。それぞれ独立動作し、ビーム・サーベルのように使用したり、敵MSをジャックしたりと多彩な攻撃が可能。機体には合計30基が装備されている。

多くが謎に包まれた
驚異の超巨大MA

ネオ・ジオングは「袖付き」が「ラブラスの箱」をめぐる争いで投入したニュータイプ専用MAだ。首魁のフル・フロントル自らが搭乗し出撃した。

本機を形容するのに相応しい言葉は「巨大」と「謎」に尽きるのではないだろうか。まず、その大きさが、推進ユニットであるシウムル・ブースター込みで、全高116メートルと破格の大きさだ。その巨体はハル・ユニットと呼ばれMSのMSN-06シナジューをコア・ユニットとして格納している。こうした機体構成はRX78

コア・ユニット

MSN-068
シナジュー

Spec

全高 27.6m 全機重量 25.2t
全機重量 55.1t
ジェネレーター出力 3240KW
推進力 12,000kg
装甲材質 ガンダリウム合金
武装 ヒール・サーベル×2、ビームライフル、グレネード・ランチャー、ビーム・アックス×2、他
備考 フル・サイコ・フレームテスト機

連邦軍の高級計画「UC計画」により、アナハイム・エレクトロニクス社が開発した試作MS。それを強奪した「袖付き」が、フル・フロントル専用機に改造した。組織名の由来でもある他の莫大の機体各部に施されている。

RX-0ユニコーンガンダムの足跡機でもある。



COLUMN シナジューになる前の原石

MSN-068
シナジュー・スタイン



「袖付き」に強奪される前のシナジューの原型機。連邦軍の機体として、サイコ・フレーム搭載機体のテストベッドとして開発されたが、試験中に「袖付き」に強奪された。この事件自体が同組織へ機体を提供するための狂言ともいわれるが、詳細は不明である。また本機で得られたテストデータがユニコーンガンダムの開発にも活かされている。

GP03ガンダム試作3号機を彷彿とさせるが、本機の場合はシナジューの機能増幅装置としての側面が強い。制御系の一部にMSを用いたガンダム試作3号機とは異なる部分だろう。それでも機体には装備されるメガ粒子砲やファンネル・ビットなどは高い攻撃力を持つ。似てはいる部分も少なくはない。先に述べた本体「ブースター」という構成も、NZ-333α・アジールと同様である。1式も準備する。これまでに開発されてきた過去の機体を参考にして本機は開発されているのだろう。

次に謎だが、最大のものはサイコ・シャードだろう。シナジューのサイコ・フレームを利用して疑似サイコ・フィ

ールドを発生させる装置とされ、かの第二次ネオ・ジオン戦争でRX93Vガンダムが地球落下軌道上にある小惑星アクシズを押し返した、いわゆる「アーク・ショック」と同様の効果が得られるという機器だ。しかし、相手の武器を使用不能にするといった一定の効果は見られたものの、その能力の全容は明らかにされていない。

もう一つ大きな謎として考えられるのが機体の開発経緯についてだ。開発そのものはアナハイム・エレクトロニクス社が行ったといわれる。しかし、これはど規格外の機体をテロリストの烙印を押された「袖付き」に供与するものだろうか？ もし事が露見したら

政治的にも社会的にも深刻なダメージを被りそうである。

ただ、一説によると「UC計画」において、ユニコーンガンダムが連邦軍の意に反して不都合な動きを見せたときの対抗策、一種のカウンターパワーとして、以前から開発されていた機体を提供した、という話もある。

実戦では「袖付き」の切り札として、メガナード川域における戦闘に投入されたが、RX-0ユニコーンガンダム、RX-0(N)ユニコーンガンダム2号機バンシィ・ノルンと死闘を繰り広げた末、シナジュー諸共破壊された。機体は失われ、真相はすべて闇の中。謎だけが残った。



PENELOPE

RX-104FF

ペーネロペー

Spec

頭頂高 26.0m 本体重量 36t ジェネレーター出力 4,052kW

スラスタースピード 168,000km/h センサー有効半径 32,000m 装甲材質 ガンダリウム合金

武装 バルカン砲×4、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ファンネル・ミサイル、他

ミノフスキー・クラフトを運用するための実験機

ペーネロペーは宇宙世紀0100年代にアナハイム・エレクトロニクス(AE)社が開発したニュータイプ専用機。第5世代MSに相当し、ミノフスキー・クラフトによる飛行能力を持っている。

とはいえ、コアとなるオデュッセウ

- 1 ペーネロペーのコア・ユニットというオデュッセウスガンダム・フライト・ユニットの模倣品は、機体の各部に5箇所を内蔵している。
- 2 フライト・ユニット(ペーネロペー・ユニット)は上半身と下半身に分離して設置されている。ユニットにはミノフスキー・クラフトを内蔵する。

- 3 両腕部には武器ユニットを装備。メガ粒子砲、ミサイルなど。ビーム・サーベルの1本になった複合装備もある。メガ粒子砲のみの使用で調整可能。
- 4 両膝や腰部フロントアーマーの裏面には、ファンネル・ミサイルを装備している。フライト・ユニット自体がウェポンキャリアーを兼ねている。



スガンダムには飛行能力がなく、ミノフスキー・クラフトを搭載した可変式のフライト・ユニットを装着した状態が通常の姿といえる。本機の名称であるペーネロペーも、このフライト・ユニットの別名なので、どちらかというところ内蔵するガンダムより、フライト・ユニットがメインといって過言ではあるまい。また全長機時の全高は32メートルという、時代的にも大型の機体に

分類される。

MSをサブ・フライト・システムなしで飛行能力を付加するというのが、開発の主目的といえるが、ミノフスキー・クラフトをMSに搭載するのに難航し、外部ユニットを装備するという構成になった。

また、ビーム・バリアを展開して飛行時の空気抵抗の低減に応用するなど新機軸の機能も盛り込まれている。だ

が、高速領域での巡航には機体メインフライト・ユニットをフライト・フォームへと変形させる必要があった。AE社のガンダム開発20周年を記念して開発された機体だが、技術的に未完成といった印象は拭えない。

反地球連邦組織マフティーのRX-105三ガンダムに対抗するための部隊、キルケーユニットに配備され、イン・エイム中尉が搭乗した。

GUNDAM

RX-105

ガンダム

Spec

全高 26.0m 本体重量 32.0t ジェネレーター出力 3,930kW
スラスター総出力 1160,000kg センサー有効半径 30,000m 装甲材質 ガンダリウム合金
武装 バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、ファンネル×ミサイル、他

- 1 ゴインアイ式のセンサーやミサイルは2本のスリットなど間隔はガンダムタイプを参照。アシナズは頭部の張り出し部分から胸すいどに展開する特殊の形状。
- 2 両肩肩アーマーにミズフスキー・クラウドを模した（真鍮）、ファンネル・ミサイルのランチャーやビーム・サーベルなども装備されている。
- 3 腕部や脚部には、通常のミサイル（ロケット弾）を内蔵。射撃時にはアーマーが露出し射出口が露れる。また腹部にはマイクロミサイルポッドを装備可能。



反連邦組織マフティーへ提供されたガンダムタイプ

アナハイムエレクトロニクス（A.E.）社が機密に開発したニュータイプ専用機。完成した機体は反連邦組織マフティーへと譲渡された。

型式番号からもわかるように、RX-104F「ペーネロ」に次ぐ機体であり、両機は兄弟機の間柄といえ

る。開発コンセプトも「MSを単独で大気圏内を自由に飛行させる」という点で共通している。しかし、ペーネロヘイがフライト・ユニットの助力が必要なのに対し、本機は主要コンセプト通り、単独飛行が可能で、かつて時代を席巻した可変MSのようにMA形態に変形する必要はない（ペーネロヘイは高速飛行時はフライト・フォームへ変形しなければならない）。飛行速度

も機体にビーム・バリアを展開することで空気抵抗を軽減し音速を超える。こうした点から見ても、本機の方がペーネロヘイよりも技術的完成度は高いのは明らかだろう。

しかも、両機の歩む道は正反対で、かたやペーネロヘイは地球連邦軍へ、かたやガンダムは対立する反連邦組織マフティーへと送られた。

その後、本機はマフティー・ナビ

ユ・エリンことハサウェイ・ノアの乗機となり、連邦閣僚会議襲撃作戦などに投入され戦果を挙げ、組織の脅威となるが、結局、連邦軍に捕獲される（捕えられたマフティーは処刑された）。

本機の名称の由来は、アムロ・レイが第二次ネオ・ジオン戦争で搭乗したRX-93「νガンダム」を継ぐものとして、νの次のギリシャ文字、πがつけられている。

PILOT FILE

主なパイロット



鉄仮面 (カロンゾ・ロナ)

クロスボーン・バンガードの軍事部門に所属する指導者
部隊のマイナー・ロナとは養育子の関係。強化人間の
彼は常に仮面を被り人前に素顔を見せず、目的を果たすた
めラフレシアで出撃する。本名はカロンゾ・ロナ。

LAFRESSIA

XMA-01

ラフレシア

Spec

全高 32.5m 本体重量 184.6t 全備重量 263.7t ジェネレーター出力 31,650kW

スラスター総推力 1,054,850kg 装甲材質 チタン合金ハイセラミック複合材

武装 腕部ビーム砲×6、メガ粒子砲×6、メガ・ビーム・キャノン×6、デングクラー・ロッド×125、他 備考 1フィールドジェネレーター搭載機



MSとのサイズ対比

RGM-109
ヘビーガン
頭頂高15.8m

連邦軍の量産MSであるRGM-109ヘビーガンとの比較。15m級の小型機が主流となる時代においても、ラフレシアはかなりの大型機である。



1 機体上面中央に設けられた一人乗りのコックピット。シートは球面状のキャノピーで覆われている。すべての機体制御や、武器管制をここから行う。

2 花卉のような形態のバインダーには、スラスターと、メガ粒子砲が搭載されそれぞれ無射可能。裏面にはデングクラー・ロッドが収納される。

3 本機にもメガ・ビーム・キャノンや多数のメガ粒子砲を備えている。巡航時はコックピット部分を進行方向に向けて推進する。

4 機体各所に設置されたスラスターで高い機動力を發揮。本機には1フィールド・ジェネレーターを搭載し、駆動力も高い。

秘密裏に開発された 強化人間用巨大MA

クロスボーン・パンガーの建国の巨大MA。コスモ・バビロニアの建国を目指す同組織の軍事指導者、鉄仮面（カロッツ・ロナ）が建造させた専用機。彼が執り行う「ラフレシア・プロジェクト」（無人兵器の無差別殺戮による人類浄化計画）の中核をなす機体として開発が進められてきた。

宇宙世紀0130年代当時、MS開発は小型化へと向かっていた。そんな時代において本機は、全長30メートル以上となる大型機であった。MS開発のトレンドから見ると、やや時代錯誤

Arms and equipment

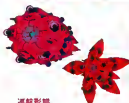
武器・装備



テンタクルー・ロッド
5基あるバインダーの裏に収納されている攻撃用軸手。先端部にはチェーンソーとビーム砲、スラスターを備える。思考コントロールにより自在に動く。



メガ・ビーム・キャノン
中央本体下部にある大型ビーム砲。対MS戦には不向きだが一撃の威力は高い。テンタクルー・ロッドのビーム砲と併用が可能である。



巡航形態

通常移動する時はコクピット部分を前にして進む。高速で移動する際には、5基の花弁（バインダー）を閉じた状態となる。



メガガン砲

機体各部に設置されているビーム兵器。5基のバインダー部分に1門ずつ、コクピットを囲むように5門と配置されており、死角のない攻撃が可能である。

な印象を受けなくもないが、実態は大いに異なるものとなっている。

機体制御はすべてサイコミュによって行われ、コクピットのコンソール部には、操縦桿など操作用の機器類は見当たらない。鉄仮面の仮面のトスカ部分から無数に伸びたファイバーが機体に直結され、これによって操縦を行う。要するに「思考して操作する」の1本だ。

また機体に備えられたセンサーの効果だが、サイコミュの能力なのかは不明だが、モニターで見ることがなく、敵の動きや数などを感知できるようだ。

機体の中央本体を取り巻くようにして、花弁のような5基のバインダーが配置され、本体のスラスターと合わせ

PICK UP!



ラフレシアでF91と戦う鉄仮面は、ラフレシア本体と自身をつなぐケーブルで機体のすべてをコントロールしている。しかし、F91の暴走騒動で発生した「質量のある残像」攻撃に混乱し、正確に敵の位置をつかめないでいた。操縦者の焦りを感じ取ったのか、攻撃の頼みの綱であるテンタクルー・ロッドは絶叫を返し、空しく宙を切った。



連邦軍の艦隊を壊滅させるほどの攻撃力を持ったラフレシア。しかし、限界を超えたF91によって撃破された。現場へ到着したザビーネ・シャルは、宇宙に巨大な爆発の花を咲かせるラフレシアを前にして、ただただ驚くしかなかった。周囲にMSの大部隊がいるのかと警戒するが、そこには行動不能のF91のみ。その光景にさらに驚き隠さなかった。

て高い機動力を發揮。その運動性能は、F91やXM-07ビギナ・ギナといった最新鋭機に匹敵するほど。内蔵する「ファイールド・ジェネレーター」により高い防御力も持つ。しかも機体制御を行いながら無数のテンタクルー・ロッドを自在に操り攻撃が可能というのだから、到底人間業ではない。これを機軸にするには高いニュータイプ能力が必要で、本機の場合、強化人間である鉄仮面の専用機ゆえ当然のことだろう。

投入された宙域をその支配下におく、などという法外な評価も、あながち間違っていないのかも知れない。

実際、フロンティアI宙域における戦闘は、まさにラフレシアの性能がフルに発揮された戦いといえるだろう。敵の増援部隊である連邦軍の艦隊を、自身に傷一つ負うことなく、わずかな時間で全滅させてしまった。

しかし、一見無敵に思える本機にも弱点はあった。それは最大の特徴といえる「思考して操作する」ことだ。なぜなら、機体の意識を刺激させるほど高い機動力で残像を作り出したF91の攻撃に対し、搭乗者の鉄仮面は実体を捉えられ混乱し、それを読み取ったラフレシアもF91に攻撃をあてられず、敵が生じて撃滅されてしまった。

心の動揺で機能不全を起こすなど、ニュータイプ兵器らしいといえは、らしい最期ではあった。

一年戦争後に登場した 準サイコミュ機の流れ

開発元 **アクシズ**

AMX-103
ハンマ・ハンマ

頭頂高 21.5m
本体重量 40.5t
全備重量 79.4t
ジェネレーター出力 4,520kW
スラスター推力 258,200kg
センサー有効半径 14,200m
武装 ヒーム・サーベル×2、
3連装メカ粒子砲×2、メガ
粒子砲内蔵シールド、他



開発元 **ネオ・ジオン**

AMX-014
ドーベン・ウルフ

頭頂高 22.0m
本体重量 36.8t
全備重量 74.9t
ジェネレーター出力 5,250kW
スラスター推力 87,300kg
センサー有効半径 13,000m
武装 30mmバルカン砲×2、
ヒーム・サーベル×2、メガ
ランチャー兼ビーム・ライフル、
インコム×2、他



開発元 **オーガス研究所**

ORX-013
ガンダムMk-V

頭頂高 22.80m
本体重量 39.6t
全備重量 85.31t
ジェネレーター出力 5,520kW
スラスター推力 111,200kg
センサー有効半径 12,000m
武装 ビーム・カンヌ兼用ビーム・
サーベル×2、ビーム・ライフル、
インコム×2、他



グリプス戦役の終結時、完成したガンダムMk-Vの機体がアクシズに渡れる。

第一次ネオ・ジオン戦争終結時にネオ・ジオン(小惑星アクシズ)に残されていたドーベン・ウルフが過邦軍に回収され、AE社へと渡る。

開発元 **袖付き**

YAMS-132
ローゼン・ズール

頭頂高 22.5m
本体重量 25.4t
全備重量 72.6t
ジェネレーター出力 4,950kW
スラスター推力 257,200kg
センサー有効半径 16,200m
武装 3連装メカ粒子砲×2、
インコム×2、メカ粒子砲内蔵
シールド、サイコ・ジャマー



開発元 **アナハイム・エレクトロニクス(AE)社**

ARX-014
シルヴァ・バレット



頭頂高 22.2m 本体重量 33.5t 全備重量 70.5t
ジェネレーター出力 4,250kW スラスター推力 87,300kg
センサー有効半径 13,500m
武装 60mmバルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、有線式ハンド×2、ビーム・ライフル、インコム×2、他

Column

ニュータイプ機の 発想の帰結点

～一般併用サイコミュ兵器と対ニュータイプ戦術～



↑サイコミュ兵器がすでに「見えない兵器」でなくなっていたし、C.0096年代。しっかりとした装束と操縦技術があればニュータイプ兵器とも互角に戦えた。

一般兵器に開発された 準サイコミュ兵器

ニュータイプ兵器が、それまで短い間で培われていたミノフスキー粒子下の戦術にインパクトを与えたことは、大きく分けて2つあるだろう。

ひとつは、遠隔操作砲台（サイコミュ兵器）により、ミノフスキー粒子時代以前の精密誘導兵器に準ずる能力を得られたこと。もうひとつは、同じく精密誘導兵器時代には当然であった、複数の目標に同時攻撃できるマルチタスクであった。

ミノフスキー粒子の登場によって、戦闘のレベルが第二次世界大戦並みになったといわれるが、精密には異なる、サイコミュ兵器はある意味、その後の電子戦時代の戦術のある程度維持が可能な存在であった。しかし、ニュータイプ兵器およびサイコミュ兵器は、ニュータイプのような供給が難しく、人工ニュータイプである強化人間も含め、

精神的に不安定なことが多く、さらに敵性ニュータイプがいると、必然的に戦闘になり損耗率も高いという、多くの欠点があった。

こういった状況で、ニュータイプでなくても、サイコミュ兵器のような疑似兵器を運用できるということが大きな意味を持っていた。このため能力はかなり落ちるものの、一般兵でも扱えるサイコミュ（準サイコミュ）や、それに準ずる兵器が開発されるのは自然な流れであった。

その開発はアクシズ（ネオ・ジオン）でも積極的に行われ、MSN-002 ジオングの技術の延長にある有線式アームを持つAMX-103 ハンマー・ハンマが開発された。一方で、地球連邦軍でも一般兵用の準サイコミュ兵器の開発



↑宇宙世紀020年代に制度で機体をコントロールする技術を導入したラッパレシア。ニュータイプ技術とは直接関係なく開発されたという。

は行われ、アクシズに先んじてグリプス戦役の終わりにORX-013 ガンダムMk.Vを実戦に投入。これはインコムという、従来よりフレキシブルに機動する（とはいえ無線式より制限は多かった）有線制御式砲台を準サイコミュで制御する方式をとり、ある程度の能力は確保されていた。

このインコム方式は、準サイコミュ兵器としては中々優秀だったようである。アクシズ（ネオ・ジオン）でも、開発者の亡命により技術を得、ガンダムMk.VをベースにしたAMX-014 ドーベン・ウルフを開発し、次期主力機になるほどの評価を得た。

そして、このドーベン・ウルフはネオ・ジオンのみならず、アナハイム・エレクトロニクス社でも派生形、ARX-101.4 ソルヴァ・バレットを開発するなど、その将来性を囑望されていたことがわかる。

おどろくほど短い 準サイコミュ採用の期間

しかし、準サイコミュは、主流になることなく歴史の闇に消えていく。

その答えは宇宙世紀0096年、インダストリアル7宙域における戦闘である程度の答えを導くことができる。ニュータイプ専用機を相手にした特務機であるRGM-89 スタークジェガンは、NZ-666 クシャトリヤのフ

アンネルに広範囲に効果があるクラスター弾で対応し、ファンネルの無力化を試み、次に高機動で一気に本体に迫り、近接戦に持ち込みファンネルの攻撃を封じた。結果的には間一髪、これには大きな意味がある。

「ラッパレシア」をめぐる争いで、すでにモビルスーツはファンネルの動きを認識できるほどの探知能力を備え、その対策方法も確立していたということと、その状況下においてはニュータイプ兵と一般の優秀な兵の実力に大差がないケースもあったことだ。そしてその場合、大型のファンネル搭載型ニュータイプ専用機の方が機動性などの面で不利になる可能性もあった。

また、ネオ・ジオンの残党「袖付き」では、サイコミュの機能を無効にするサイコ・ジャマーを実用化しており、技術面でもサイコミュの限界が見えていた。能力が大きく落ちる準サイコミュ兵器についてはなにかを言わんや、であらう。

ここで、技術的に新たなブレイクスルーがあれば、サイコミュ兵器は新たな展開を迎えていただろうが、ニュータイプ兵の万全供給不足という最大の問題を抱える状況において、その価値がどの程度かは微妙なところだろう。そして、サイコミュ兵器より早く、準サイコミュ兵器は姿を消すのだ。

RX-0 フルアーマー・
ユニコーンガンダム

VS

RX-0[N]
バンシィ・ノルン

共にアナハイム・エレクトロニクス社が開発した宇宙世紀0096年時のハイエンド機であるユニコーンガンダムと、ユニコーンガンダム



↑元のスペックが高いために実際の戦力は高いが、そこからさらに戦闘に特化した方がより強力なのは当たり前。



↑ガンダム機上での戦いは正にハンシィにとつて有利な状況だったが、戦う気のないユニコーンガンダムは上手に避けて切り抜けた。

フルアーマー・ユニコーンガンダム	スペック比較	バンシィ・ノルン
19.7m (ユニコーンモード時)	頭頂高	19.7m (ユニコーンモード時)
45.1t	本体重量	27.3t
76.9t	全備重量	48.8t
3,480kW (ユニコーンモード時)	ジェネレーター出力	4,520kW (ユニコーンモード時)
189,700kg (ユニコーンモード時)	推力	185,380kg (ユニコーンモード時)
22,000mm	センサー有効半径	28,600mm
機関60mm(16カン砲・ヒーム・マクナム・ビーム・カトリックガン・ハイパー・バスター・カ・ビーム・サーベル・3連装対空サイレン・ハイパー・ビームシールド)	武装	機関60mm(16カン砲・ヒーム・マクナム・アームド・ブラスター・DE・ビーム・サーベル)

THE 対決

MAJESTIC

パイロットの能力に呼応していくニュータイプ専用機。それゆえ、優秀はなかなかつけないが、もし戦った場合はどうなるか。そんなドリーママッチを検証！

構成・文 星大輔介

戦闘用のバンシィと「鍵」のユニコーンガンダム

両者はほぼ同時期に開発された機体ではあるが、時系列的にはユニコーンガンダムのマニューバデータが、2号機であるバンシィに反映されるなど若干だが相違もある。

スペック上の推力は同じ(両者はスペック的には他のファクターも同値である)ものの、このデータ反映により空間戦闘能力についてはバンシィが優れている。さらに、地球にあるオーガスタ研究所で慣熟試験が行われてきたため、バンシィの方が重力下環境における能力も安定しているとみられる。

その一方でレオ・プログラムはユニコーンガンダムのように搭載されたものであるが、これは直接的な戦闘能力には関係のない要素だ。NT・Dシステムは両者とも実装されており、もちろん2機ともフル・サイロームの発光色は異なるが、実際にどのような違いがあるのかは不明だ。

素体としてみれば若干バンシィが有利という程度で両者には大きな違いが、武装を施されるとがらりと様相が異なってくる。ユニコーンガンダムはシールドにビーム・サーベル、そしてビーム・マグナムと必要最小限の武装でまとめられており、対してバンシィはア

ームド・アーミーBS、アームド・アーミーVNという専用装備を持つ。兵装のコンセプトの新しいさでいえば、バンシィが明確に上回っている。

これがフルアーマーユニコーンガンダムとバンシィ・ノルンになると、一見その差が縮まるように見える。しかしバンシィ・ノルンはリボルビング・ランチャーとアームド・アーミーDEで多種にわたる状況に対応させ、さらにアームド・アーミーDEで出力と相手への対応速度を高めている。これらの装備類は高度にデザインされた専用の武装体系である。対するフルアーマー・ユニコーンガンダムも様々な武装を搭載し、デストロイモードへの変身にも支障がないなど、それなりに計算されているものの、基本的には現場での改修だ(思いつきのアイデアが意外にも功を奏することは実際の戦闘では見られるケースではある)。純粋な戦闘力という意味ではやはりバンシィ・ノルンが高いだろう。

しかしそれもある意味当然であり、ユニコーンガンダムは兵器としての存在というよりは、「プロダクトの箱」の鍵としての存在に重きが置かれた機体だ。その反対にバンシィは機体の能力、先進性を純粋に戦闘用MSとして突き詰めている。求められた役割は、その機体のカラーリングのごとく正反対といえる「兄弟機」なのである。

理想の精鋭部隊とは どういったものか!?

両者のスペックを比べてみると、数値的にはドーベン・ウルフが有利だ。全高や本体重量はドーベン・ウルフの方が大きく、全備重量もかなり重い。しかし推力はドーベン・ウルフの方がキューレイ(量産型キューレイ)の推力は不明のため、ベースのキューレイを指標としたより3割強高く、全備重量の差を補う余地がある。

また、ジェネレーター出力はドーベン・ウルフがキューレイの3倍近い数値を誇る。多数の内蔵メガ粒子砲やメガ・ランチャーの駆動に対応したスペックだ。武装に関しては量産型キューレイはベース機に比べアクティブ・カノンとファンネルの増設をしている。

「ファンネル・コンテナ」としての機体のコンセプトを併せ、一方で、ファンネルに頼りきった戦い方にならないようにという、実戦的な改良だ。ドーベン・ウルフは内蔵メガ粒子砲をはじめとして高出力のメガ・ランチャー、ミサイル、そしてインコムと多彩。純粋に機体の能力でいえば、基礎設計が新しく武装も強力なドーベン・ウルフに分がある。

でもし両者が戦ったら……それも実際の運用のように精鋭部隊として戦ったらどうなるのだろうか。量産型キ



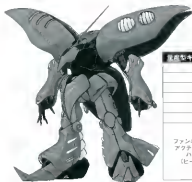
↑ニュータイプのみで構成された部隊という
ある種の「理想」を実現したが、期待ほどの
結果は残らなかったというのが実態であった。

[MATCH No.2] AMX-004G 量産型キューレイ VS AMX-014 ドーベン・ウルフ

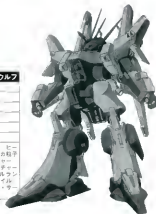
ネオ・ジオン的高性能量産機である量産型キューレイとドーベン・ウルフ。どちらも精鋭部隊が運用したという点まで含めて似ているが、ではどちらの方が優れていたのだろうか。機体個別のみならず、実際の部隊による運用まで含めて検証してみよう。



↑ニュータイプ相手に互角に戦ったラカンの
作量は非常に高かった。どうせなら
ラカンをクローンすればよかった?



量産型キューレイ	スペック比較	ドーベン・ウルフ
18.4m	全高	22.0m
35.2t	本体重量	36.8t
62.1t	全備重量	74.5t
—	ジェネレーター出力	5,250kW
—	推力	87,300kg
10,900m	センサー有効半径	12,000m
ファンネル (30発) アクティブ・カノン ハンドランチャー (ヒーム・サーベル)	武装	30mmバズカ弾 ヒーム・キャノン メガ・ランチャー グレネード・ランチャー 12連装ミサイルラン チャー 次型ミサイル インコム ヒーム・サー ベル



キューレイを用いたニュータイプ部隊はゲームルクやクイン・マンサと戦った経験があるが、戦果としては芳しくなく、ニュータイプ部隊側には被害を出している(ゲームルクの側近を撃滅してはいるが)。

ドーベン・ウルフを配備するスペース・ウルフ部隊は同じくゲームルクやザクⅢ改と戦い、やはり被害は出ているものの意外にも(?)善戦。特にラカン・ダカランはオールドタイプながら圧倒的な技量と冷静な精神力を持ち、部隊を率いる術にも長けていた。議員も巧みな連携の様子をみるに訓練を積み、その中にはニュータイプ専用機「ファンネル搭載機」への対応もプログラムの含まれていた。ニュータイプ部隊は精神的、能力的に安定したニュータイプを一人見つけ、それをクロインで増やせば良質のニュータイプ部隊が作れるというスキームのようだが、かけた労力に見合う結果は残せなかった。そのためか、技術が進んで以後も似た事例はない。精鋭部隊は心身ともに安定した、訓練を積んだパイロットを新鋭機に乗せるのが良策というのが両者を比較した結論だろう。

とはいえ、ラカン・ダカランのような人材を見つけ、人員を訓練することでも現実的とはいえない困難はある。何時の世も「最強の部隊」を作ることには難しい。

**火力、機動力、防御力
扱いやすさが勝負を分ける？**

ニュータイプおよびニュータイプ専用機はどの時代においても個で群を圧倒する強力な戦力力が求められた。ハマーン率いるアクシズ（ネオ・ジオン）のクイン・マンサとシャア率いる新生ネオ・ジオンのα・アジールは、そういった「一騎当千型」のニュータイプ専用機の中でも屈指の能力を誇る大型機である。

機体の性質としては、クイン・マンサは機体の大型化によって従来のニュータイプ専用機（キュベレイ）の能力をそのまま高めたタイプのMSなのに対し、α・アジールは機動力と火力を重視したビグロ型MAに近いタイプだ。スペック的には意外にも両者のジェネレーター出力と重量は近い。その一方で推力はα・アジールが圧倒的に高い。その数値から大型のプロペラントタンクを備えているとはいえず、α・アジールがその推力を全開にできる時間は（クイン・マンサに比べ）そう長くはないはずだ。基本的に戦場へ急行するための推力で、現場に到達したら一般的な機動を行うものと思われる。兵装は大型のファンネルを数枚および有線式メカ・アーム砲を備えるα・アジールと、小型のファンネルを大量に装備し、内蔵メガ粒子砲で推すクイン・



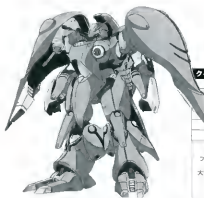
●コンセプトを後継したウシャトリヤが派手に生まれており、クイン・マンサの機体はいつの時代も求められたようではある。

【MATCH No.3】

NZ-000
◀クイン・マンサ
VS
NZ-333
α・アジール▶

新旧ネオ・ジオンが誇る「NZナンバー」を冠した大型機であるα・アジールとクイン・マンサ。どちらも切り札として用意されたと思われるが、タイプとしては異なる機体だ。その違いの意味と戦力を比べてみよう。

クイン・マンサ	スペック比較	α・アジール
39.2m	総高さ	56.4m
143.2t	本体重量	126.6t
264.7t	全機重量	267.4t
21,370kW	ジェネレーター出力	19,830kW
287,100kg	推力	2,217,500kg
14,800m	センサー有効半径	23,800m
内蔵メガ粒子砲 ファンネル(30基) メガ粒子砲 大型ビームサーベル フィールド・ジェネレーター	武装	バネカン砲 大型ファンネル(9基) メガ粒子砲 有線サイコ2.2式 メカ・アーム砲



●戦時に限っては環境中化程度の動き以外に露出は無いが、目撃過ぎて運用が難しいためが直後の後継機は作られなかった。



マンサという対比になる。

このように、NZナンバーを持つ両者だが、機体コンセプトは異なる。クイン・マンサは小型・多数のファンネルで対MS戦闘などに重きを置き、α・アジールは大火力と重装甲（防御を考慮してないと思われる部分もあるが）で対MS・艦船まで幅広く対応する。さらにいえば、機体や兵装の制御におけるサイコミュ依存の割合も両者では異なると思われる。

α・アジールは（ニュータイプ能力の高さともかく）ほぼ訓練も積んでいない者でもそれなりに安定して戦闘が行えたが、クイン・マンサは訓練を積んだニュータイプが搭乗してなお不安定であった。α・アジールのファンネル数が少ないのも、有線誘導を一部採用しているのも必要以外にパイロットへの負担を減らす意味もあったのかもしれない。

両者が直接戦う場合は、基本的には火力と防御力、さらにはサイコミュの安定性に優れる（パイロットへの負担が少ない）α・アジールが有利だろう。戦いが長引けばよりそれは顕著となる。クイン・マンサはα・アジールの防御が薄い部分を狙い、早期決着をつける必要がある。ファンネル数は圧倒的に多いので、捨て身ではあるがローテーションを考えずファンネルすべてで飽和攻撃を仕掛けるのも手だ。

サイコ・ガンダム Mk-II の機動に対処できるかが鍵

MAは、大まかに二種類に分けることができる。ピカロ(古くはMIP・X-1)に弾を発する敵機動兵器と戦うための高火力・高機動型のMAと、ビッグ・ザムが源流となる大型・大火力・重防衛の拠点攻略タイプのMAだ。シャムプロとサイコ・ガンダム Mk-II はダカールとトリントン、ダブルリンといった都市(拠点)を巡る戦いに投入されており、後者に分類できる。

両者はともにサイコミュを搭載しており、サイコ・ガンダム Mk-II はそれを機体の遠隔操作やレフレクター・ビットの操作に利用。一方、シャムプロは完成までに「袖付き」からの技術供与をうけ、サイコ・フレームを用いるなどサイコ・ガンダム Mk-II と比べてもサイコミュ関連の完成度は高い。スペック面は、重量やジェネレーター出力など意外にも両者は近い。推力に関してはほぼ近いが、サイコ・ガンダム Mk-II は空から、シャムプロは主に海から敵拠点へ侵襲するというように移動に関するコンセプトが大きく異なり比較はあまり意味がない。

武装は両者の相違が見える部分だ。運用するサイコミュ兵器の性質は共通だが、サイコ・ガンダム Mk-II はメガ粒子砲の門数が多く、腕部の砲など

[MATCH No.4]

AMA-X7 ◀シャムプロ

VS

MRX-010 サイコ・ガンダム Mk-II ▶



▶ダブルリンでの戦いに投入されたサイコ・ガンダム Mk-II。都市の破壊や封鎖が目的と見られるが、ZZガンダム機手にも善戦。

▶ダカールの街を破壊し尽くしたシャムプロ。大口徑メガ粒子砲の威力はモビルアーマーの中でもトップクラス。

モビルアーマーで都市を襲撃するという例はあまり数を見ないが、シャムプロとサイコ・ガンダム Mk-II は歴史上そのよ

うな使われ方をした(される予定だった)機体だ。第4戦目はこの珍しい使われ方をした両者を比較！

シャムプロ	スペック比較	サイコ・ガンダム Mk-II
77.8m (全長)	全高	39.95m
156.8t	本体重量	157.0t
263.9t	全備重量	267.4t
21,460kW	ジェネレーター出力	19,760kW
226,480kg	推力	244,240kg
12,800m(地上) 240km(水中/ソナー)	センサー有効半径	16,230m
大口徑メガ粒子砲 リフレクター・ヒット (12基) アイアン・ネイル	武装	メガ粒子砲 複眼監視メガ粒子砲 レフレクター・ヒット 複眼ミサイル サイコ・ムスビーム・ソード (フィールド・ジェネレーター)



で直接射撃も可能。シャムプロは肩部にメガ粒子砲を集中させてサイコミュ兵器で反射し当てるのが前提だ。また、頭部の大型メガ粒子砲は街をまとめて焼き払う威力を持つ。

これらの点から見ると、シャムプロの方がより拠点への攻撃力に特化した機体といえる。火力は強大だが、リフレクター・ビットの装備数も10基ほどであり(サイコ・ガンダム Mk-II に比べれば)細かい対象への攻撃はそれほど得意ではない。ダカールやトリントン基地を襲撃した際のように、随伴のMSは必須だ。機に潜り込まれた場合、かなり危険だろう。

サイコ・ガンダム Mk-II は全方位への射撃能力に優れるほか、ZZガンダムを飛行して追跡するなど自身の機動性もその巨体を考えれば非常に高い。一点への火力はシャムプロに譲るが、多量のメガ粒子砲から放たれたビームをレフレクター・ビットに集中させればある程度補えるだろう。

両者が直接戦った場合は、サイコ・ガンダム Mk-II はシャムプロの大口徑メガ粒子砲を回避しつつ、レフレクター・ビットとメガ粒子砲でシャムプロのリフレクター・ビットのキャパシティを超える飽和攻撃を行うのが定石となる。一方のシャムプロは若干不利だが、防御を固めつつ大口徑メガ粒子砲の一撃に勝ければ勝機は十分にある。

ジオンのコンセプトと連邦軍的コンセプトの戦い

ニュータイプ専用MSが一定の完成度に達し、実戦に投入されるようになった。グリプス戦役。アクシズのキュベレイはその初期の機体にもかかわらず高い完成度を示し、ババテマス・シロツコがジュビリスにおいて製造、開発したジ・Oもニュータイプ専用機（厳密にはシロツコ専用機だが）として高性能を誇っていた。両者がグリプス戦役を代表するニュータイプ専用機であることに疑う余地はない。

機体のコンセプトとしては、キュベレイとジ・Oでは大きく異なる。キュベレイはファンネルでの戦いに重点を置いた機体であり、推力やジェネレーター出力などMSとしてのスペックは、グリプス戦役末期としてはかなり平凡だ（基本設計はそれほど詳しくないのだから仕方のない部分もあるが）。

ジ・Oはジェネレーター出力こそ平凡だが推力は高く、全身に備わる姿勢制御用のスラスター数が多いために一撃離脱戦法からドッグファイトまで卒なくこなすことができる。武装はビーム・ソードに高出力ビーム・ライフルというシンプルさで内蔵メガ粒子砲すら持たないが、初見でかわすのは困難な「隠し腕」を装備している。

このようにして見ると、キュベレイ



↑一対多戦術向けのキュベレイとはいえ、ハマーンが乗った際は一撃打ちでも強かった。百式では相手をするのは難しい。

[MATCH No. 5]

AMX-004
◀**キュベレイ**
VS
PMX-003
ジ・O▶

「グリプス戦役最強のニュータイプ専用機は何か」と訊かれれば、大部分はキュベレイかジ・Oを思い浮かべるのだだろう（Zカンダムも挙げられるが）。ではスバリ、両者ではどちらが優れているのか？ この難しい（？）問いを今ここで検証してみよう。



↑シロツコ独自の理論によって開発された機体であるジ・O。彼の先見性はMS開発にも発揮されていたように。



キュベレイ	スペック比較	ジ・O
18.4m	総高	24.8m
35.2t	本体重量	57.3t
57.2t	全機重量	86.3t
1.820kW	ジェネレーター出力	1.840kW
61,600kg	推力	135,400kg
10,900m	センサー有効半径	11,300m
ファンネル(10基) ビーム・ガン (ビーム・サーベル)	武装	ビーム・ライフル ビーム・ソード 隠し腕



はエルメスからの流れをくむビット重視のジオン系らしい機体であり、ジ・Oは機体のスペックを高めていくことでニュータイプがその操縦能力を発揮できるように設計された、地球連邦軍的なニュータイプ専用機といえる。ニュータイプ専用機に求められた基本的な役割は、一対多戦闘がひとつ、そして相手側エース（ニュータイプ）との戦闘がもうひとつだ。そしてキュベレイが前者、ジ・Oは後者を得意とする機体と分類できる。

両者はグリプス戦役で実際に戦っているが、ニュータイプ同士の間になるとファンネルの機動を予測して撃ち落とすといったことも可能であり、実際、シロツコのジ・Oはキュベレイのファンネルを撃ち落としていた。MSとしての性能はジ・Oが優れているため、戦いが長引くにつれ手数の減っていくキュベレイ側が不利となるだろう。「機体のスペックを上げていけば、それがニュータイプ対応機となる」という連邦軍の思想はやはり正しかったといえるだろう。

これがキュベレイおよびジ・O対一般的なMS部隊の戦いであれば、当時の一般生産機のO.S.や機体性能からみてファンネルに対抗するのは難しく、キュベレイの方がジ・Oよりも早く敵部隊を殲滅することができ、「優れた機体」と見ることが出来る。

アレックスが間に合っていたら
その後の歴史が変わっていた？

特にニュータイプ専用機として作られたわけではないRX-78・78・2ガンダムは、パイロットであるアムロ・レイの能力向上に対し機体のキャパシティが不足し、マグネット・コーティングによって機体の反応速度を高めた。アレックスはニュータイプ(アムロ)の搭乗を前提に、マグネット・コーティングをはじめとする機体性能の向上が図られた機体だ。テスト時に破壊されたので当初配備予定だったホワイテベース隊に届くことはなかったが、もしアレックスが実現していたらどのような戦いになったのか。

スペックを比べると、アレックスの推力が目を引く。ガンダムの約3倍であり、MA的な存在であるジオングに近い数値だ。それでいて重量はジオングより圧倒的に軽いため、実質的なパワーウエイトレシオはジオングを大幅に上回る。なおかつ設計段階から組み込まれたマグネット・コーティングにより機体の反応速度は速く、(アムロが乗った際の)機動性・運動性はガンダムとは比較にならないレベルとなる。アレックスのセンサー能力はガンダムとほとんど変わらず、ジオングの10以下だが、ニュータイプのアムロが乗った場合、その数値の差がジオング



■テストパイロットですら満足に扱えないほど先鋭化したガンダムアレックス。アムロならどう乗りこなすか見てみたいところではある。



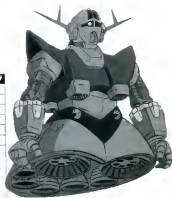
(MATCH No.6)

RX-78NT-1
◀アレックス
VS
MSN-02
ジオング▶

戦いの記録の印象から、特別強い機体というイメージがありません(?)アレックス(ガンダムNT-1)。もし、この機体が破壊されずホワイテベース隊に届けられ、ア・バオア・クー戦でジオングと戦っていたらどうなっていたらだろうか。



★ガンダム相手に相打ちだったことを考えると、ガンダムアレックスが相手ではあっさり撃破されていた可能性も。シャアは運が良かったワ



アレックス	スペック比較	ジオング
18.0m	全高	17.3m
40.0t	本体重量	151.2t
72.5t	全備重量	231.9t
1,420kW	ジェネレーター出力	9,400kW
174,000kg	推力	187,000kg
5,900m	センサー有効半径	81,000m
試機		
頭550mm/バズーカ砲 腕500mm/ドリリング銃 ヒール・ライフル ハイパー・バスター ビーム・サーベル		
新式5連装メガ粒子砲 頭部メガ粒子砲 腕部メガ粒子砲		

に有利に働くかは疑問だ。武装に関してはアレックスは内蔵火器を装備しており手数は増えている。

このようにスペックからは、ガンダムと対等の勝負を演じたジオングがアレックスと戦った場合はかなり不利な状況となる。アレックスが設計の意図通りに性能を発揮したら、ジオングの勝算は薄いと云わざるをえない。だが、「設計の意図通り」というのが少々セモノだ。アレックスの搬入は定期的にア・バオア・クー戦前と、宇宙空間での試験(アレックスは重力下やコロニー内での試験しか行われていない)に合わせて機体調整を入念に行う時間はない。また、アレックスは全備重量から見てもその大推力に見合うほどの推進剤の搭載量も多くないと思われるので、全力で動ける時間も短く、推進剤の使いどころが力尽きる。つまり、パイロットの習熟期間がないことがジオングの勝機のひとつとなる(ジオングも一発勝負の乗り換えだが)。しかし、一年戦争末期の能力開花著しいアムロなら、こういった普通の問題にならない可能性がある(もちろん、アムロはそんな機体のしれない機体に乗れたがらうガンダムで出撃するかもしれないが)。……とありあえず、シャアは奮闘したサイクロプス隊の面々に感謝したほうがよさそうだ。

ニュータイプ 専用機の 武装

Armament

有線サイコミュ式 メガ粒子砲

信頼性は高いが性能的境界があった

代名詞機種 MAN・02ゾウガザ

MAN・03ゾウガザ、ゾウガザやMSN・02ジオングに搭載されていた武装。サイコミュ兵器としてはもっとも初期の部隊に入る。その仕組みは、メガ粒子砲を搭載した砲台（ジオングの場合は脳部）を有線によって制御することで自在に機動させるもの。MAN・08エルメスのビットに対して、サイコミュによる遠隔を介さずともよく、ワイヤーケーブルにより直接的な操作が可能であった。それゆえ使用時における安定性も高かったと思われる。何よりニュータイプ能力が低い、またはなくても操作できるのが利点といえる。さらにメガ粒子砲の動力源も本体から得ら

れるので、砲台自体の構造を単純化でき、重量もビットほど重くならず、総合的な使い勝手は、この時点では有線式のほうが高い可能性もあるだろう。

一方で有線式は、作戦、戦法の内容がケーブルの長さによって左右されるというデメリットも存在し（使用する距離が増すほどに、その取り扱いに関する煩雑さはビットの比ではないだろう）、隠密行動、相手の思いもよらないところからの攻撃という、ニュータイプ専用機のメリットのひとつである戦法に与っては、ある程度の制限を受けることも否めないだろう。

ビット

初期のサイコミュ兵器は、超大型だった！

代名詞機種 MAN・08エルメス

有線サイコミュ式メガ粒子砲と同様、

一般に広く知られるニュータイプ専用機と呼ばれる機体には、サイコミュやバイオ・センサー、サイコ・フレームといった、ニュータイプデバイスが装備されている。

そして、これらの機体の中には、専用武装といえるサイコミュ兵器の類を搭載するものもあった。これらのサイコミュ兵器を紹介するとともに、そのメリット、デメリットも考えてみよう。



初期のニュータイプ専用機用の装備。本体とは独立した存在、いわば無様式の移動砲台であり、サイコミュを使用して遠隔誘導操作を行う。ジオン公国



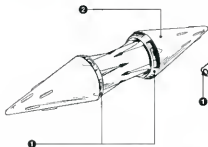
▶有線式サイコミュ兵器は、単にサイコミュとの相性も良いようで、ニュータイプ専用MSではない汎用MSに装備される例も少なくなかった。

軍初期のニュータイプ専用「ビルアーマー」であるMAN・08エルメスの主要兵器として開発された。

エルメス本体に搭載されるサイコミュデバイスは超大型なものであり、機体の全長が84メートルと、モビルスーツの4倍以上ある大きさだった。搭載されるビットも本体に熱核融合炉を内蔵し、自律的に動くためのスラストと燃料、それに制御系の機構等を備えているため、全長8・4メートルという大規模兵器となっている。しかし、このビットは人が搭乘しないため、人体への影響を考えない高機動運動が可能となっている。それに本体には熱核融合炉を積んでいるので、高出力のメガ粒子砲が使用できた。ただし、開発開始時点において対ビルスーツ戦をどの程度考慮していたかは不明だ。

当初、エルメスは敵艦隊に向け、敵

U.C.0105



ファンネル・ミサイル

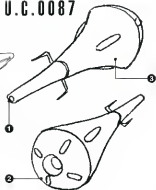
機体種 RX-105 ミガンダム 他

- ① スラスタ
- ② 炸薬、推進剤を内蔵

特徴

ファンネル自体が弾体となるため、ビーム砲口は備えていない。サイコミュを誘導装置として用いているので、命中精度に関しては搭乗者のニュータイプ能力に左右されやすい傾向がある。

U.C.0087



ファンネル

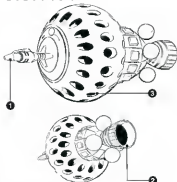
機体種 AMX-004 キュベレイ 他

- ① ビーム砲口
- ② スラスタ
- ③ エネルギーは充電式

特徴

ビットに比べてサイズは小型化される。ジェネレーターは内蔵していないので、ビームの弾数や稼働時間には制限あり。エネルギーの供給は母体MSから行われる。

U.C.0079



ビット

機体種 MAN-08 エルメス

- ① メガ粒子砲口
- ② スラスタ
- ③ ジェネレーターを内蔵

特徴

動力源であるジェネレーターや推進剤などをすべて内蔵しているため、本体サイズは非常に大型。しかし無人機ゆえ、かなりの高機動で動かすことができる。

が予想もしない遠距離のアウトレンジからのスタンダードオファ攻撃（相手の射程外からの攻撃）を主眼に開発されたと考えられる（初陣はそのように使用されている）。

結果的に本機の戦い方の代表ともいえるオールレンジ攻撃は、いわば運用中における副産物的なものであるといつてもいいだろう。しかし、このオールレンジ攻撃に固執したこと自体が、ニュータイプ専用機の兵器開発をかなり遅んだものにした可能性もまた、否定できないだろう。

ファンネル

U.C.0080年代におけるサイコミュ兵器の代表

機体種 AMX-004 キュベレイ、MSN-04 サビー、NZ-66 ガンダム試作機 他

一年戦争後に開発されたビットに変わるサイコミュ兵器の決定版。正確にはファンネル、ビットともされるが、ファンネル自体が言葉として誤用や煙突といった意味があるため、見かけからそう呼ばれ、それが無線誘導式サイコミュ兵器の名称（俗称）として知られるようになり、定着していったと思われる。

従来型のビットと違う点は、本体にジェネレーターなどのエネルギー源を搭載していないこと。これはエネルギーCAP技術の向上により、モビルスーツのビーム兵器（メガ粒子砲）の

エネルギーの供給が、ジェネレーターの直接供給からEパックによる交換方式へ変更されたことと不可分である。この技術の登場により、ビーム兵器そのものの大幅な小型化が可能となったことが挙げられる。ファンネルそのものの大きさは、18メートル級の通常サイズのモビルスーツに10基以上搭載可能というほどであった（最大30基）。

しかし、ファンネルは通常モビルスーツの扱うビーム・ライフルよりも小型であり、その中に移動用のスラスタまで内蔵しており、ビームの威力や弾数に限界がある可能性も考えられる。威力的にはビーム・ライフル並みを確保していたため、稼働時間などの性能面で、それなりに制限を受けることはあっただろう。量産型キュベレイやクシャトリヤが数多くのファンネルを搭載しているのは、大量の準備・再充電のローテーション用も含み、ということだろう。

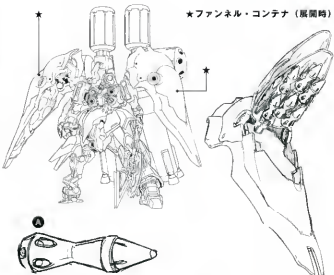
フィン・ファンネル

本機をサポートするためのファンネル

機体種 RX-93 ヴァガンダム

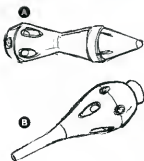
地球連邦軍のAMX-004・レイがRX-93 ヴァガンダムを開発する際、その武装として同時に採用されたファンネルといわれるジオン公国系のファンネルとは異なるコンセプトで開発された。

★ファンネル・コンテナ（展開時）



クシャトリヤ・リベアードの改造ファンネル

クシャトリヤ・リベアードには、対ニュータイプ用装置（バシィ・ノルンのNT-Dやローゼン・ズールのサイコ・ジャマーなど）を備えた勲MSとの連動性を想定し、ファンネルの先端部分をビーム砲ではなく、グレネード弾に換装した改造ファンネルを搭載していた（Aが改造ファンネル、Bが通常タイプ）。



最大の特徴としては、モビルスーツ塔載用としては極めて大型で、可変機構を内蔵した板状という独特の形状だ。可変機構はモビルスーツへの搭載上必要だったのだらう。また、形状面でAMBACも可能ともいわれるが、実際にどの程度バインダー的な効果があるかは不明だ。むしろ、フィン・ファンネルの利点は、ビットのように核融合炉を搭載しているため、充電式のフ

アンネルよりも長い稼働時間を得られると考えるのが妥当だろう。もう一つ、フィン・ファンネルの特徴として、メガ粒子をフィールド状に自在に形成できること。これは集束すればビームにもなるし、バリアとしても機能する。攻防一体の兵器といえるだろう。さらにリガンダムはあくまで本体が携行するビーム・ライフルが主兵器のため、フィン・ファンネルは

戦術オプションの一つでしかなく、いわば本機の能力拡張の手助けをするサブ・ウェポンという扱いだ。こうした新しいコンセプトから窺えるのは、アムロ・レイはオールレンジ攻撃の効果自体を、それほど重要視していなかった、ということだろう。

インコム

一般兵にも
オールレンジ攻撃を！

ORX・013ガンダムEX-
AMS・013ドビオン・ウルフ
YAMS・013ローゼン・ズール

初期の有線サイココミュ式移動砲台のコンセプトを推し進め、非ニュータイプパイロットでもオールレンジ攻撃を可能にするために開発された兵器。ワイヤーケーブルに連結された砲台を撃ち出し、中継器をワイヤー上に固定し、先端の砲台の進行方向を変更することで、様々な角度からの砲撃が可能となる。その制御は準サイココミュと呼ばれるデバイスで行われ、実質的にはコンピュータ制御でもオールレンジ攻撃が可能という、まさに夢の兵器のように思えるが、搭載する機体は意外と多くはない。その理由として、コンピュータによる準サイココミュ制御の動きが単純で、搭載数に限りがあるなどの欠点も指摘されるが、一対一の対決に近い状況でオールレンジ攻撃が必

要とされるケースそのものが少なかったことも、有線サイココミュ兵器が減少した要因だろう。そもそも事前に「敵を感じる」ことができ、一対一の戦いに陥りがちなニュータイプ同士の戦いが、戦場において特異なものであったことを、逆説的に証明しているのかもしれない。サイコ・ジャマーを搭載し、アンチニュータイプ機として存在するYAMS・132ローゼン・ズールがこのインコムを搭載していたことは、本機の性格上納得できるものだろう。

ただ、宇宙世紀0150年代に登場した、ザンスカール帝国のコンテリオシリーズが装備する、ショット・クローなど有線式兵器があるので、技術面では何らかの継承がされたと考えることが出来る。

レフレクター・ビット／リフレクター・ビット

大出力ビームを効率よく使う

MSX-000オズゴ、グザンMk.II、AMBAC-Xアプソロン

名称は少々異なるが、兵器としての仕組みそのものは、サイコ・ガンダムMk.IIのレフレクター・ビットと、シャンプロに搭載されるいわゆるアプソロン・ビットは同じ系統といえるだろう。どちらもビット自体にビーム砲を搭載せず、反射板を備え、母体である本機から放ったビームを反射板でリレーし、極近い偏向・拡散して照射する。獲

ファンネル・コンテナの形状の違い



AMX 004B
量産型キュベレイ



NZ 100
クイン・マンサ



MSN 003
ヤクト・ドーガ



MSN 04
サザビー



NZ-666
クシャトリヤ



数の子機を湧空させて攻撃を行う。そもそもファンネル自体は大気圏中の使用をあまり意識しておらず、何とか使えるものの、もとは宇宙用兵器であり、形状、特性的に重力や空気の影響を完全に排除して制御するのが難しい兵器でもあった。

そのため、簡単な仕組みで飛行機能に特化し、最大の効果を上げようと考えられたのが、レフレクター・ビットやリフレクター・ビットということだ。大型機の大出力ビームを有効利用するために考えられた、面白い発想のデバイスといえる。

ファンネル・ミサイル

先相害りの
スタンドオフ兵器

式名：RX-104F
タイプ：ミサイル

宇宙世紀0100年代初頭に実戦投入されていたサイコミュ兵器。文字通りファンネルを砲台としてではなく従来兵器であるミサイルとして使用した

ただし、その制御はかなり複雑であることが想像され、気流の風向き、風速などにも大きく左右されるはずで、精密射撃など、細かい作戦にはやらない向きだったのではないだろうか。

もの。つまり、レーダーや赤外線などではなく感応波を利用した精密誘導兵器で、操縦者の思念により操作され、目的に命中させる。

ミノフスキー粒子が戦場に投入されて以後、通距離兵器として発達してきたファンネルだが、開発から20年が経ち、旧世紀のミサイルのコンセプトにそのまま戻った。その背景は様々な可能性が考えられる。ひとつは、通常兵器（モビルスーツ）の対ニュータイプ機の対応法が確立したこと。つまり、オールレンジ攻撃などの特殊な戦法があまり役に立たなくなってきたという

ことだ（このあたりは「機動戦士ガンダムUC」で断片的に描かれている）。もうひとつはサイコミュの技術進歩により、使い捨て兵器にできるほど、コストが妥当なものになったということ（といっても現在のミサイルでも一発数千円はするが）も考えるべきだろう。

ニュータイプ専用機の武器は、一巡りしてようやく本来のシンプンな役目に戻った。ひょっとしたら、この時代以降のミサイルの多くは、実はファンネル・ミサイル的なものかもしれない、と考えても面白いだろう。



ニュータイプ専用機 概論

宇宙世紀におけるサイコミュ兵器の興亡

宇宙世紀における兵器開発の歴史において、ある特定の時代にのみ発達し、短い期間で消えてしまったものがある。それは、サイコミュに代表されるニュータイプデバイスである。そしてそれらを搭載した機体はニュータイプ専用機とも呼ばれた。

一般的にこのニュータイプ専用機のイメージといえば、「一騎当千」というようなものであるのかもしれない。たった一機で複数の、時には数十機の敵を相手にすることもできた。

ある意味、兵器としてそれは理想である。しかし、ニュータイプ専用機は宇宙世紀0079年に登場し、宇宙世紀0100年代にはほとんど姿を見なくなった。兵器として理想的であるはずのこのニュータイプ専用機が、瞬く間に消えてしまったのはなぜだろうか。

ミノフスキー粒子があれはこそサイコミュ

兵器としてのニュータイプ専用機を大別すると、大きく二つに分けることができる。ひとつは、ファンネル、ビッツに代表される、サイコミュ兵器を前面に押し出したもの、もう一方はサイコミュ・デバイス、もしくはその他の特殊な機構を通常兵器の能力拡張に使用したものである。全体的にはジオン公国軍側は「一騎当千」的な、サイコミュ兵器系の機体を、地球連邦軍側は機体制御系に用いる例が多い。これは、前者が投機的で、後者は堅実と捉えることもでき、双方の事情を考えると当然といえるものかもしれない。

最初にニュータイプ専用機という発想が生まれたのは、人間の脳から感応波というものが出されているという発見からはじまる。その感応波は機械により読み取ることで、デジタル信号化して機器などを動かすことが可能であった。これこそがサイ・コミュニケーションター、通称サイコミュである。

もしも、このサイコミュと感応波が21世紀の現代社会に見えたらどうだろうか？ 実是对して役に立たないかもしれない。それは、そのほとんどが電波などを使う機器で代用できるからだ。もし活用できるとしたら、ある程度の意思により操作できる前提

ならば、たとえば義足や義肢、あるいは補聴器など、パーソナルモビリティなどの分野における可能性が考えられるかもしれない。

しかし、感応波自体の個人差は大きく、おそらくサイコミュを利用した機器は扱える人間は限られるだろう。それゆえ工業製品として考えても、事業自体を採算ベースに乗せるのは難しいだろう（脳波や神経パルスの方がまだ可能性が高い）。

ではなぜその感応波とサイコミュが兵器へ転用されたのだろうか。それはモビルスーツと同様である。つまり、ミノフスキー粒子の登場による、戦場の様相の変化によるものだ。

ご存知の通り、ミノフスキー粒子は電波などに干渉する。そして、これにより宇宙世紀の戦場の様相は一変する。それまでレーダー波などを利用した、サイリなどとの精密誘導兵器が使用不可能になり、相手を目視して戦うという、戦いのレベルが一気に近代の第二次世界大戦戦術以前に引き戻されてしまったのだ。

第二次大戦時の航空機がせいぜい時速600キロ前後の速度だったのに対して、宇宙時代の宇宙世紀での無重量空間での戦闘は秒速数千キロに達することもあり、むしろかつての時代より、よりシビアな戦いが繰り広げられたことだろう。

遠距離兵器の一種であるサイコミュ

さて、そんなミノフスキー粒子全盛時代でも、兵器に求められる「最高のものとは何か？」という命題に対する答えは、他の時代とあまり変わりないだろう。それは、なるべく安全圏から敵を倒せること。すなわち遠距離からのアウトレンジ攻撃である。

兵器の歴史を紐解いても、実は重要なのは遠距離兵器だ。古代・近世まで



◆ミノフスキー粒子砲は、遠距離から敵機を攻撃し、遠距離で敵機の燃料タンクやエンジンなどを破壊する。また、サイコミュを誘発して敵機のサイコミュ装置を破壊する。ミノフスキー粒子砲は、遠距離から敵機を攻撃し、遠距離で敵機の燃料タンクやエンジンなどを破壊する。また、サイコミュを誘発して敵機のサイコミュ装置を破壊する。

の戦いにおいて、距離別の兵器の優位性といえは弓矢・槍・剣という順だ。近世になると弓が銃に変わり、銃が大型化する中で射撃距離も長くなり（砲）、測距儀などの照準機器の発達を促した。いずれにせよ、遠く離れた所から敵を倒すことは安全かつ確実であり、白兵戦Ⅱ「斬り合い」といった近接戦闘時のリスクの高い方法は、最後の手段ともいえるだろう。そして、敵よりも長い射撃距離を持つことは、かなり有利にコトを進べることでもあった。

ミノフスキー粒子時代の戦いについてもそれは同じであり、戦いのプロセスとしては、戦艦などの長距離砲やミサイル（電子誘導は射撃をしない。単なるロケット砲）でまずは射撃をし、そのあとでミノフスキー粒子に特化したモビルスーツの出番となる。これに際しても、近・中距離用の火器（ザク・マシンガンやビームライフル、遠距離、大規模目的用の重火器（ザク・バズーカなど）が用意され、やはり近接戦は手持ちの火器がなくなった際の最終手段であることがわかる。

このような状況下で、それまでの精密誘導ミサイルの代替となる、ミノフスキー粒子の影響を受けず、相手より遠隔地から攻撃でき、かつ高い命中精度を誇るスタンドオフ兵器があれば、戦局は一気に有利になるのは自明の理

であった。そして、それを実現化しようとしたのが、ジオン公国軍におけるサイコミュ兵器、すなわちニュータイプ専用機なのだ。

初期のサイコミュ兵器は移動砲台でしかなかった！

最初のサイコミュを搭載した兵器は、いわば移動砲台であった。サイコミュデバイスを搭載した母機に数多くの砲台を取り付けることで、対峙する敵を一度に殲滅しようとしていた。

初期サイコミュ装置は大型で、兵器化するのに不利な点もあったが、結果的にサイコミュ装置を搭載するための機体の大型化は、本体の容積比も大きくなるということ、高出力の熱核融合炉を乗せられるし、それを武器に利用しメカ粒子砲の高出力化も可能という副産物があったはずだ。

かくして有線式のブラウ・ブローにせよ、無線式のエルメスにせよ、初期のニュータイプ専用機は大型で多くの砲台を備えるというものになった。その目的は、もちろん敵艦隊の殲滅である。敵から離れた位置からの攻撃効果は、ララァ・スン少尉の初陣でも証明された通りである。ただ、惜しむらくはその時点で超遠距離攻撃はパイロットに多大な負担がかかった。

これにより一年戦争時のニュータイプ専用機は中距離以下のレンジから同

◆一年戦争後、サイコミュ兵器は分派していく。超遠距離攻撃兵器として開発を推し進めた旧ジオン公国軍重兵のアクシズ（ネオ・ジオン）派と、サイコミュ兵器の開発そのものは後発ながら、MSにおける機動性向上用のデバイスとして組み込む連邦軍派だ。



様の攻撃をする機体となり、大柄な機体に反して対モビルスーツ戦も意識しなればならぬという中途半端な存在になってしまったのは否めない。

ただし、それ自体はあまり問題ではなかった。それは、各々の機体の砲台の機動性は、無人であるがゆえにモビルスーツより限界性能は高いはずで、また敵の攻撃も察知能力の高いニュータイプであれば回避できる可能性が高かっただろうからだ。敵の見えない一から敵に先んじて攻撃できるのは、まさにオールレンジ攻撃の原型だろう。

一般的に現代の航空戦（その他の戦いの多くも）においてももっとも重要なのは、いかに敵を速く発見するかである。敵の発見が速いと、自ずと有利なポジションを得られ、それだけで勝つ

たも当然である。さらに敵よりも長い射程のミサイルがあれば、全く危険がなく敵を倒すことが可能だ。現代戦では、早期警戒機などによる、レーダーの監視網でそれを実現しているが、レーダー実用化前でも同じことで、目視により素早く敵を発見し、いかに有利なボジションを取るかが重要だった。そしてそれは宇宙世紀でも同様だろう。宇宙でのモビルスーツ戦で、いかに速く敵を発見し、有利なボジションから敵を攻撃するかはもつとも重要な戦法なのだ。だから、ニュータイプ専用機の常套句といえる、オールレンジ攻撃は四方八方から射撃するというわけではなく、有利なボジションから攻撃するということではないだろうか。

敵のニュータイプ登場が誤算の始まりだった!?

ただひとつの誤算は、地球連邦軍にもニュータイプパイロットが存在した点だ。アムロ・レイ少尉の能力は、ジオン公国軍のニュータイプ専用機が繰り出す高機動の移動砲台に対応できるほどで、彼の反応速度や高い操縦技術に対応するため、性能が不足しつつあったガンダムにマグネット・コーティングという機動力の底上げをする技術が施されるほどだった。

ニュータイプの戦場におけるもつとも重要な要素、それは「敵を感じる」



↑地球連邦軍ではニュータイプの数を入れる目論見として強化人間を造り上げた。もっともグリプス戦役前では、真のニュータイプと称されるアムロ・レイを監視していた事実から読み、どこまでニュータイプ専用機に事柄を置いていたかは疑問が残るところだ。



↑ニュータイプの数そのもの不足は、アクシズ（ネオ・ジオン）でも変わらず、強化人間をクローニングするという、かなり卑しい読みがなされていた。神意の助力からして「脅に服は要えられない」ということだろうか。そこに以て至る政治体系が垣間見える。

ことだろう。モビルスーツのセンサー有効範囲のはるかに外の敵、または待ち伏せしている敵の存在を、より早く感じ、その攻撃を事前に察知し避ける。先述のアムロ少尉は、その能力が高かったからこそ、数多くの敵を撃墜することが可能だったのだ（初期はモビルスーツの性能に助けられていた）。一方でジオン公国軍のラファ・スナッ尉の場合も、その初陣から問題は発生したものの、数多くの敵艦を撃滅してみせた。まさにニュータイプ能力は、ある程度の規模の戦場の趨勢を根こそぎ変える可能性を極めていた。

では、敵味方の双方にニュータイプがいた場合はどうなるのか。お互い敵の動きを「感じる」ことができたため、ボジションの有利不利はないかもしれ

ない。それこそ互いの攻撃を「先読みする」連続だろう。つまりニュータイプ同士の場合は、どうなっても修羅場になるのだ。

四方八方からのビーム攻撃を連続で交わす状況では、ふとした気の緩み、一瞬の対応の遅れが命取りになる。ゆえに敵にニュータイプがいる場合、自軍のニュータイプをあてかばは、カウンターとしての効果は高いだろう。

結果的に一年戦争では、地球連邦軍のニュータイプ兵士アムロ・レイの前に、ジオン公国軍が開発したニュータイプ専用機はことごとく敗れ去った。しかしこの時点では、サイコミュ兵器は、ことニュータイプ同士の戦いにおいては、まだその全能力（真価）を発揮できない状況だったといえるだろう。

方向性が分派！ その後のニュータイプ専用機

そして一年戦争後は、サイコミュ兵器をより戦場で扱いやすい形にすることを主眼に技術開発は進む。

ジオン公国軍の反終戦派が落ち延びた小惑星アクシズでは、サイコミュとそれに伴う遠隔操作砲台、ビット（後のフアンネル）の小型化を中心に、より通常サイスのモビルスーツの大きさに収めるよう開発を進めた。

これに対し技術的には追随する形の地球連邦軍側は、入手したジオン公国側のテクノロジを模倣しながら、サイコミュを機体制御に用いるため、パイオ・センサーなどのサイコミュデバイスの開発を試みている。そして、究極的には人間を兵器デバイス化する一種の人工ニュータイプ「強化人間の研究」といって、人権を全く無視する手法も半ば公然と試みられていた。

そして、宇宙世紀0087年からのグリプス戦役、続く第一次、第二次ネオ・ジオン戦争において、数多くのニュータイプ専用機が登場した。これは、一年戦争後の軍艦の時代においても、通常のモビルスーツ開発においても一騎当千的な高性能機が求められていたため、時代の要求に合致していた側面が強い。

サイコミュ兵器が 下火になった理由とは!?

しかし、これら紛争レベルの戦争を頂点に、ニュータイプ機は急速にその勢力が衰え、宇宙世紀0100年代にはほとんど下火になってしまふ。

それはなぜか？ おそらくは、ニュータイプと関連兵器は戦場において絶大な威力があったものの、デメリットも大きかったということだ。

ひとつは数の充足が難しかったこと。ニュータイプ兵は戦場の中心になり得るが、そもそも絶対数が不足しており、その確保が難しく「ひと時代に数人」というレベルでは少なすぎる。

それらの補強策で考案されたであろう強化人間にしても、管理が難しく精神的にも不安定という副産物がついて回り、戦場で安定供給できる計算が立たない場合があった。また、存在が露見すれば、人権問題や国際問題へ発展することも考慮せねばならず、戦略の中

心として考え難い存在なのは明白だ。

たとえ人材が十分でも、先の述べたようにニュータイプへの「敵を感じる」力は問題である。戦場においてニュータイプ同士は互いを認識して引き合う性質がある。つまりニュータイプを戦線へ投入した場合、磁石のように引かれ合い戦線に突入する。これは人材、機材共に通常の数倍、数十倍の投資をしたものが、50%近くの確率で損失する可能性を示している。

また、たとえ痛み分けでも、相手のニュータイプの活躍を封じるという形でしか戦場には寄与できない。要するにニュータイプとサイコミュ兵器は、費用対効果が低いのである。

さらに、宇宙世紀0090年代になると、ファンネルなどのサイコミュ兵器に對して、総体的な対策法が考案され、それらが確立しつつあった。こうした対ニュータイプへの対処法の出現も、ニュータイプ専用機の開発衰退に拍車をかけた。

好例として、宇宙世紀0096年のインダストリアル7における「袖付き」のクシャトリヤと連邦軍の特殊部隊のジェガン小隊との戦闘では(機動戦士ガンダムUC) e p 1、スタークジェガン以下3機は、対ニュータイプ対策と訓練を行っていたとみえ、あと少しでマリダー・クルスのクシャトリヤを撃墜するまで迫り詰めていた。

この事象からもニュータイプ専用機の時代は終わりが近づいたことがわかる。一方で、ネオ・ジオン勢力でも対サイコミュ兵器用デバイス「サイコ・ジャマー」を実戦に投入した。

「機体を構成するフレームにサイコミュチップを誘込む新技術、サイコ・フレームに關しては、モビルスーツ単機で大気圏に落ちようとする小惑星アクシズを押し返した「アクシズ・ショック」という、信じがたい現象を引き起こすなど、まだ可能性があったものの、「UC計画」以後は、あまり積極的な投資が行われなくなった。その背景には、政治的な駆け引きがあったのは当然として、投資に見合う使用法がなかった、とも考えられる。



こうしてサイコミュ兵器は、宇宙世紀0100年の初頭に、ファンネル・ミサイルという形で落ち着くことになる。なんのことはない、これはミサイルの誘導制御装置をサイコミュで代替

しただけのものである。20年以上の歳月をかけ、ようやくコスト的にも使い捨てにできるようになったに過ぎない。この後、サイコミュ兵器の類はサイコミュと呼ばれず、このようなミサイルとして生き延びたのか、それとも時代の闇に消えたのかは判然としませんが、少なくとも、それ自身が特殊である時代は、終わりを告げたことは間違いない。

この生体兵器ユニットとして扱われるニュータイプが、ジオン・ダイクンの提唱したニュータイプと同様の存在であるかを、論議の別れるところである。そもそも、一年戦争の代表的なニュータイプのアムロ・レイ、フラア・スンは、ともに地球生まれの地球育ちであるから、この2人に関しては、ダイクンの言うようなニュータイプII人の革新である、というのは否定されるべきだろう。

もっとも、ダイクンのニュータイプ論は、現実的な背景も科学的根拠も希薄で、むしろ「産げられた民」と自認するスーパースノイドに、革命の思想的根拠を与える、「根拠の無い予言」でしかなかったことを考えると、思想としてのニュータイプも、生体兵器としてのニュータイプも、その言葉自体が宇宙世紀0100年以降には「多くの人に忘れ去られた」という意味では、大して要わらないのかもしれない。

宇宙世紀 0150年代のMS

ザンスカール帝国と連邦軍が衝突した宇宙世紀0150年代では、ニュータイプという存在そのものが忘れ去られているようだ(それに代わるのがサイキッカー鎧力者だ)。たゞMSの場合、ガンカオのように背中へのバック・エンジン・ユニットを遠隔操作する機体も開発されていることから、サイコミュデバイスそのものの技術がなくなったとは言い難いかもしれない。



ZMT-8288
ゲンガオ

その戦略・戦術的な意義とは!?

ジオン独立戦争は
革新的技術開発とともに

後に「一年戦争」といわれるジオン独立戦争において、ジオン公国軍の開発に向かう過程での課題は、小さい国力、少ない兵力でいかに勝利するか、という点であった。そもそも、ジオン公国の国力は、地球連邦政府と事を持ちえるのは論外といえるほど開きがあり、戦争という手段に訴えるには、この国力差を埋めることができる革新的イノベーションの登場が必須であったといっていたらう。そして、実際にいくつかの革新的発明をもって、以降の戦争の様相を変えてしまうことになる。

この革新的イノベーションのもつとも重要なのはミノフスキー粒子である。リーダーや電子機器を無効にする発見を「最初に」得られたことこそが、ジオン公国が一見無謀にも見える戦争という手段に出る決定打と言って過言ではない。なかで、ただリーダーなどを無効にするだけでは足りず、その状況を利用した（つまり、相手に対抗策がない）新兵器の開発とセットで運用

用してはじめて、圧倒的数の差を覆すことができるのだ。

こうして開発されたのが、従来兵器に比べれば近接戦用の兵器といえる機動兵器、モビルスーツだ。これは遠距離精密攻撃が無効になった戦場で、近距離の機動性が最優先されるという考えのもとで開発されており、極めてオーソドックスな手法といっている。これと並行して、艦艇などに搭載する大火力のメガ粒子砲や、もはや精密誘導といえる一番の特徴を奪われたものの、遠距離兵器としては有効だったミサイル（正確にはロケット砲）の組み合わせで、戦闘は行われることとなった。

そんな中、ミノフスキー粒子下でも従来の精密誘導兵器と同様の効果や能力を持つ兵器があれば、それは理想といえる。敵の有効射程外から、しかも精密攻撃、すなわちアウトレンジ攻撃が可能ということに他ならず、自軍の被害を出さずに勝利できるからだ。

ジオン公国はそうした理想的な兵器開発にも力を入れており、その中のひとつの方法論として存在した、感度減いわれるサイ・コミュニケーション（サ

イ・コム）を兵器に応用した、ニュータイプ兵器の実用化に熱心だった。そして、一年戦争末期には何と戦艦に投入するのが可能になったのである。

では、ニュータイプ兵器で構想されたこと、実践されたこととはどのようなものだったのだろうか。

理想的兵器として誕生したサイ・コム兵器とは

ジオン公国軍のニュータイプ兵器の戦術思想は、大まかに分けて2つの要素から成立していると考えられる。

ひとつは、先に述べたように、ある種の精密誘導兵器であること。つまり、ビットなどにはファンネルと呼ばれるようになる、無線誘導式移動砲台を隠密裏に敵に近づけ、砲撃によりミサイルなどの精密誘導兵器と同等の命中率を得ようというもの。

これはいわば、戦争において片方が精密誘導兵器を持ち、片方が持たない戦いということで、場合によつては一方的な結果を得られる可能性がある。これは、理想的な兵器といつてよく、ミノフスキー粒子下の戦術を根

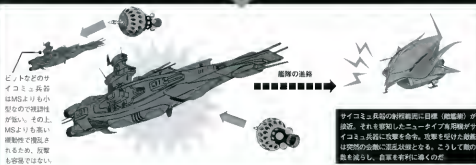
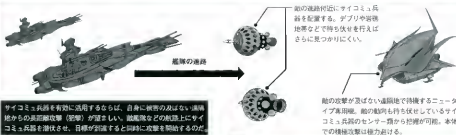
拠にして僅か20年程度で消えてしまったニュータイプ兵器。当初はザビ家が直接管理するほど期待を集めたが、結局は世に何かを残すことなく歴史の闇へと消えていった。ではニュータイプ専用機の戦術、戦術的価値はどのように構築され、変化し、消えていったのだろうか。

底から揺るがす可能性すらあった。

もちろん、モビルスーツこそがミノフスキー粒子下の戦闘に特化し開発された兵器であり、それこそがジオン公国の本命であったが、敵とある程度の距離を詰めて戦わねばならないという欠点もあった。これは従来兵器にはない戦術で、極めて効果も高かった。その分、敵に接近することから、被害も莫大になる可能性を含んでいた。

実際、一年戦争の初期の戦いにおける撃退比率、いわゆるキルレシオにおいてモビルスーツを投入した効果は高かったが、国力が小さいジオン公国軍にとつて、戦闘における自陣営の消耗率、総体的な損害数は無視できない数だった。また、電撃的に作戦を成功させた、短期間で戦争を終わらせる目算のジオン公国だったが、長期戦となることを余儀なくされたことも計算外であった。それは、いずれ地球連邦軍もモビルスーツを投入してくることは明白であり、勝利にはさらなるイノベーション、つまりニュータイプ兵器の実戦投入には、かなりの期待がかけられたであろうことは想像に難くない。

理想的なサイコミュ兵器の攻撃シチュエーション



一方、ジオン公国軍がニュータイプ兵器の開発に熱心だったのも一つの理由は、一機で多数の機体をおペレーションできることだ。ニュータイプ兵器が搭載するサイコミュ兵器は有線式、無線式を問わず移動砲台であり、一度に複数の目標に対して使用できた。その原理は電子制御を人の脳（サイコミュ）で行うということでもあった。

これは、一騎当千の不敵な戦士が、移動砲台の数だけいるのと同じで、地球連邦軍よりも人的、物的資源の少ないジオン公国にとって、喉から手が出るほど欲しいものだった。つまり、一人のニュータイプ兵士の育成は、複数の同等の兵士を育成することと同意義であり、数的な不利を克服できるのだ。

また、メガ粒子砲だけを備えた移動砲台ならば、戦場においてもモビルスーツよりも小型で、被発見率は低くなり、無人のため機動限界も高く、結果的にモビルスーツでの戦闘よりも、はるかにリスクが少なく済むのだ。

本来は超遠距離兵器!? ニュータイプ兵器の真実

ニュータイプ兵器の基本攻撃は、アウトレンジから、安全・確実に敵の数を減らすことにあるだろう。その場合の理想的戦術は、おそく待ち伏せ攻撃でいい。つまり進軍して待ち伏せする敵の航路上で待ち伏せし、見えない敵、として攻撃、あわよくば全滅させるのだ。

少しでも敵の数を事前に減らしておけば、結果的に決着をつけるべき会戦において、より有利な立場で臨める。そして、ニュータイプ兵器部隊の数が増えれば、倒せる敵の数も増える。つまり、積極的な攻撃兵器というのがニュータイプ兵器の姿なのである。それゆえ、最初は信頼性確保の観点から、有線誘導式ではじまったが、すぐに無線誘導式になるのは当然の流れといえた。攻撃距離が開けば開くほど有利な条件となるからだ。

オールレンジ攻撃は苦肉の策でしかなかった!?

そしてニュータイプ兵器といえは、まず浮かぶのがオールレンジ攻撃だ。だが、実はこのオールレンジ攻撃、ある特定の状況を除けば、あまり意味のない戦法なのだ。それは、本来、見えない敵、であるはずのビットなどにとって、敵の後ろから攻撃すること自体にあまり意味がないからだ。ではなぜそのような戦法が蔓延したのだろうか。

初期のニュータイプ兵器、ララァ・スン少尉が搭乘したM.A.N. 08エルメスにおける無線誘導式サイコミュ兵器、ビットの実験において、超長距離からの攻撃で敵艦の撃破に成功したものの、ララァ少尉への負担が大きいの



●熱鬧い、われるような、オールレンジ攻撃はニュータイプ同士の間戦にのみ有効打足りえる戦法だ。しかし、白戦と重なるように接近されると攻撃するのも難しい。一年戦争のア・バオア・ウー戦では、オールレンジ攻撃を繰り出すジオングにガンダムはこの方法で爆撃し攻撃を封じた。

とが判明し、その結果ある程度、中距離からの攻撃に限定せざるを得なくなつた。

この事例はニュータイプ兵器の開発計画では大きな後退であつた。だが、致命的といえるほどのものではなく、引き続き作戦は継続されている。

しかし、中距離域での戦いにおいて、思わぬ事態が発生する。それは敵性ニュータイプとの遭遇戦である。これは相手の盾がない彼方から攻撃するサイコミュ兵器の特性からすれば、本来考えにくい出来事であつた。

こうした戦況における有利不利は明らかだつた。サイコミュ搭載戦機であるMAN・08エルメスは大型で重量も大きく、少なくとも格闘戦には向かない。一方で地球連邦軍のニュータイプが搭乘するRX-78ガンダムは一年戦争随一の機動性を誇つてゐた。そのまま最

低限の武装しかないエルメスが一對一の戦闘を行うのは不利であつた。そのため苦肉の策として、ビットを随衛兵器として使用したのが、本格的なオールレンジ攻撃の始まりだろう。

先にも述べたが、オールレンジ攻撃とは、特定の状況、つまり一對一の戦闘以外あまり向かない戦法だ。混戦時に行はれ流れ弾が味方にも飛び、いらぬ被害を引き起こしかねない。また、そうした被害を避けるために自ら自機

の射撃制限や機動は非常に効率が悪い。ニュータイプ兵器として最大の誤算は、戦場におけるニュータイプは、他のニュータイプを感じ取つてしまうことだ。オールレンジ攻撃は、互いに敵を感じ知しやすく、一對一の戦いになり、初めて有効な戦法だ。

むしろ、後の時代には、ニュータイプ専用機は、敵のニュータイプ専用機に奪える、ということが必須となつていく。そのため、オールレンジ攻撃もさらに磨かれていくことになる。

ニュータイプ兵器は、MSN-02ジオングにおいて、当時のモビルスーツと同等に近い大きさにまで小型化されてはいるが、技術面はまだ未熟で砲台は有線式にならざるを得ず、さらに移動砲台の数が少なく、機動性においても、大型で重いはいかんともしがたく、スラスター推力を極端に大きく

することで縦方向の機動性を確保するという、モビルアーミー的な特性の機体となつた。

実際の戦闘結果では、ジオングは地球連邦軍のガンダムと相打ちに持ち込むことができた。これで2敗1引き分け。この時代における移動砲台型サイコミュ兵器の不利益は明らかであつた。

アクシズが続くを得ない ニュータイプ兵器開発

一年戦争以後、アクシズ(ネオ・ジオン)の勢力は、依然としてニュータイプ専用機の開発に熱心だつたが、搭載するサイコミュ兵器自体の小型化は必須条件だつた。そして旧ジオン公園の技術者は、18メートル級モビルスーツにサイコミュ兵器を搭載することを最大の目標としていた。

これは、戦場で敵性ニュータイプ機と遭遇する可能性が高い以上、対ニュータイプ戦を想定しなければならなかつたことと、圧倒的に数の少ないアクシズにとって、ニュータイプ兵器による数の補填は最重要課題だつたからだ。この命懸けに対しての一つの解答は、ビーム兵器のEバック方式の技術が確立し一般的になって得られた。これにより移動砲台の本体に核融合炉搭載の必要がなくなり、ビットはファンネルへと移行する(とはいへビットという名称はその後も残つていて、次第に境



●第二次ネオ・ジオン戦争の頃になると、ニュータイプ専用機の運用も見直され機動的攻撃及部から一種の随衛兵器へと転身している。搭載ファンネルの数が減ったことも運用面を見直してのことなのだろう。サイコミュ兵器に代しては量より質が大事ということか。

界が曖昧になっていく。

宇宙世紀0087年のグリプス戦役から宇宙世紀0088年の第一次ネオ・ジオン戦争にかけては、ニュータイプ専用機の開発が盛んになる。特にアクシズがネオ・ジオンと名乗るようになってからは、ニュータイプ専用機は同組織におけるモビルスーツ戦の支柱の一つといえ、ファンネルの搭載数は上げるだけでなく、人工ニュータイプを積極的に製造する「強化人間」というプログラムにも重点を置き、さらに一般兵でもサイコミュ兵器を扱える機能の開発にも熱心している。

この一般兵向けのサイコミュ兵器「準サイコミュ兵器」の開発に関しても積極的で、ニュータイプが少なく、精神的に情緒不安定になりがちな強化人間に頼らざるを得ない実情を打破するためにも、その実用化は急務だつたはずで



■宇宙世紀0100年以降は、有線式、無線式を問わずサイコミュ兵器そのものがなくなっただけではなく、製作場や実験場などで用いられるケースは少ない。クロスボーン・バンガードのラフレシアなどは有線式サイコミュ兵器の機体ともいえる。テンタクララー、ロッドを多数演習する。

ある（こうしたニュータイプ人材が恒常的に不足という点では連邦軍も似通っている）。

おそらく、ネオ・ジオンの戦術思想の基本にあったのは、NZ・000クイン・マンサを中心にAMX・004G量産型キュベレイで構成されたニュータイプ部隊と、それを補完するAMX・014ドベン・ウルフなどの一般兵用の準ニュータイプ兵器を兵力の中心とする戦略だろう。

ニュータイプ（強化人間）が多数存在すれば、敵性ニュータイプとの交感も最低限に抑えられる、もしくは勝てるも考えたのかも知れない。

しかし、おそらく、このファンネル多搭載方式もある種の無理があつただろう。何しろ、ジェネレーターはモビルスーツサイズである以上、出力限界がある。その中である程度のエネルギー

をファンネルのチャージへ振り分ければ、本体の性能の限界を拓く部分もあつたに違いないし、ニュータイプ同士の戦いとなると、結果的にサイコミュ兵器の性能ではなく、機体性能が重要になることは明白だからだ。

一方、サイコミュ兵器のチクノロジーに出現した地球連邦軍は、一年戦争後、機体側面にサイコミュを活用する方向で開発を進めていた。これは、一年戦争における日X・78ガンダムの成功がベースになっているのは明白だ。つまり、ニュータイプパイロットの乗る機体の性能向上を図る方式だ。結果的に軍縮によるモビルスーツの絶対数の減少から、一騎当千的な機体が求められたグリプス戦役のモビルスーツ開発事情と合致していた。

第二次ネオ・ジオン戦争以後変わるニュータイプ専用機

第一次ネオ・ジオン戦争から第二次ネオ・ジオン戦争において、ネオ・ジオンのモビルスーツのファンネル搭載数は大幅に減っている。これは、よりファンネルとモビルスーツの関係性、つまり安定性を重視したといえるだろう。同時にそれは、モビルスーツ自体の性能を底上げする効果を持つ新技術サイコミュフレームの登場とも無関係ではない。また、ファンネルなどのサイコミュ兵器の対策法が徐々に構築され

ていったという背景も考慮すべきだ。

この方向性の変化はつまり、ニュータイプ用モビルスーツと、そのパイロットの生還率の高さがあって、はじめにニュータイプ兵器が継続的に（安定的に）戦術体系の中に組み込まれる、という事実の表れであり、サイコミュ兵器を攻撃兵器から防御兵器主体へと変化させようということだ。それは、何も自機の防御という意味だけでなく、敵の攻撃から自軍のモビルスーツや艦艇などを守るという意味も含まれる。

実際、第二次ネオ・ジオン戦争時には、シャア・アズナブル、ギニュー・ガスも敵のミサイル兵器を複数同時に撃墜している。中には核ミサイルも混じっていたため、金星といえる大功績だったか、通常の攻撃であつても、自軍の被害を抑えるのに大きく貢献したことだろう。まさに、この時点で、もつとも正しいファンネルの使い方といえる。一方でニュータイプ機はその性質上、用兵としてもメインの兵器には使い難く、半ば遊軍化してしまつた。

結局のところニュータイプ機は割に合わない？

この防御兵器としてのファンネルの活用は、地球連邦軍の方が先んじていた。RX・93Vガンダムのフィン・ファンネルは、従来の攻撃兵器としての性質よりも防御兵器としての側面を

重視していた。しかし、こちらも遊軍的存在には変わりなかった。

このように、ニュータイプ専用機の位置付けは、当初は戦略的な存在だったものが、次第に戦術的な存在へと変化していった。そして第二次ネオ・ジオン戦争以後にもあり、対ニュータイプ技術の確立もあり、次第に戦術的な意味合いすらも薄まっていたことが伺え、ついには消えていった（技術的に満たされず、後年では試作機や実験機などが細々と開発されている）。最終的に、一對一になりがちなニュータイプは、兵器としては失格、ということなのかも知れない。

これは、ニュータイプと呼ばれた感応波を活発に出す人間が、その後の時代にいなくなつたわけではなく、感応波を使つた機械制御が単に陳腐化しただけだろう。そういう意味では、ニュータイプ専用機自体が時代の仇花といえ、まだ確立していない技術を戦略思想の中心に据えようと考えたジオン公国・ネオ・ジオンの戦略は、歴史観点からは無茶にしか映らない。だが、そうした曖昧な存在が必要ほど追い詰められていたともいえる。

ジオン・ダイクンのニュータイプ論は100年程度で多くの心から忘れ去られ、ニュータイプ兵器は、その特殊性ゆえ登場からわずか20〜30年程度で歴史の間に埋もれてしまったのだ。

MS & MA 設定資料

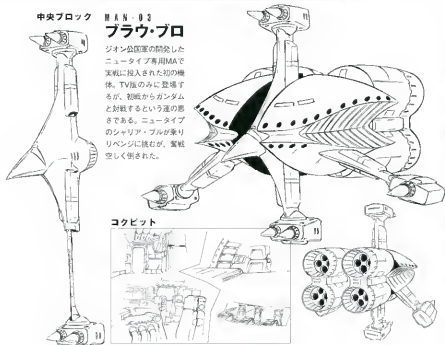
このページでは、映像作品やMSVなどの関連企画に登場した、MSとMAの設定資料を掲載。取り上げるのは本書のテーマに沿ってニュータイプ専用機を中心に、それに準ずる機体たち。映像作品から製作年代順に、関連企画は映像作品の後のという形で構成されており、それぞれの作品タイトルの後には年代を表記している。

中央ブロック

MSN-03

ブラウ・ブロ

ジオ公国軍の開発したニュータイプ専用MAで実戦に投入された初の機体。TV版のみに登場するが、初戦からガンダムと対戦するという運の悪きである。ニュータイプのシャリア・ブルが乗りリベンジに挑むが、撃破空しく倒された。



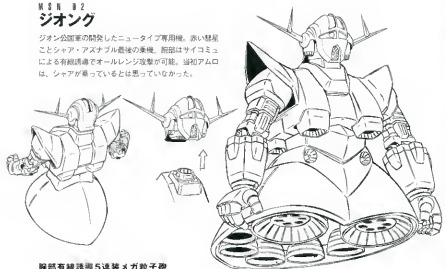
コクピット



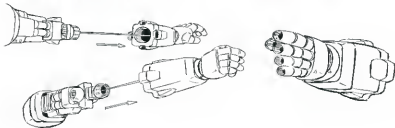
MSN-02

ジオング

ジオ公国軍の開発したニュータイプ専用機。赤い彗星ことシャア・アズナブル最後の乗機。腕部はサイコミュによる有線誘導でオールレンジ攻撃が可能。当初アムロは、シャアが乗っているとは思ってなかった。



腕部有線誘導5連装メガ粒子砲

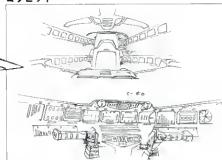


MAN 08

エルメス

サイコミュによる遠隔操作機台=ビットの実用化に成功したニュータイプ専用MA。攻撃はビットがメインで本体の武装はメガ粒子砲のみ。フララ・スンが搭乗し、アムロのガンダムと死闘を演じた。

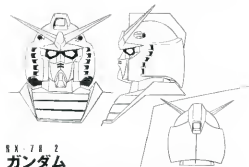
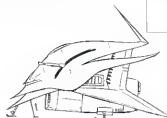
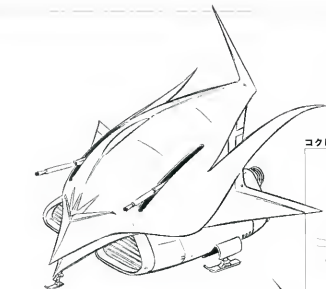
コクビット



ビット



↑ビットの先端部には、ザクのモノアイのようなセンサーが搭載されている。ただし、レール式ではなく、センサー自体が左右に回転する。



RX-78-2

ガンダム

連邦軍の試作MS。厳密に分類すると本機はニュータイプ専用機ではない。ただ、アムロ（ニュータイプ）のズバり抜けた反応速度と操縦技術に対応するためにマグネイト・コーティングが施されたガンダムは、一種のニュータイプ専用機といえるだろう。

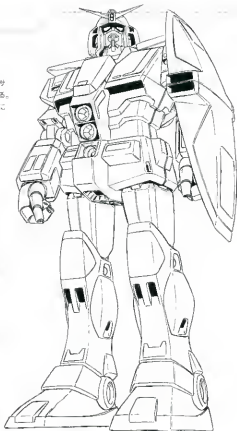
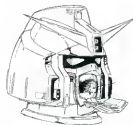
MAX 000

サイコ・ガンダム

ニュータイプ研究所のひとつ、ムラサメ研究所で開発された可変MA。機体制御にサイコミュを用いる。そのため、操縦者には相応のニュータイプ能力が必要とされる。作中でも、不在のフォウ・ムラサメに代わって出撃したベン・ウダーではまともに操作できなかった。また非人型時の形態はモビルフォートレスと呼ぶ。



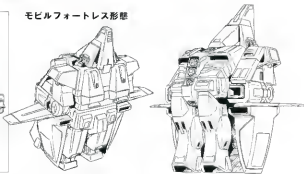
コクピットハッチ



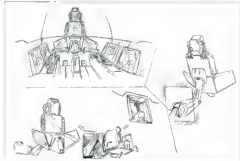
変形パターン



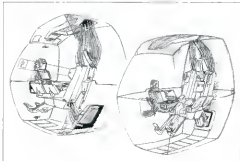
モビルフォートレス形態

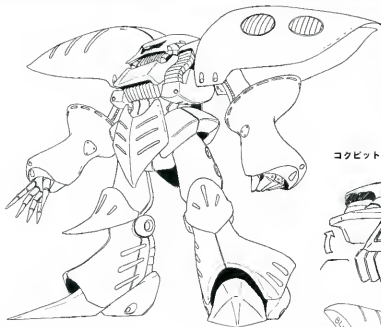


コクピットコンソール



コクピット全景

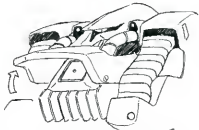




ANX 004 キュベレイ

ハマーン・カーン率いるジオン公国軍残党の一派であるアクシズ(ネオ・ジオン)が開発したニュータイプ専用機。エルメスの発展機として開発され、ビットの発展型であるファンネルを装備する。「Z」、「ZZ」でのハマーンの播磨機でもある。

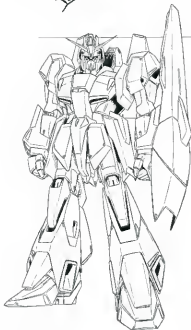
コクビットハッチ



ファンネル・コンテナ



ファンネル



MSZ-000 Zガンダム

エウゴとアナハイム・エレクトロニクス (AE) 社共同によるMS開発計画、Z計画で開発された可変MS。単機で大気圏突破可能なウェーブ・ライダー形態へ変形する。分類上はニュータイプ専用機ではないが、機体制御用のデバイスとして、サイコミュの一種のパイオ・センサーを搭載する。



ウェーブ・ライダー

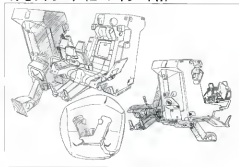


NRX-055

バウンド・ドック

地球連邦軍の可変MA。ニュータイプ専用機として開発され、やはり機体制御デバイスにサイコミュを用いている。初期のテスト機には、コクピット内にサブパイロット用のシートが設置されていた。ロザミア・バダムやジェリド・メサが搭乗した。グレーに塗装されたテスト機にはゲーツ・キャバカ搭乗。

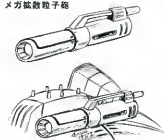
コクピットシート（コ・パイシート付）



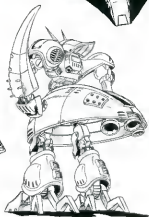
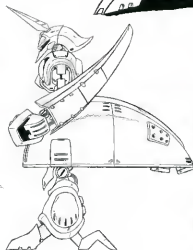
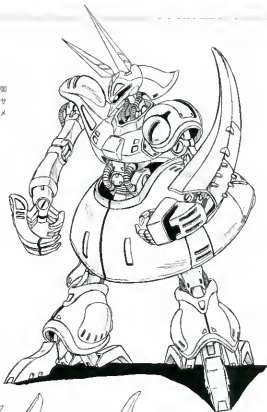
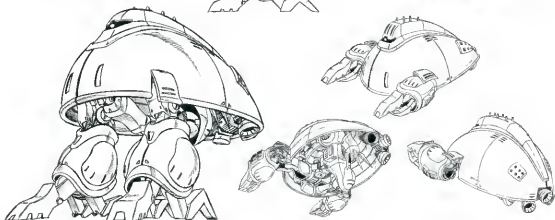
ビーム・ライフル

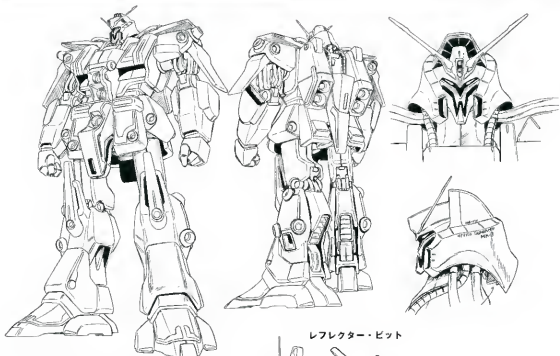


メガ拡散粒子砲



モビルアーマー形態





MAX 010

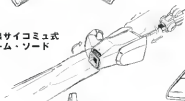
サイコ・ガンダムMk-II

サイコ・ガンダムの発展型。サイコミュによる機体閉鎖を
 踏襲するだけでなく、レフレクター・ビットやサイコミュ
 ビーム・ソードなどのサイコミュ兵器を装備する。『Z』
 ではロザミア・バダムの乗機として、次作の『ZZ』で
 はブルツォの搭乗機体として活躍した。

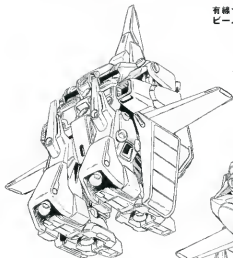
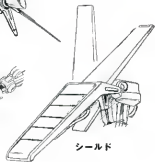
レフレクター・ビット



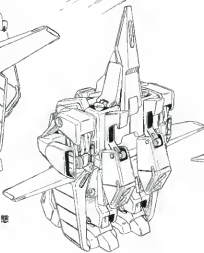
有線サイコミュ
 ビーム・ソード



シールド



モビルフォートレス形態



ビーム・ライフル



Eバック



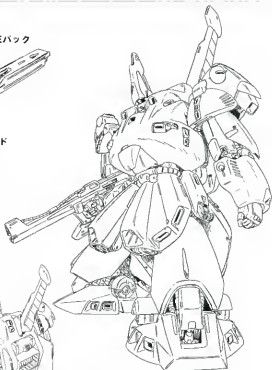
隠し腕



ビーム・ソード



↑フロントスカート
の裏面には隠し腕と呼
ばれるサブアームを備
える。これによりジ・
Oは、ビーム・ソード
の4本同時使用も可能だ。



PMX-003
ジ・O

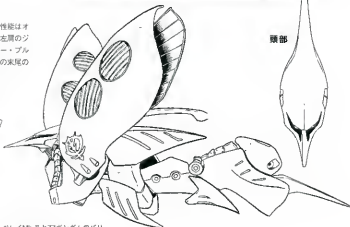
木星往還船ジュピトリスのキャプテンからティターンズに
転身したババアマス・シロッコの専用機。設計開発も彼自
身の手によるもので、外観とは裏腹に高い機動性を誇るニ
ュータイプ専用機で、機体の制衡にサイコミュを用いてい
る。'Z'におけるラスボスの存在の一機でもある。

AMX-004-2/3

キューベレイMk-II

キューベレイのマイナーチェンジタイプ。基本的な性能はオ
リジナルのキューベレイと差はほとんどなく、機体左側のジ
オンマークと配色が違う程度。作中では、エルピー・ブル
とブルツァが搭乗しているが、それぞれ型式番号の末尾の
数字が異なる（ブルは2、ブルツァは3）。

バリュートバック装備時

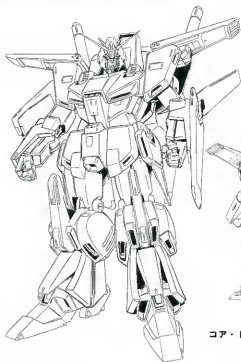


◆キューベレイMk-IIとZZガンダムのバリュ
ートバックは、実際には本編中に登場することは
なかったが、設定画としてはデザイン画が記さ
れている。幻の装備といえるだろう。

機動戦士ガンダムZZ [86年]

腰部



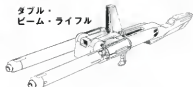


MSZ-010 ZZガンダム

Z計画によって開発された合体可変MS。機体制御にはZガンダムと同様にパイオ・センサーを用いており、搭乗者のニュータイプ能力で機体のポテンシャルが変わる。「ZZ」における2代目主役メカだが、主人公であるジュドーはZZガンダムの登場当初、Zガンダムに乗って出撃することも多かった。



ダブル・
ビーム・ライフル



コア・トップ



ネオ・コア・ファイター



Gフォートレス

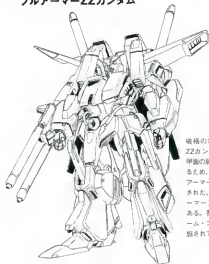


コア・ベース



■ZZガンダムにはガンダムのようなコア・フロ/ク・システムが採用されている。最大の違いは上半身と下半身にも同室機構が組み込まれ、それぞれが飛行形態として活動できる点。しかし、合体変形プロセスはかなり複雑なものとなっている。

FA-010S フルアーマーZZガンダム



戦場の攻撃力をもつZZガンダムだが、誤作動の危険性を解消するため、機体の各部にアーマーパーツが装着された。それがフルアーマーZZガンダムである。各機甲にはビーム・コーティングが施されている。

MSZ-010S 強化型ZZガンダム



フルアーマーZZガンダムの素体。強化パーツを装着するために機体各部の改修が行われている。目に見えて異なる部分は胸部アーマー、可変式シールド、腰のフロントアーマーと大型化された背中ミサイル・ポッドなど。



AMX-103 ハンマ・ハンマ

一般兵でも操作可能な準サイコミュを搭載した試作MS。攻撃力が非常に高く、マッシュマー・ゼロの来る本機は、Zガンダムを窮地に陥れた。しかし、Zガンダムとの戦いに敗れた後、作中には登場しなかった。

ビーム・サーベル



3連装メガ粒子砲
内蔵シールド



チルド・ファンネル



AMX-015 ゲーマルク

全身をメガ粒子砲とビーム兵器で武装し、マザー・ファンネルとチルド・ファンネルという、大量のファンネルを搭載するニュータイプ専用機。マッシュマーと同じく、相次ぐ失敗で強化人間にされたキャラ・スーンの搭乗機。

マザー・ファンネル

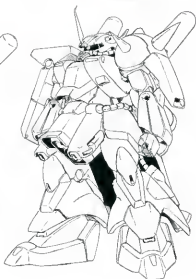


AMX-011S ザクⅢ改

ザクⅡの出力向上タイプ。ファンネルなどのサイコミュ兵器は持たないが、強化人間となったマッシュマー・ゼロ用にチューンが施されている。ドーベン・ウルフ複数機を相手に互角以上に戦う様子は、十分ニュータイプ専用機だ。



ビーム・ライフル





AMX-014

ドーベン・ウルフ

準サイコミュを搭載した量産MS。一般兵でもサイコミュ兵器の一種であるインコムなどが扱える。ラカン・ダカラン率いるスペース・ウルフ隊の機体は、グレミーの反乱時、グレミー側の主力として戦った。

メガ・ランチャー



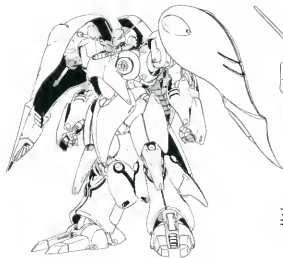
(ビーム・ライフル形態)

AMX-004G

量産型キュベレイ

キュベレイの量産タイプ。ファンネル・コンテナは大型化され、背中に2門アクティブ・カノンを装備。搭乗パイロットにはニュータイプ能力が必要とされ、エルピー・ブルのクローン体、通称「ブル・シリーズ」が乗る。

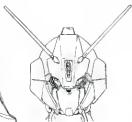
ファンネル・コンテナ



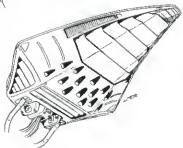
NZ 000

クイン・マンサ

ネオ・ジオンの開発したニュータイプ専用機。単体での機動力、戦闘力は言うまでもなく高く、頭頂高が40mにもなる巨体を誇る。だが、カテゴリーはMSである。主な搭乗者はブルター、グレミー・トト。



ファンネル・コンテナ

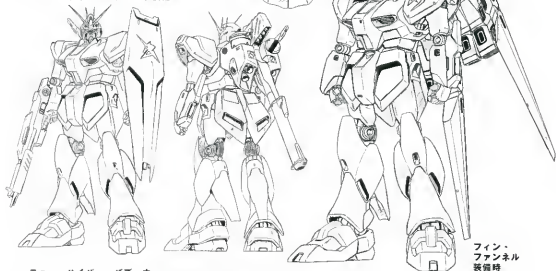


0088

vガンダム

ロンド・ベルのMS部隊長であるアムロ・レイ専用機。彼自身の設計で開発が進められ、AE社の月工場で製作された。サイコミュによる遠隔操作兵器、フィン・ファンネルを採用した遠距離戦の機体だ。しかし、小惑星アクリズ上における戦闘で未だ完成機とならなかった。

ビーム・ライフル シールド装備



フィン・ファンネル
装備時

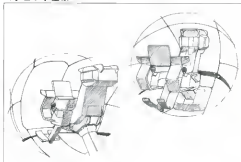
ニュー・ハイパー・バズーカ



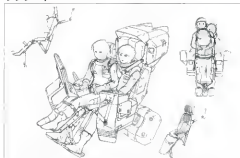
組立中のvガンダム



コクピット全景

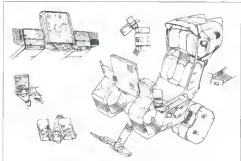


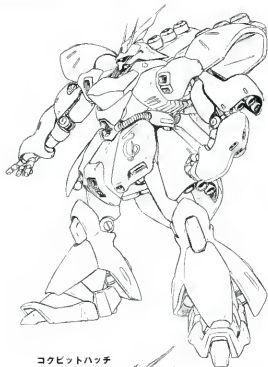
サブシート



↑月面のクラナダにあるアナハイム・エレクトロニクス社の工場からvガンダムを搬出する際、チェーン・アギが同乗できるようにサブシートが設けられた。増幅品というより別項で製造した品といえる。

コクピットシート





MSN-04 サザビー

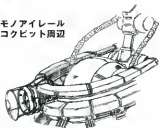
新生ネオ・ジオンの総帥、シャア・アズナブルの専用機。彼自身のパーソナルカラーである赤で塗装され、ファンネルを装備したニュータイプ専用MSだ。アムロ・レイとの15年ちかくにわたる因縁に決着を付けるために開発されたといっ



コクピットハッチ



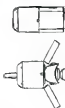
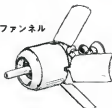
モノアイレール
コクピット周辺



脱出ポッド



ファンネル



ビーム・ショット・ライフル



ビーム・トマホーク



コクピットシート



↑↑シャアが乗るネオ・ジオンのニュータイプ専用機のコクピットシートは共通規格である。それゆえ、ヤクト・ドーガやq、アジールとサザビーのシートは同じ形状だ。左はサザビーの脱出ポッドで、コクピットブロックを丸ごと射出する。

MSN-03

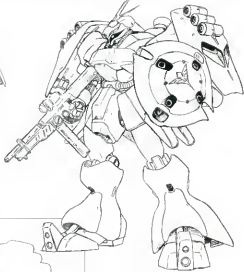
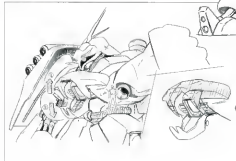
ヤクト・ドーガ

新生ネオ・ジオンのニュータイプ専用MS。過去のニュータイプ専用機より、ファンネルの搭載数は少ない。強化人間であるギニュー・ガスと、ウェス・バラヤ（エア）が搭乗。どちらも機体色は白、基本性能は同じ。ギニュー機はヤングダムとの戦いで大破し、ウェス機は戦間中に中破したが、後に「袖付き」で運用される。

ヤクト・ドーガ
ウェス機



コクピットハッチ



ビーム・アサルトライフル



MS-333

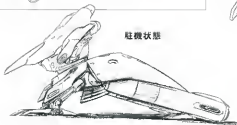
α・アジール

脚部のように見えるプロペラントタンク込みで全長108mという、ネオ・ジオンが開発した巨大MA。本体だけでも60m近くあるので、整備には専用施設。圧縮にはレールローラの軌道部に懸架する必要があり、決して使い勝手が良いとはいえない。ファンネルのサイズも巨大でジェネレーターを内蔵している。

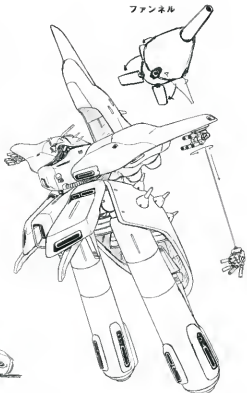
四面図



駐機状態



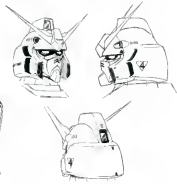
ファンネル



RX-78NT-1

アレックス

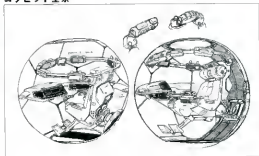
一年戦争末期に連邦軍によって開発されたニュータイプ専用機。サイド6のリボー・コロニーで最終テストが行われていたが、ジオン公国軍の特殊部隊（サイクロプス隊）の侵襲により大破した。作中でテストをしていたクリスのセリフからも相当反応が敏感な機体ということが窺える。



90mm
ガトリング・ガン



コクピット全景



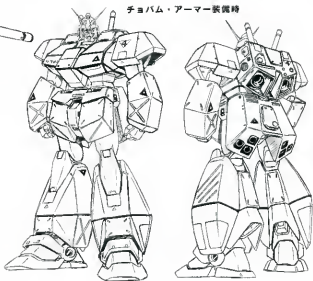
ビーム・サーベル



コクピットハッチ（チョバム・アーマー）

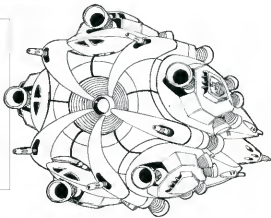


チョバム・アーマー装着時



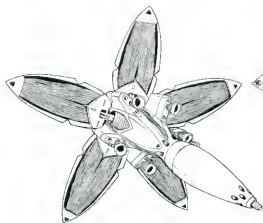
◆全身を複合装甲に覆われている状態。作中ではこの状態で組み立て作業が進められていた。クランプファースとの戦闘でチョバム・アーマー自体は破壊されてしまった。

コックピット全景



XMA-01 ラフレシア

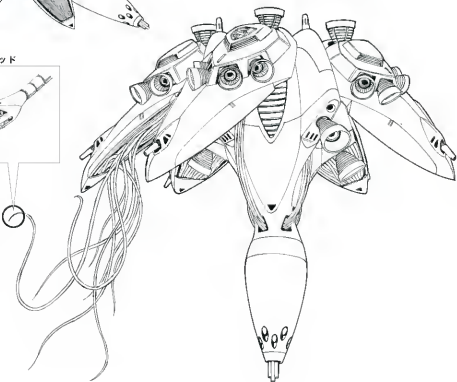
クロスボーン・バンガードが開発した新型サイコミュを搭載する巨大MA。無人殺戮兵器（バグ）と共に人類を抹正する「ラフレシア・プロジェクト」により企図された。しかし、この計画自体が秘匿されているため、その存在を知るのは組織のトップクラス、それも限られた人間だけだ。搭乗者は数隻面。



デンタクラ・ロッド



機体の各部分にあるバインダーの裏には、デンタクラ・ロッドが溝で収められている。必要に応じて外に伸ばすことが可能だ。先端にはチェーンソー状の刃物が付いていて、脆い機体を寸断する。かなりの強度があるだろうMSの装甲材の、ガンダリウム合金やラミック複合材だろうと置かず切りきざむ。

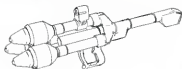




3連装シュトルム・ファウスト



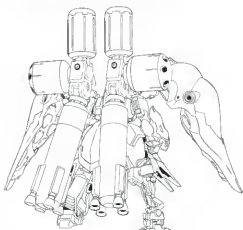
ハイパー・ビーム・シャベルン



改造ファンネル



◆これは元の状態。これを加工して左腕に取り付けている。



NZ-000

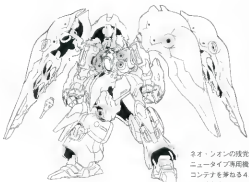
クシャトリヤ・リペアード

ネェル・アーガマに収容されていたクシャトリヤ・ベッセルングに、さらなる改修を施した機体。対ニュータイプ兵器（NT-D やサイコ・ジャマー）対策として、ファンネルのスラスターとグレナードの対頭を合体させた改造ファンネルを装備する。搭乗者はマリーダ・クルス。



NZ-000

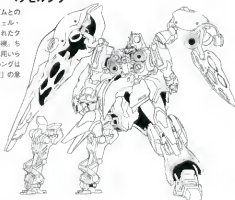
クシャトリヤ



NZ-000

クシャトリヤ・ベッセルング

ユニオンガンダムとの戦闘で中破し、ネェル・アーガマに回収されたクシャトリヤの改修機。ちなみに機体名称に用いられている「ベッセルング」はドイツ語で「回復」の意である。

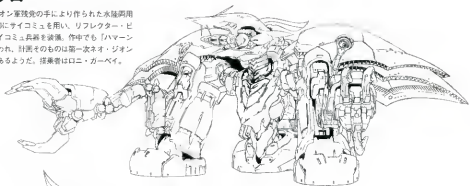


ネオ・ンオンの残党「増付き」のニュータイプ海兵機。ファンネルコンテナを兼ねる4基のバインダーが特徴的。ユニオンガンダムとの戦闘で行動不能になる。

AMX7

シャンプロ

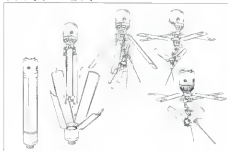
地球圏の旧ジオン軍残党の手により作られた水陸両用MA。機体制御にサイコミュを用い、リフレクター・ビットというサイコミュ兵器を装備。作中でも「ハマーンの遺産」と言われ、計画そのものは第一次ネオ・ジオン戦争の頃からあるようだ。搭乗者はロニー・ガーベ。



水中通航形態



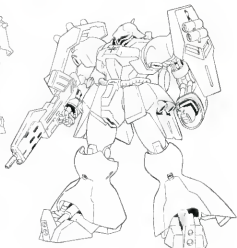
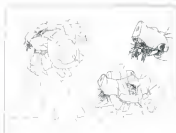
リフレクター・ビット



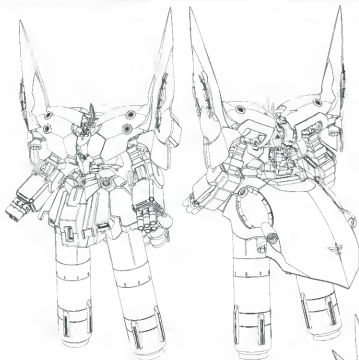
MHG03

ヤクト・ドーガ『袖付き』仕様

ネオ・ジオンのニュータイプ専用機。戦時中に破壊した機体（ウェス機）を台所事情が芳しくない「袖付き」が改修して使用した。損失した右腕などはギラ・ドーガの腕で代用。ファンネルも2基のみ。搭乗者は不明ながら、それなりの能力者と推察される。



★左図は「逆シャア」でウェスのヤクト・ドーガがダメージを受けた際を示した設定画。これを参考にして、「TUC」ではゲストとして登場することになった。

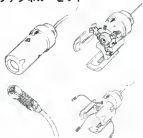


N Z - 0 0 0

ネオ・ジオング

MSのシナンジュをコア・ユニットとする巨大なMA。MSを内部に収容している以外、機体の構成はα・アジールに似ている。ただ、サイコ・フレームの共振現象を利用して疑似サイコ・フィールドを発生させるサイコ・シャードという特殊装備を搭載している。

ファンネル・ビット

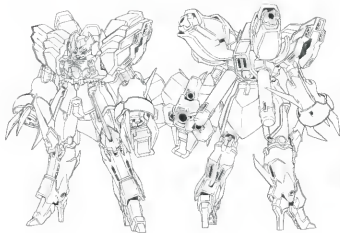


MS-003 シナンジュ

ネオ・ジオングのコア・ユニットであるMS。ユニコーンガンダムと兄弟機といえるフル・サイコ・フレーム機。[袖付き]の関節。フル・フロントルの搭乗機。

サイコ・シャード 展開状態

コアユニットであるシナンジュのサイコ・フレームと共振することで威力を発揮するネオ・ジオングの切り札だ。



Y A M 1 3 2

ローゼン・ズール

ネオ・ジオン残党「袖付き」のMS。分類としてはニュータイプ専用機ではなく、アンチニュータイプ専用機といえる。サイコ・フレームなどのニュータイプ用デバイス搭載機の動きを封じるため、サイコ・ジャマーを装備する。アンジェロ・ザウバーが搭乗。

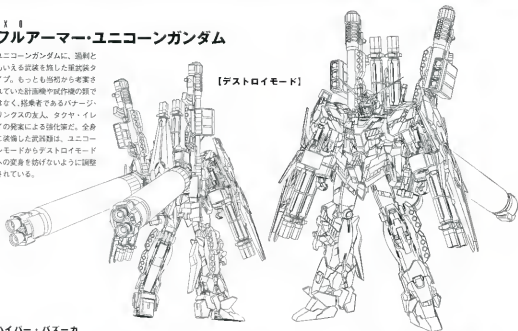


●ネール・アーガマ艦内におけるクシャトリヤ・パセレングとの戦闘で破壊された右腕を改修した姿。この状態でもサイコ・ジャマーは使用可能で、フルアーマー・ユニコーンガンダムと死闘を演じた。

フルアーマー・ユニコーンガンダム

ユニコーンガンダムに、過剰ともいえる武装を施した重武装タイプ。もともと当初から考案されていた計画機や試作機の種類ではなく、搭乗者であるバナー・リンクスの友人、タクヤ・イレイの発案による強化案だ。全身に装備した武器類は、ユニコーンモードからデストロイモードへの変身を妨げないように調整されている。

【デストロイモード】



ハイパー・バズーカ



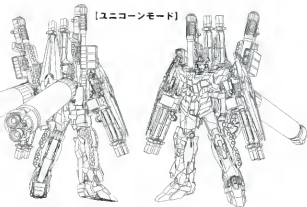
ビーム・ガトリングガン



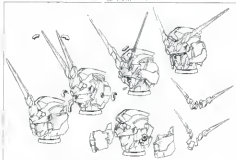
ビーム・マグナム



【ユニコーンモード】

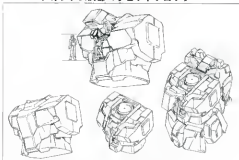


ユニコーンガンダムの頭部変形パターン



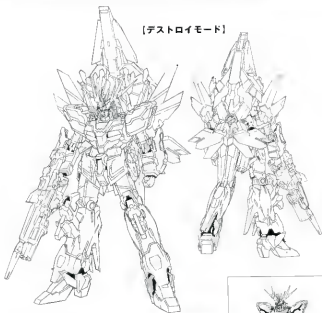
↑作中のユニコーンガンダムのほとんどの変身シーンは、3DCGモデリングによるが、各パーツのシリアル番号が記されている。

ユニコーンガンダム胸部コクピットブロック

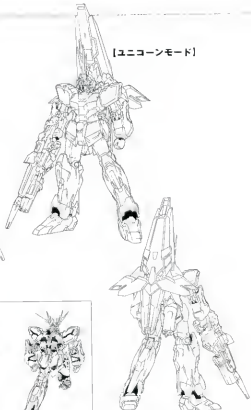


↑ユニコーンガンダムのコクピットの位置は通常のMSと同じく、胸部中央に設置されている。しかし、厳重なセキュリティロックが施されているので、外装から開放するのは難しい。

【デストロイモード】



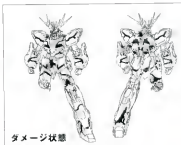
【ユニコーンモード】



RX-0 [1]

ユニコーンガンダム2号機 バンシィ・ノルン

ユニコーンガンダム2号機の改修型。搭乗者のリディ・マーセナスに合わせた調整が施され、後継機もアームド・アーマー-XC、アームド・アーマー-DE、リボルビング・ランチャーなどへ改められた。デストロイモードへの変身機能は残っている。



ダメージ状態

●バンシィ・ノルンが作中で受けるダメージを表した設定画。

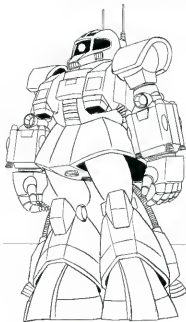
RX-014

シルヴァ・バレット

ネオ・ジオンのMS。ドーベン・ウルフを連邦軍が捕獲し、それをベースにAE社が開発した試作MS。ただ、ドーベン・ウルフは連邦軍のガンダムMK-V（オーガスタ研究所）を参考に開発しているので、堂々巡りで戻ってきた形になる。作中ではビスト財団のガエル・チャンが搭乗し、ネオ・ジオンと交戦した。

背面ユニットの無い状態





MS-06Z

サイコミュ試験型ザク

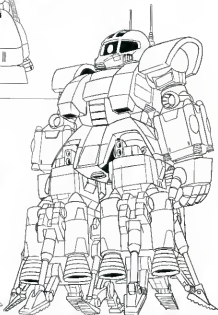
もともとはMS-16X（後のジオング）という計画機として企画されていたが、ベースにMS-06ザクIIを用いたためザクの名を冠する。しかし、ザクと同じなのは内部フレームくらいで、ほとんど別物（ジオング風）といえる。コードネームとして知られるビショッブは、本機を用いた実験、「ビショッブ計画」に由来している。実戦投入の記録については確認あり定かではない。



MSN-01

サイコミュ高機動試験型ザク

合計3機（数については確認あり）が製作されたサイコミュ試験型ザクのうち、2号機の脚部を熱核ロケット・エンジンに換装した機体。しかしテストの結果は芳しくなく、結局、ジオング開発が優先されるといってMSVらしい機体。当時は「高速機動型ザク」という製品名でプラモデル化された。



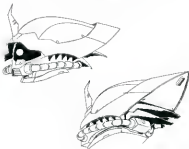
機動戦士ガンダム外伝 THE BLUE DESTINY [96年]



MS-06TX [EXAM]

イフリート改

ジオン公国軍で初めてEXAMシステムを搭載した機体。ニムバス・シュターゼンが搭乗する。しかし、ブルーディスティニー1号機との戦闘により大破。ゲーム前半のライバル機だが、同じくゲーム出身であるイフリートの改良型という出自が特徴。





RX-7880-1

ブルーディスティニー1号機

連邦軍のEXAM搭載機。開発者クルスト・モーゼス博士の連邦政府亡命で実現した機体。当初は陸戦型ジムで実験が行われていたが、機体がシステムの負荷に耐えられず、システムを内蔵する頭部を陸戦型ガンダムの体へ移植した。ゲーム前半、主人公のユウ・カジマ（プレイヤー）の機体。



RX-7880-2

ブルーディスティニー2号機

陸戦型ガンダムにEXAMを搭載したテスト機。1号機と異なり、初めからシステム搭載を念頭に開発されているので、ガンダムタイプの頭部を備える。完成直後、ジオン公国軍のニムバス・シューターに撃墜され、屑部が添く塗装された。ゲーム中におけるラスボスである。



RX-7880-3

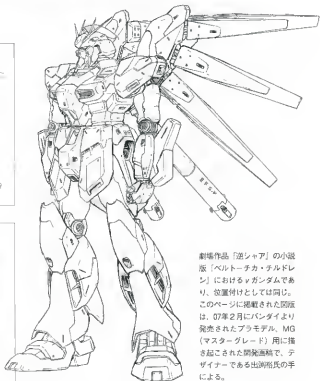
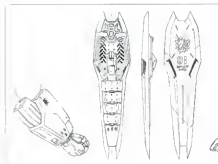
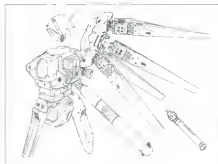
ブルーディスティニー3号機

2号機同様、EXAMを搭載したガンダムタイプ。2号機の予備機にあたるが、2号機と異なり本機にはリミッターが設けられている。本体のカラーリングは、急な現場投入により塗装が間に合わなかったため、ベースの陸戦型ガンダムのグレー系。ゲーム中のプレイヤーの2番目の機体。

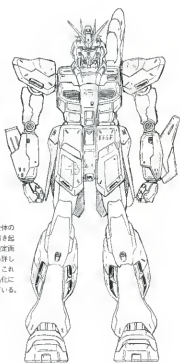
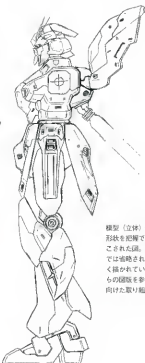
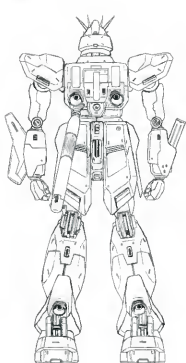


RX-93 v2

Hi-νガンダム



劇場作品「逆シャア」の小説版「ベルトーチカ・チルドレン」におけるνガンダムであり、位置付けとしては同じ。このページに掲載された図版は、07年2月にバンダイより発売されたプラモデル、MG（マスターグレード）用に描き起こされた開発画稿で、デザイナーである出淵裕氏の手による。



模型（立体）化に際して金体の形状を把握できるように描き起こされた図。アニメ用の設定画では省略されそうな箇所も詳しく描かれているのが特徴。これらの図版を参考にして製品化に向けた取り組みが行われている。



RX-104FF ペーネロペー

小説「閃光のハサウェイ」の主役メカ。AE社製ガンダム開発20周年を記念して開発された。ペーネロペーはオデュッセウスガンダムにフライト・ユニットを装備した姿の名称だ。主なパイロットは連邦軍キルケー部隊のレーン・エイム。デザインは森本錦恵氏。ゲーム化に際し新機に設定面が追加された。



フライト・ユニット



オデュッセウスガンダム

ビーム・ライフル



ファンネル・ミサイル



RX-105 ミガンダム

ペーネロペーと同時期に開発され、秘密結社マフティーへと譲渡された。操縦者はマフティーの指導者マフティー・ナビユ・エリンことハサウェイ・ノア（『逆襲のシャア』より成長した姿）。これらの機體は、00年に発売された『SDガンダムGジェネレーションF』と07年に登場したアーケードゲーム『エクストリームバース・フルブースト』用に、ペーネロペーと共に描き起こされた。



シールド



ミガンダム用マイクロミサイルポッド



ミガンダム 各ファンネル・ミサイル、ミサイル格納部



ビーム・ライフル



ファンネル・ミサイル



MS&MAスペック一覧

この項では本誌で採った代表的な機体の性能を一覧にまとめた。宇宙世紀年代(U.C.)を軸に登場した機体作品、MSVなどの関連作品ごとで分類した。なお、一部作品には略称を用いており、詳細はページ右下の略称記号参考のこと。

機体名	機体番号	全高 全長 (m)	本体重量 (t)	全機重量 (t)	ジェネレーター 出力 (kW)	スラスター 推力 (kg)	センサー 有効半径 (m)	装甲材質
ブラウ・ブロ	MAN-03	全高 62.4m 全長 60.2m	1,735.3t	2,602.6t	74,000kW	1760,000kg	156,000m	-
エルメス	MAN-08	全高 47.7m 全長 85.4m	163.7t	291.4t	14,200kW	645,200kg	245,000m	経理スチール合金
ジオング	MSN-02	17.3m	151.2t	231.9t	9,400kW	187,000kg	81,000m	経理スチール合金
ガンダム	RX-78	18.0m	43.4t	60.0t	1,380kW	55,500kg	5,700m	ルナ・チタニウム 合金
サイコミュ試験機ザク	MS-06Z	17.7m	60.4t	-	-	388,000kg	-	-
サイコミュ 高機動試験機ザク	MSN-01	17.2m	65.4t	-	-	-	-	-
アレックス	RX-78NT-1	18.0m	40.0t	72.5t	1,420kW	174,000kg	5,900m	ルナ・チタニウム 合金
キュベレイ	AMX-004	18.4m	35.2t	57.2t	1,820kW	61,800kg	10,900m	ガンダリウム合金
Zガンダム	MSZ-006	19.8m	28.7t	62.3t	2,020kW	112,600kg	14,000m	ガンダリウム合金
サイコ・ガンダム	MRX-009	40.0m	214.1t	388.6t	33,600kW	168,000kg	10,200m	ガンダリウム合金 など (詳細不明)
サイコ・ガンダム MK-II	MRX-010	39.98m	187.8t	283.9t	19,760kW	244,240kg	18,230m	ガンダリウム合金
パウンド・ドック	NRX-055	27.3m	82.7t	129.4t	2,260kW	145,800kg	9,840m	ガンダリウム合金
ジ・O	PMX-003	24.8m	57.3t	86.3t	1,840kW	135,400kg	11,300m	ガンダリウム合金
プロトタイプ サイコ・ガンダム	MRX-007	19.3m	77.4t	110.9t	3,700kW	81,100kg	11,300m	チタン合金 セラムミック複合材
量産型 サイコ・ガンダム	MRX-011	27.2m	83.0t	136.4t	15,280kW	91,100kg	10,300m	ガンダリウム合金
ZZガンダム	MSZ-0010	19.88m	32.7t	68.4t	7,340kW	101,000kg	16,200m	ガンダリウム合金
量産型キュベレイ	AMX-004G	18.4m	35.2t	62.1t	-	-	10,900m	-
ゲーマルク	AMX-015	22.0m	46.3t	78.7t	8,320kW	92,400kg	11,700m	ガンダリウム合金
ザク重改	AMX-011	21.0m	44.3t	71.4t	2,860kW	211,500kg	9,700m	ガンダリウム・ コンポジット
クイン・マンサ	NZ-000	39.2m	143.2t	264.7t	21,370kW	287,100kg	14,800m	ガンダリウム合金
ササビー	MSN-04	23m	30.5t	71.2t	3,960kW	133,000kg	22,600m	ガンダリウム合金
ヤクト・ドーガ	MSN-03	21.0m	28.0t	64.6t	3,340kW	82,000kg	20,500m	ガンダリウム合金
α・アジール	NZ-333	機体高 58.4m 全長 108.26m	128.6t	267.4t	19,830kW	2,217,000kg	23,800m	ガンダリウム合金
Vガンダム	RX-93	22.0m	27.9t	63.0t	2,980kW	97,800kg	21,300m	ガンダリウム合金
クシャトリヤ	NZ-668	22.3m	28.7t	74.02t	16,540kW	197,800kg	18,500m	ガンダリウム合金
シャムブロ	AMA-X7	機体高 31.7m 全長 31.7m	196.8t	283.9t	21,450kW	226,480kg	(2400m(地上) 240,000m(水中))	ガンダリウム合金
シナンジュ	MSN-06S	22.6m	25.2t	56.9t	3,240kW	128,800kg	23,600m	ガンダリウム合金
ネオ・ジオング	NZ-999	116.0m	153.8t	324.3t	35,660kW (測定不能)	28,827,500kg (測定不能)	-	ガンダリウム合金
フルアーマー・ ユニコーンガンダム	RX-0	19.7m (21.7m)	45.1t	76.9t	3,480kW (計画不能)	189,700kg (計画不能)	22,000m	ガンダリウム合金
ユニコーンガンダム2号機 バンシィ・バルン	RX-0 [N]	19.7m (21.7m)	27.3t	48.8t	4,520kW (計画不能)	185,380kg (計画不能)	22,000m	ガンダリウム合金
バーネロバー	RX-104FF	26.0m	36.4t	112.0t	4,050kW	168,000kg	32,000m	ガンダリウム合金
ミガンダム	RX-105	26.0m	32.0t	80.0t	3,980kW	160,000kg	30,000m	ガンダリウム合金
ラフレシア	XMA-01	37.5m	184.6t	263.7t	31,650kW	1,054,850kg	-	チタン合金 ハイセラミック 複合材

※あくまで目安としての全機重量。出力の比は、数値が低ければ実質的なパワーが高い。

全機重量：両方の比は、低い数値ほど機動性が高い(速い)と考えられる。どちらの数値もkg(換算)し小数点2位以下は四捨五入している。

Gundam UC Mechanic&World ep 1-3 / ep 4-6 / ep 7

グレートメカニクススペシャル
機動戦士ガンダムUC メカニック&ワールド
ep 1-3 / ep 4-6 / ep 7



A4判カラー付／定価各1,600円＋税

宇宙世紀の
最新モード
『機動戦士ガンダムUC』を完全解説



Gundam Build Fighters Gunpla Mechanics & Animation Art Work

グレートメカニクススペシャル
ガンダムビルドファイターズ
ガンブラメカニクス&アニメーション・アートワーク



A4判カラー付／定価2,000円＋税

激闘のガンブラバトルの
猛者たちが
再び集結!?

Gundam AGE Mechanic&World

グレートメカニクススペシャル
機動戦士ガンダムAGE
メカニック&ワールド



A4判カラー付／定価1,500円＋税

A.G.という世界、
百年の物語の
モビルスーツたち

Gundam SEED C.E. Mechanic& The World

グレートメカニクススペシャル
機動戦士ガンダムSEED
コスミック・イラ メカニック&ワールド



A4判カラー付／定価2,000円＋税

第一次連合・
プラント大戦
メカニックと世界完全ガイド!

グレートメカニクス・スペシャル モビルスーツ全集



モビルスーツ全集 ①
RGM-79
ジムBOOK
B4判カラー付
定価1,200円＋税



モビルスーツ全集 ②
水陸両用
モビルスーツ
BOOK
B4判カラー付
定価1,500円＋税



モビルスーツ全集 ③
MS-06
ザクBOOK
B4判カラー付
定価1,400円＋税



モビルスーツ全集 ④
MS-07-09
グフ&ドムBOOK
B4判カラー付
定価1,400円＋税



モビルスーツ全集 ⑤
RX-78 ガンダム&
V作戦BOOK
B4判カラー付
定価1,400円＋税



モビルスーツ全集 ⑥
MS-14 クラタ&
ジョーンズ特捜
BOOK
B4判カラー付
定価1,400円＋税



モビルスーツ全集 ⑦
Z計画&アナハイム・
エレクトロニクス技術
モビルスーツBOOK
B4判カラー付
定価1,500円＋税



モビルスーツ全集 ⑧
U.C.0083
地球・ジオン編
モビルスーツ
BOOK
B4判カラー付
定価1,400円＋税

グレートメカニック&関連書籍シリーズ

グレートメカニックG

2015 AUTUMN

A4サイズ/定価1,000円+税

2015年9月17日発売!

特集

「機動戦士ガンダム

鉄血のオルフェンズ」プレビュー

35年目の「ガンダム」特集

2015年10月号の新作特集 他

グレートメカニックG

2015 SUMMER

A4サイズ/定価1,000円+税

グレートメカニックG

2015 SPRING

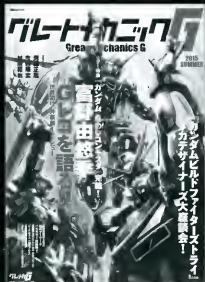
A4サイズ/定価1,000円+税



機動戦士ガンダム THE ORIGIN

- ガンダムビルドファイターズトライ
- ガンダムGのレコンギスタ
- 機動戦士ガンダム
- 機動のドラム大戦! 空軍一翼 インタビュー
- コードギアス 亡国のアキト
- 白鷺の遺言 アルジェウォルン
- タロスアンジュ 天使と竜の輪舞
- チンカイナイト
- INTERVIEWS

今川陽志/大庭秀典/菊池寛之 編



2014 WINTER

GREAT MECHANICS.DX31

グレートメカニック.DX31 B5サイズ/定価600円+税



ガンダムビルドファイターズトライ

- ガンダム Gのレコンギスタ
- 宇宙戦艦ヤマト2199 星を征する
- サ・ブレバット
- 宇宙戦艦ヤマトリウス
- 白鷺の遺言 アルジェウォルン
- アルドノア・ゼロ
- タロスアンジュ 天使と竜の輪舞
- フェアリー - 孔雀Y - とティガー戦車
- チンカイナイト
- INTERVIEWS

菊池寛之/佐藤竜雄 編

2014 AUTUMN

GREAT MECHANICS.DX30

グレートメカニック.DX30 B5サイズ/定価600円+税



ガンダム Gのレコンギスタ

ようこそ! リギルド・センチュリーへ!

- ガンダムビルドファイターズ
- 科学戦艦ヤマト2199 星を征する
- ガールズパニック
- キャプテン・ゲース
- バディ・コンプレックス
- プレイトフレイド
- アルドノア・ゼロ
- 宇宙戦艦ヤマト2199
- INTERVIEWS

菊池寛之/菊池寛之/宮永真介 編

「ガンダム Gのレコンギスタ」完結!

高野由悠季 GRECOを語る!!

「ガンダムビルドファイターズトライ」

メカデザイナーズ大賞授賞!

- 機動戦艦ヤマト2199 星を征する
- 機動戦士ガンダム THE ORIGIN
- コードギアス 亡国のアキト
- 反逆の翼 新機軸
- 機動のドラム大戦! 空軍一翼 インタビュー
- アタシオンロコ
- INTERVIEWS

河原正治/今川陽志/菊池寛之 編

バックナンバーをご希望の方は、お近くの書店にご注文ください。

双葉社

〒103-8249

東京都千代田区千代田3-2-1

TEL 03-5561-4116 (営業)

http://www.futaba.co.jp/

(双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます)

※書店・目下以外に、雑誌・FAX文、はがきでもご購入いただけます。

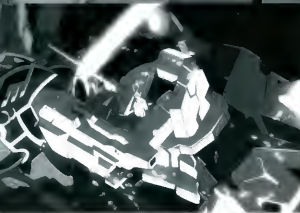
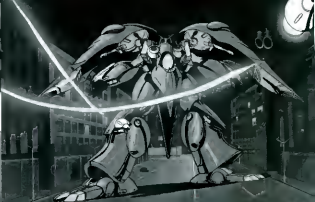
ブックサービス (営業時間: 9時~18時)

●電話: 0120-29-9625 (携帯電話も可)

●FAX: 0120-29-9635

●はがき: 〒101-8796 神田支店郵便局私書箱82号 ブックサービス係

いづれの組合も「社名 (双葉社)、タイトル、購入価格、定価および発行、氏名、電話番号」をお知らせください。



編集

オフィスJB
飯田幸夫
豊村保行
宮崎友也佳

堀和則 (双葉社)

執筆

河合宏之
佐々木賢介
市ヶ谷ハジメ
南達雄一郎
やすゆきゆたか

表紙イラスト

森下直純

本文イラスト

森下直純
船越裕

デジラマ

Robographer

Art Director

成宮英佳
(I'll Products)

Designer

栗田茜
藤田祐樹
森聖珠音
谷村昌沙
(I'll Products)

スーパーバイザー

山崎努

監修・協力

株式会社サンライズ

双葉社MOOK
クレートメカニク・スペシャル
モビルスーツ全集⑨

ニュータイプ専用機 BOOK

2015年9月9日発行

編集人 二之宮隆
発行人 赤坂生
発行所 株式会社双葉社

〒162-8540
東京都新宿区東五軒町3-28

営業 ☎03-5261-4818

編集 ☎03-5261-4869

<http://www.futabasha.co.jp/>

(双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます)

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

北海道・北丁の場合は送料双葉社負担でお取り替えいたします。『新作物』にてお取り替えください。ただし、古書店で購入したものについてはお取り替えできません。

☎03-5261-4822 (制作部)

※本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上の例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に複製してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

※定価はカバーに表示しております。

© 創造・サンライズ

© FUTABASHA 2015 Printed in Japan



モビルスーツ全集①
RGM-79
ジムBOOK
本体1,200円+税



モビルスーツ全集②
**水陸両用モビルスーツ
BOOK**
本体1,400円+税



モビルスーツ全集③
MS-06
ザクBOOK
本体1,400円+税



モビルスーツ全集④
MS-07/09
グフ&ドムBOOK
本体1,400円+税



モビルスーツ全集⑤
RX-78
**ガンダム&V作戦
BOOK**
本体1,400円+税



モビルスーツ全集⑥
MS-14
**ゲルググ&ジオン
特殊機BOOK**
本体1,400円+税



モビルスーツ全集⑦
Z計画
&アナハイム・
エレクトロニクス社製
モビルスーツBOOK
本体1,400円+税



モビルスーツ全集⑧
U.C.0083-U.C.0096
**ネオ・ジオン製
モビルスーツBOOK**
本体1,400円+税

NEW TYPE DEDICATED MACHINE

双葉社MOOK

**GREAT
MECHANICS**
グレートメカニクス
スペシャル



モビルスーツ
全集⑨
ニュータイプ
専用機
BOOK

ニュータイプ 専用機 BOOK





レスキュー・メカニックス・シミュレーション モビルスーツ全集⑨ ニュータイプ専用機BOOK 双葉社

NEW TYPE DEDICATED MACHINE

双葉社MOOK

**GREAT
MECHANICS**
グレートメカニクス
スペシャル



モビルスーツ
全集⑨
ニュータイプ
専用機
BOOK



ニュータイプ 専用機 BOOK

MAN-08エルメス、AMX-004キューベレイ、RX-93 νガンダム、
RX-0ユニコーンガンダム等、ニュータイプ専用モビルスーツ
モビルアーマーたちを徹底解説!

ニュータイプ専用MS/MA専門書

一冊まるごと

NT専用機本

MAN-08エルメス
RX-78MF-1 アレックス
MSZ-006 Zガンダム

PMX-003 ジ・O
AMX-004キューベレイ
NZ-00クイン・マンサ

MSN-04サザビー
RX-93 νガンダム
RX-0 ユニコーンガンダム etc





©制作・サンライズ

定価：本体1400円＋税

雑誌63982-67

Printed in Japan ©Putabasha 2015

ISBN978-4-575-46490-0
C9476 ¥1400E



9784575464900



1929476014009

グレートメカニクス・スペシャルモビルスーツ全集⑨ ニュータイプ専用機BOOK

一冊まるごとN-T専用機本双葉社

NEW TYPE

DEDICATED MACHINE

双葉社MOOK

GREAT MECHANICS
ガンダムメカニクス
NEW TYPE



モビルスーツ
全集⑨
ニュータイプ
専用機
BOOK

ニュータイプ専用機

B O O K





©創通・サンライズ

定価：本体1400円＋税

雑誌63982-57

Printed in Japan © Bandai 2015



9784575464900



ISBN978-4-575-46490-0
C9476 ¥1400E

1929476014009

グレートキャシク・スチャルモビルスーツ全集⑨ ニュータイプ専用機 BOOK

双葉社